

新堂遺跡 VI

—京奈和自動車道「御所区間」建設に伴う発掘調査報告書—

2022年12月

奈良県橿原市役所

序

ここに新堂遺跡の発掘調査報告書を『橿原市埋蔵文化財調査報告第18冊 新堂遺跡Ⅵ』として刊行します。本書は、奈良県橿原市新堂町に所在する新堂遺跡において橿原市教育委員会が平成20年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

橿原市西部では、京奈和自動車道の建設に伴う発掘調査により、縄文時代から中世にかけて、相次いで新たな遺跡が発見されています。新堂遺跡もその一つで、渡来系遺物を含む古墳時代中期の特徴的な遺物が多数発見される等、多くの新知見が得られています。中でも古墳時代中期の渡来系遺物は国内外の研究者やメディアから度々注目される等、その重要性が広く知られています。

本書で報告を行う橿教委2008-2次調査では、古墳時代初頭の河道の中に構築された大規模なしがらみ遺構が発見されました。河の流れを制御し、より暮らしやすい環境を作ろうとした努力の証です。水辺に暮らす新堂遺跡の人々の姿が浮かび上がってきます。さらに、今回の調査でも古墳時代中期の遺構と遺物が見つかっています。当地域の歴史を考える上で重要な成果を得ることができました。

最後になりましたが、現地の発掘調査並びに本書の刊行にあたってご協力いただいた関係諸氏ならび諸機関に厚く御礼申し上げますと共に、本書が多くの方々に活用され、遺跡の重要性を周知する機縁となることを願います。

令和4年12月20日

橿原市長 亀田 忠彦

例 言

- 1 本書は、奈良県橿原市新堂町に所在する新堂（しんどう）遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書で報告を行う発掘調査は、京奈和自動車道（御所区間）建設に伴って実施している。国土交通省 近畿地方整備局 奈良国道事務所の委託を受け、奈良県教育委員会の指導のもと、橿原市役所・橿原市教育委員会が発掘調査及び整理・報告作業を担当している。
- 3 発掘調査及び整理・報告作業にかかる費用については、国土交通省 近畿地方整備局 奈良国道事務所が負担している。
- 4 現地調査期間は平成 20（2008）年 7 月 2 日～平成 20（2008）年 12 月 26 日である。
- 5 遺物整理・報告書作成期間は令和 2（2020）年度～令和 4（2022）年度である。橿原市では令和 3 年度まで埋蔵文化財行政を教育委員会文化財課が担当しており、令和 4 年度からは同担当部署が市長部局へと移管となり魅力創造部 文化財保存活用課が担当している。
- 6 現地調査時の体制は、橿原市教育委員会 文化財課長 齊藤明彦、課長補佐 吉岡澄久、係長 濱口和弘、主査 米田一、技術員 石坂泰士である。現地調査は米田・石坂が担当している。
遺物整理時の体制は、令和 2・3 年度が文化財課長 竹田正則、課長補佐 露口真広・松井一晃、統括調整員 平岩欣太・横関明世、副統括 齊藤明彦、主査 石坂泰士・杉山真由美、技師 上井佐妃、令和 4 年度が文化財保存活用課長 露口真広、課長補佐 松井一晃・平岩欣太、保存計画係長 石坂泰士、技師 上井佐妃である。整理作業は齊藤・石坂・杉山・上井が主に担当した。
- 7 発掘調査及び整理作業を実施するにあたって、地元各位をはじめ、国土交通省 近畿地方整備局 奈良国道事務所、独立行政法人奈良文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所より多大な御協力を得た。記して感謝申し上げたい。
- 8 出土遺物をはじめ調査記録は、橿原市役所文化財保存活用課で保管している。
- 9 本書所収の写真のうち、現場調査写真は調査担当者が撮影を行った。遺物写真は株式会社地域文化財研究所が撮影を行った。
- 10 本書の執筆および編集作業は石坂が担当した。

凡 例

- 1 本書で示す方位は座標北を使用した。座標値は世界測地系（平面直角座標第Ⅵ系）に基づく。
- 2 写真図版に掲載している遺物の縮尺率は任意である。
- 3 遺構・遺物の図面縮尺は各図に示している。
- 4 遺構断面図の標高値はメートル表記である。小数点以下の記述が無い場合、小数点下の値は0である。標高値は東京湾平均海面（T.P.）からの値である。
- 5 遺物実測図の番号は、本書全体の通し番号で示している。図版の遺物番号もこれと一致している。
- 6 土器の実測図については、須恵器の断面を黒塗りで、その他の土器は断面を白抜きで、それぞれ表現している。
- 7 掲載している土器の拓本図は、特に注釈の無い限りは外面の拓本である。

目 次

序	i
例言	ii
凡例	iii
目次	iv
挿図目次	v
第1章 調査の経過	
第1節 調査に係る経緯	1
第2節 発掘作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査の成果	
第1節 調査の方法	10
第2節 基本層序	12
第3節 遺構	21
第4節 遺物	58
第4章 総括	
第1節 調査成果のまとめ	94
第2節 周辺の遺跡と環境	97
報告書抄録	98
図版	

挿 図 目 次

図 1	調査地位置図	5
図 2	調査地周辺遺跡地図 (S = 1/12,500。遺跡範囲は 2022 年度当初の内容)	7
図 3	調査地周辺の地形と発掘調査地点 (S = 1/2,500)	8
図 4	調査区区割図 (S = 1/600)	10
図 5	調査区北壁西半部土層断面図① (S = 1/50)	13
図 6	調査区北壁西半部土層断面図② (S = 1/50)	14
図 7	調査区北壁中央部拡張区土層断面図 (S = 1/50)	15
図 8	調査区北壁東半部土層断面図① (S = 1/50)	16
図 9	調査区北壁東半部土層断面図② (S = 1/50)	17
図 10	調査区東壁土層断面図① (S = 1/50)	18
図 11	調査区東壁土層断面図② (S = 1/50)	19
図 12	調査区東壁土層断面図③ (S = 1/50)	20
図 13	平安時代後期～鎌倉時代遺構配置図 (S = 1/400)	22
図 14	1012SX 土層断面図 (S = 1/40)	23
図 15	弥生時代～古墳時代遺構配置図① (S = 1/400)	25
図 16	弥生時代～古墳時代遺構配置図② (S = 1/400)	26
図 17	古墳時代中期遺構配置図 (S = 1/400)	27
図 18	1004SK・1006SK・1007SK 平面・断面図 (S = 1/40)	28
図 19	1006SK・1007SK 平面・断面図 (S = 1/20)	29
図 20	1003SK・1010SK・1024SK 断面図 (S = 1/40)	29
図 21	1011SK 平面・断面図 (S = 1/30)	30
図 22	1018SK 平面・断面図 (S = 1/20)	31
図 23	1019SK・1021SK 平面・断面図 (S = 1/40)	32
図 24	1020SK 平面・断面図 (S = 1/40)	33
図 25	1023SK 平面・断面図 (S = 1/40)	33
図 26	1030SK 平面・断面図 (S = 1/40)	34
図 27	1017SX 平面・断面図 (S = 1/20)	35
図 28	1033SX 断面図 (S = 1/40)	35
図 29	SP 断面図① (S = 1/40)	36
図 30	SP 断面図② (S = 1/40)	37
図 31	SP 断面図③ (S = 1/40)	38
図 32	161SP 平面・断面図 (S = 1/20)	38
図 33	調査区南東部 土器溜まり平面図 (S = 1/20)	39
図 34	1013NR・1001SD 平面図 (S = 1/200)	40
図 35	1013NR 北半部平面図 (S = 1/100)	41
図 36	1013NR 大群北面土層断面図① (S = 1/40)	42
図 37	1013NR 大群北面土層断面図② (S = 1/40)	43
図 38	1013NR しがらみ 1 平面図 (S = 1/40)	45
図 39	1013NR しがらみ 1 拡大平面図① (S = 1/20)	46
図 40	1013NR しがらみ 1 拡大平面図② (S = 1/20)	47
図 41	1013NR しがらみ 1 立面・土層断面図 (S = 1/40)	48
図 42	1013NR しがらみ 1 拡大立面図① (S = 1/20)	49
図 43	1013NR しがらみ 1 拡大立面図② (S = 1/20)	50
図 44	1013NR 大群以北縦断面図 (S = 1/50)	51
図 45	1001SD 平面図 (S = 1/100)	53
図 46	1001SD 北半部断面図 (S = 1/40)	54
図 47	1001SD 木樋出土状況図 (S = 1/40)	55

図 48	1001SD 木樋両端部断面図 (S = 1/40)	56
図 49	1001SD 木樋南隣堰立面図 (S = 1/40)	56
図 50	1008SD 断面図 (S = 1/40)	57
図 51	耕作溝出土遺物 (S = 1/4)	59
図 52	1012SX 出土遺物 (S = 1/4)	60
図 53	1013NR 最上層出土遺物 (S = 1/4)	61
図 54	1003SK 出土遺物 (S = 1/4)	62
図 55	1004SK 出土遺物 (S = 1/4)	62
図 56	1004SK (古) 出土遺物 (S = 1/4)	63
図 57	1006SK (古) 出土遺物 (S = 1/4)	63
図 58	1007SK 出土遺物 (S = 1/4・1/8)	64
図 59	1010SK 出土遺物 (S = 1/4)	64
図 60	1011SK 出土遺物 (S = 1/4)	65
図 61	1018SK 出土遺物 (S = 1/4)	66
図 62	1019SK 出土遺物 (S = 1/4・1/2)	67
図 63	1020SK 出土遺物 (S = 1/4)	68
図 64	1021SK 出土遺物 (S = 1/4)	69
図 65	1023SK 出土遺物 (S = 1/4)	70
図 66	1028SK 出土遺物 (S = 1/4)	70
図 67	1030SK 出土遺物① (S = 1/4)	71
図 68	1030SK 出土遺物② (S = 1/4)	72
図 69	1016SX 出土遺物 (S = 1/4)	73
図 70	1017SX 出土遺物 (S = 1/4)	73
図 71	1033SX 出土遺物 (S = 1/4)	73
図 72	018SP 出土遺物 (S = 1/4)	73
図 73	161SP 出土遺物 (S = 1/4)	74
図 74	SP 一括出土遺物 (S = 1/4・1/2)	74
図 75	土器溜まり出土遺物 (S = 1/4)	75
図 76	1013NR 上層出土遺物 (S = 1/4)	76
図 77	1013NR 下層出土遺物 (S = 1/4)	78
図 78	1013NR しからみ 1 出土遺物① (S = 1/4)	79
図 79	1013NR しからみ 1 出土遺物② (S = 1/4)	80
図 80	1013NR しからみ 2・3 出土遺物 (S = 1/4・1/2)	81
図 81	1013NR 一括出土遺物① (S = 1/4)	82
図 82	1013NR 一括出土遺物② (S = 1/4・1/2)	84
図 83	1013NR 出土木製品① (S = 1/4)	85
図 84	1013NR 出土木製品② (S = 1/4)	86
図 85	1001SD (新) 出土遺物 (S = 1/4)	87
図 86	1001SD (古) 出土遺物 (S = 1/4)	88
図 87	1001SD 出土杭 (S = 1/10)	89
図 88	1025SX 出土遺物 (S = 1/4)	90
図 89	1026SX 出土遺物 (S = 1/4・1/2)	90
図 90	基本層序 V 層出土遺物 (S = 1/4・1/2)	90
図 91	遺構面清掃時出土遺物 (S = 1/4・1/2)	91
図 92	排水溝掘削時出土遺物 (S = 1/4)	92
図 93	重機掘削出土遺物 (S = 1/4)	93
図 94	新堂遺跡・東坊城遺跡周辺の調査地と河道復元図 (S = 1/3,000)	96

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に係る経緯

本書は、京奈和自動車道建設に伴って実施した新堂遺跡（榑教委 2008-2 次調査）の発掘調査報告書である。

京奈和自動車道は、京都・奈良・和歌山を結ぶ自動車専用道で、国土交通省により各地で建設が進められている。奈良盆地内の京奈和自動車道は、令和 3（2021）年度当初時点で、大和御所道路「大和区間」のうち郡山下ツ道ジャンクションから榑原北インターチェンジまで開通・供用している。その南にあたる「御所区間」では残されていた御所南インターチェンジから五条北インターチェンジまでの区間が平成 29（2017）年 8 月に供用されたことで榑原高田インターチェンジ以南の区域が全線開通となり、奈良県と和歌山県の地域間連携に貢献している。

榑原市域における京奈和自動車道建設に伴う本格的な調査は、国道 24 号線より南において昭和 63（1988）年より断続的に実施されている。当教育委員会では奈良県教育委員会の依頼を受け、榑原バイパスと国道 24 号線の接続部から南の御所インターチェンジまでの距離約 5 km の区間を対象に、平成 13（2001）年度から平成 22（2010）年度にわたり発掘調査を実施した。同区間は大和高田バイパスと交差する榑原高田インターチェンジを境として、北が「大和区間」、南が「御所区間」となる。発掘調査を実施する区域の分担については、国土交通省、奈良県教育委員会、奈良県立榑原考古学研究所、大和高田市教育委員会、御所市教育委員会及び榑原市教育委員会の協議の元で決定された。

当市域内における京奈和自動車道の建設予定地では、それまで本格的な発掘調査が行われておらず、遺跡の詳細が不明、あるいは埋蔵文化財の包蔵地外とされてきた地域が大半であった。しかし京奈和自動車道建設を契機とする一連の発掘調査によって、遺跡の範囲・内容が変更される、あるいは新たな遺跡の存在が認識される発見が相次いだ。

榑原市教育委員会では、調査年度を西暦で表し、その年度内に行われた発掘調査名称を年度一調査回数で示している。本書で報告を行う調査に対しては、榑教委 2008-2 次調査という番号を付与している。調査記録や出土遺物には、この番号を記して整理・保管している。

新堂遺跡は、「大和区間」と「御所区間」にまたがる範囲に位置する。本書で報告を行う発掘調査は、現在の榑原高田インターチェンジから南西に約 50 m の地点での調査である。新堂遺跡では京奈和自動車道建設に伴う発掘調査を、榑原市教育委員会が平成 13（2001）年度から平成 22（2010）年度にかけて実施している。調査開始時点では西新堂遺跡という名称の遺跡であったが、周辺における調査の積み重ねを受けて平成 17（2005）年 8 月に新堂遺跡への改称及び遺跡内容・範囲の変更が行われた。なお、新堂遺跡の範囲は平成 26（2014）年にさらに北西へと広がっている。図 2 の遺跡地図では令和 4（2022）年度当初時点での範囲を示している。

榑教委 2008-2 次調査地点は、新堂遺跡の南部に位置する。調査地の小字名は敷地西半が六反田、東半が宮ノ庄である。調査時には新堂遺跡 六反田・宮ノ庄地区との名称も用いている。字・六反田および宮ノ庄は、どちらも南北方向に長い水田地割である。敷地西半は調査前まで水田としての利用が継続しており、一方で敷地東半は宅地化された状態であった。

第2節 発掘作業の経過

本発掘調査は平成20(2008)年7月2日から平成20(2008)年12月26日までの期間実施した。実働日数は109日を数える。その間、作業員は延べ2205人を要した。調査の日々の記録は、以下の調査日誌抄録に掲げた。

- 平成20(2008)年7月2日(水)
本日より調査開始。調査区設定。資材搬入。西側から重機掘削開始。表土(造成前の水田耕土)、旧耕土下の暗褐色粘質土上面で遺構検出を行う。調査区北西隅で砂層を埋土とする幅2m以上の溝を検出。
- 7月3日(木)
重機掘削。調査区縁辺に排水溝を人力で掘削。
- 7月4日(金)
調査区北辺を重機掘削。調査区北東部で砂層を埋土とする河道を検出。周辺調査で確認している古墳時代の河道と思われる。重機掘削中に土師器、韓式土器(甗)、製塩土器が出土。
- 7月7日(月)
重機掘削。本日から掘削土を場外搬出開始。
- 7月8日(火)
雨天の為、掘削土の場外搬出作業を中心に行う。
- 7月9日(水)
重機掘削。排水溝掘削。降雨および地下からの湧水により排水が追いつかない状況。
- 7月10日(木)
重機掘削。掘削土の場外搬出。
- 7月11日(金)
重機掘削。掘削土の場外搬出。仮設電気引込作業が終わったため、水中ポンプ増設等の排水環境の整備を行う。
- 7月14日(月)
重機掘削。遺構面精査。
- 7月15日(火)
重機掘削。上層遺構(素掘り耕作溝群)の掘削を開始。耕作溝は複数時期があり、埋土も異なる。耕作溝と同一面で検出される下層遺構も存在する。
- 7月16日(水)
重機掘削。遺構精査、耕作溝の掘削。
- 7月17日(木)
重機による排水養生、場外搬出作業。遺構精査、耕作溝の掘削。
- 7月18日(金)
強い雨の為、現場作業中止。排水に関する養生作業のみ実施。
- 7月22日(火)
遺構精査、耕作溝の掘削。調査区北側中央部、耕作溝の他にピットも複数存在することを確認。また砂質土を埋土とする斜行溝も存在する。測量業者によるメッシュ杭打設作業。
- 7月23日(水)
遺構精査、耕作溝の掘削。調査区中央部の大型攪乱の除去。廃材等が廃棄されている。測量業者によるメッシュ杭打設作業、終了。
- 7月24日(木)
遺構精査、耕作溝の掘削。攪乱下で溝状遺構を検出。調査区東部の河道の西側で土坑やピットの存在を確認。
- 7月25日(金)
遺構精査、耕作溝の掘削。調査区北東部の河道上面でピットを複数検出。
- 7月28日(月)
遺構精査、耕作溝の掘削。遺構配置図作成開始。14時過ぎから降雨。調査区内での作業を中止し、周辺環境整備作業を行う。
- 7月29日(火)
遺構精査、耕作溝の掘削。調査区南東部にも下層遺構が存在することを確認。
- 7月30日(水)
遺構精査、耕作溝の掘削。
- 7月31日(木)
遺構精査、耕作溝の掘削。耕作溝を完掘。
- 8月4日(月)
上層遺構完掘・下層遺構検出状況写真の撮影に向けての清掃作業。下層遺構は古墳時代か。
- 8月5日(火)
写真撮影に向けての清掃作業。
- 8月6日(水)
写真撮影に向けての清掃作業。
- 8月7日(木)
上層遺構完掘・下層遺構検出状況写真の撮影。
- 8月8日(金)
土坑・ピットの遺構検出写真撮影。調査区西部1002SDの掘り下げ。当初想定より幅広い溝(河道?)であることを確認。
- 8月11日(月)
土坑・ピットの掘削・記録作業。
- 8月12日(火)
調査区南部の溝状遺構の精査、掘削。
- 8月18日(月)
土坑・ピットの掘削・記録作業。
- 8月19日(火)
土坑・ピットの掘削・記録作業。土坑から獣歯出土。
- 8月20日(水)
土坑・ピットの掘削・記録作業。1001SD掘削開始。遺物量は少ない。
- 8月21日(木)
1001SDの掘削。
- 8月22日(金)
1001SDの掘削。1001SDは掘り直しが行われる等、複数段階に分かれることを確認。溝の断面はV字形。1001SD北部の底面で木樋らしき木材が出土。その南側では板杭も出土。ピット記

- 録作業。
- 8月25日(月)
1001SDの掘削。溝の南端(上流側)は東側河道に接続しており、取水目的の溝と考えられる。木樋検出地点に断面畦を設定。ビット掘削。
- 8月26日(火)
1001SDの掘削。木樋は畦を設定した地点が南端部にあたる事が判明。木樋検出長は約4m。1001SDの南側一帯の遺構面精査。
- 8月27日(水)
1001SDの掘削。溝の方向に直交する板杭列を複数条検出。
- 8月28日(木)
1002SDの掘削。1001SDの西側一帯の遺構面精査。1001SDの北側延長部分について調査区を拡張する調整を開始。
- 8月29日(金)
1002SDの断削、断面検計。
- 9月1日(月)
1003・1004・1005SXの掘削。古墳時代中期後半の遺構と考えられる。
- 9月2日(火)
1003・1004・1005SXの掘削、断面記録作業。
- 9月3日(水)
1004・1005SXの記録作業。1006・1007SKの掘削。古墳時代中期後半の遺物が出土。1008SDの掘削。埋土上半は粘土ブロックを多く含む。
- 9月4日(木)
1002SDの掘削。1008SD完掘。調査区南端部、上層の耕作清理土が残っていたため、完掘後、遺構面再精査。
- 9月5日(金)
1002SDの掘削。1004SX・1006SKの完掘。ビット記録作業。
- 9月8日(月)
1002SDの掘削。
- 9月9日(火)
調査区南西部、遺構ベース層を掘り下げて下層遺構の有無確認。
- 9月10日(水)
調査区東部の河道上面精査。
- 9月11日(木)
調査区東部の河道検出状況写真撮影。
- 9月12日(金)
1007SK遺物出土状況写真撮影。調査区南部の再精査、瓦器を含むことを確認。中世遺構1012SXが存在することを新たに認識。
- 9月17日(水)
1012SXの掘削。調査区東部の土坑群の掘削。台風が接近中の為、養生作業。
- 9月18日(木)
午前、図面記録作業のみ実施。昼から降雨により作業無し。
- 9月22日(月)
1006・1007・1011SKの掘削。調査区南東部、土器溜まり出土状況記録作業。
- 9月24日(水)
1006・1011SKの掘削。1012SXの完掘。調査区東部の河道1013NRの掘削開始。
- 9月25日(木)
1013NRの掘削。1016SXの掘削。この落ち込み南西部の土坑を1028SKとして調査を進める。
- 9月30日(火)
台風接近中の為、養生作業。雨天の為、昼で作業終了。
- 10月2日(木)
1011SK遺物取り上げ。1013NRの掘削。1013NR西岸位置を再精査。
- 10月3日(金)
1011SK完掘。1013NRの掘削。大畦の北側で、河岸に直交する形でしがらみ(堰)の存在を確認。長さは10m以上か。
- 10月6日(月)
1013NRの掘削。大畦北側のしがらみは複数の長い横木と堅杭を組み合わせる形状か。堅杭はさらに下層に続いている。
- 10月7日(火)
調査区南東部の精査。同地点の土坑群の掘削。1013NRの掘削。
- 10月8日(水)
1013NRの掘削。しがらみは直径15cm以上の横木が4本以上存在する。しがらみ構成材を雑巾等で養生する。1018～1020SK土層断面記録。
- 10月9日(木)
1013NRの掘削。1018～1020SK遺物出土状況記録作業。
- 10月10日(金)
1013NRの掘削。1018～1020SK・1017SX・161SP遺物出土状況記録作業。1017SXの下層で新たに溝を検出。
- 10月15日(水)
調査区北辺中央部に拡張区を設定、重機掘削。拡張区にて1001SDの北側延長部分を検出、北西にまっすぐ延びる。1018・1020・1021SK記録作業。
- 10月16日(木)
拡張区の重機掘削終了。耕作溝の掘削。拡張区内の1001SD検出写真撮影。1021・1023・1024・1028SK記録作業。1028SK底面付近でほぼ完形の須恵器甕が出土。甕の底には編籠と考えられる植物が付着していたが、存在を認識できたのが遺物取り上げ時であり、図面・写真記録は残せていない。
- 10月17日(金)
1017SX・1023SK記録作業。拡張区の遺構面精査、新たに土坑・溝を検出。
- 10月20日(月)
1018～1020・1029SK、161・170・171SP記録作業。1001SDの掘削。調査区南西部、遺構ベース層の掘削・精査。
- 10月21日(火)
調査区北部・南西部の掘削。1019・1021SK出土遺物の記録・取り上げ。
- 10月22日(水)
調査区南西部の掘削。1018・1020SK、161SP出土遺物の記録・取り上げ。昼前から降雨。雨水対策および周辺環境整備作業。
- 10月23日(木)
1018・1020SK、遺物取り上げ。調査区南西部

- の掘削。
- 10月27日(月)
1017~1021SK、161-pit 完掘。拡張区の遺構精査。調査区南西部の掘削。
- 10月28日(火)
1013NR しがらみ遺構周辺の掘削。調査区南東部の掘削。拡張区1030SKの掘削。
- 10月29日(水)
1008SD 南東部、完掘。1030SKの遺物出土状況記録作業。1013NR しがらみ周辺の掘削。
- 10月30日(木)
拡張区、1001SDの掘削。1013NR しがらみ遺構の記録作業。
- 10月31日(金)
調査区西部、遺構ベース層の掘削。縄文土器細片および石礫出土。1013NRの掘削。調査区南東部の河道・溝・土坑の時期的変遷の再検討。
- 11月4日(火)
1013NR 南側の掘削。東海系土器が出土。
- 11月5日(水)
1013NRの掘削。1020SK 下層部分の遺物出土状況記録。1032SXの完掘。
- 11月6日(木)
1013NRの掘削。1020・1030SKの遺物記録・取り上げ。1033SXの完掘。
- 11月10日(月)
1013NRの掘削。1030SKの完掘。
- 11月11日(火)
1013NR しがらみ遺構の記録作業。1013NR 周辺大趾の断面写真撮影。1001SDの掘削。空撮に向けての現地打ち合わせ。
- 11月12日(水)
1013NRの掘削。1001・1008SDの断面記録作業。
- 11月13日(木)
1013NRの掘削、縦断面図作成。1001SD 南半の杭列検出作業。河道からの取水部の護岸か。
- 11月14日(金)
1025・1033SXの記録作業。1013NR しがらみの立面図作成。
- 11月17日(月)
空撮に向けての全体清掃。
- 11月18日(火)
空撮に向けての全体清掃。
- 11月19日(水)
空撮に向けての全体清掃。
- 11月20日(木)
13時30分、空撮。その後、地上からの遺構完掘状況写真撮影。
- 11月21日(金)
遺構完掘状況写真撮影。
- 11月25日(火)
1013NR しがらみ遺構内の木器等の出土状況写真撮影。1001SD 大趾の掘削、縦断面記録作業。1005・1012SXの断面記録作業。
- 11月26日(水)
1013NR しがらみ遺構の記録作業。1001SD・1012SXの断面記録作業。
- 11月27日(木)
1013NR しがらみ1(最も北側にあるしがらみ遺構)の土層断面記録作業。1005SX 完掘。
- 11月28日(金)
1013NR しがらみ1を解体しつつの記録作業に移行。
- 12月1日(月)
1013NR しがらみ1の解体、記録作業。1001SD 趾の掘削。
- 12月2日(火)
1013NR しがらみ1の解体。横木下から土師器裏が出土。1001SD 木樋の出土状況写真撮影。
- 12月3日(水)
1013NRの掘削。大趾の南側で柄付の木鍬が出土。
- 12月4日(木)
1001SD 木樋の上蓋を取り上げ。1013NRの掘削。
- 12月5日(金)
強雨の為、排水作業実施。
- 12月8日(月)
1001SD 木樋の上蓋取り上げ。木樋底部の記録作業。1013NRの掘削。地元向けの見学会の準備。
- 12月9日(火)
1001SD 木樋底部の記録作業。1013NRの掘削。
- 12月10日(水)
調査区中央部大趾の記録作業。地元向け見学会(10時~15時)、約50名参加。
- 12月11日(木)
1013NR しがらみの記録作業。調査区東壁、土層断面記録作業。
- 12月12日(金)
1001SD 大趾の掘削、矢板杭周辺の断割。調査区東壁、土層断面記録作業。
- 12月15日(月)
1001SD 木樋底板・矢板杭列の出土状況記録作業。調査区東壁、土層断面記録作業。重機による埋め戻し開始。
- 12月16日(火)
調査区東壁・北壁、土層断面記録作業。1001SD 矢板杭列の記録作業。重機埋め戻し。
- 12月17日(水)
調査区東壁・北壁、土層断面記録作業。1001SD 木樋底板の取り上げ。1013NR しがらみ解体作業。重機埋め戻し。
- 12月18日(木)
調査区北壁、土層断面記録作業。1013NR しがらみ底部付近の写真撮影。1001SD 完掘状況記録作業。
- 12月19日(金)
調査区北壁、土層断面記録作業。1013NR しがらみ1の東側延長部分を重機および人力で確認。しがらみの横木は最長のもので約10.5mであることを確認。横木東端はさらに東へ延びており、端部は確認できない。重機埋め戻し。
- 12月22日(月)
調査区北壁、土層断面記録作業。重機埋め戻し。
- 12月24日(水)
重機埋め戻し。出土遺物の搬出。
- 12月25日(木)
重機埋め戻し。機材撤収。
- 12月26日(金)
重機埋め戻し終了。本日で調査終了。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

橿原市は奈良盆地の南部に位置し、北は磯城郡田原本町・北葛城郡広陵町、東は桜井市、南は高市郡明日香村・同高取町、南西は御所市、西は大和高田市に接している。新堂遺跡の所在する橿原市新堂町・東坊城町は、橿原市域の西辺沿い中央付近に位置する。今回の調査地点から南西に約50m移動すると大和高田市域に至る。

橿原市の南～南東部には龍門山地から派生する丘陵地が広がっており、北に向かって緩やかに下降する斜面地形を経て、北に肥沃な沖積地が広がっている。調査地はその沖積地に位置している。調査地から東南東に約2kmの地点には名勝大和三山のひとつ、畝傍山が所在する。

調査地周辺の標高は、盆地の中部に向かって、おおむね南から北に向かってなだらかに低くなる。調査地周辺における現在の水田面の上面標高は、約64m前後である。調査地から東に約600mの距離には曾我川が、西に約1kmの距離には葛城川が、いずれも北流している。曾我川は龍門山地西部に、葛城川は金剛山地に源流をもつ。調査地一帯は現在、この二つの主要河川の中間に位置する微高地となっている。また、調査地から西に約200mの地点には葛城川の支流である住吉川も存在する。河川の位置は時代と共に大きく変化しており、かつては調査地近辺にも河川が存在していたことが現地形の観察や発掘調査によって明らかとなっている。

調査地は北西の新堂集落と南東の東坊城集落の間に位置する耕作地帯であったが、近年は京奈和自動車道建設を筆頭に造成工事が進められており店舗も増える等、かつての景観は今まさに大きく変化しつつある。『大和国条里復原図』による調査地の小字名は「六反田」および「宮ノ庄」である。

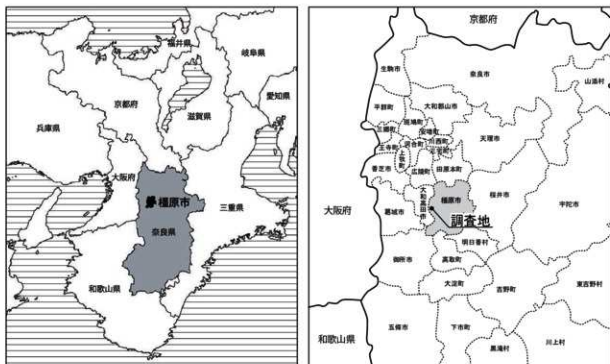


図1 調査地位置図

第2節 歴史的環境

橿原市の西部から南西部にかけての地域は、従来、遺跡があまり確認されていない地域であったが、京奈和自動車道建設に伴う一連の発掘調査により、路線沿いに新たな遺跡が多数発見されている。路線沿いからさらに周辺への遺跡の広がりが想定される調査成果も挙げられている。得られた成果は主に縄文時代以降の各時代にわたり、奈良盆地南西の低地部における遺跡の様相が大幅に更新されたとと言える。調査地周辺は近年の開発行為によって遺跡地図が次々と書き換えられつつある地域である。

調査地の含まれる新堂遺跡の周辺に目を向けると、北に曲川遺跡、南に東坊城遺跡が存在する(図2)。これらの橿原市域の西部に位置する遺跡は、曾我川と葛城川に挟まれた平地に立地し、南北約2.0 km・東西約0.8 kmの範囲で南北方向に並ぶ。なお、京奈和自動車道路線沿いから東西に離れた地域については、現在のところ調査例が乏しく実態は不明である。しかし新堂遺跡や坊城遺跡の西方一帯等、遺物散布地の存在は複数確認されており、今後、遺跡の範囲がさらに広がっていく可能性も高い。以下に、これらの遺跡の調査成果を軸に調査地周辺における各時代の様相に触れる。

調査地周辺において遺構・遺物の存在が明確になり始める時期は、縄文時代後期以降である。曲川遺跡では晩期中葉から末葉にかけての土器棺墓が約80基検出されている。これは西日本有数の規模である。他、貯蔵穴や住居跡等の遺構も確認されている。新堂遺跡では遺構の数こそ限られるものの土器棺墓や貯蔵穴、流路に伴う水場遺構等があり、後期から晩期にかけての遺物も複数の地点で出土している。一方、東坊城遺跡では縄文時代後期後半から晩期の遺物が出土する河川や、晩期の土坑の存在が確認されている。遺物については後期前半に遡る土器も含まれる。京奈和自動車道路線沿いにおいてさらに南に目を向けると、川西根成柿遺跡や観音寺本馬遺跡では後期以降の遺構が確認されている。観音寺本馬遺跡では人工的に管理されたと想定される晩期のクリ林も検出されている。また、この周辺の遺跡からは縄文時代前期及び中期に遡る遺物も出土している。

弥生時代には曾我川流域及び葛城川流域においては、多くの遺跡の存在が知られている。京奈和自動車道沿いでも前期の大規模水田や環濠集落、中期の方形周溝墓群等が確認されている。その中には、新堂遺跡の一帯は弥生時代の遺構・遺物が比較的疎な地域であると言える。ただし、竪穴建物や土坑等の弥生時代の遺構は少量ながら存在するため、完全な空白というわけではなく、遺物も散発的に出土する。また、曲川遺跡の北部や橿原市北西部に位置する土橋遺跡においては中期や終末期の周溝墓群も確認されている。

弥生時代末頃から古墳時代初頭になると、新堂遺跡の周辺で遺構・遺物といった活動痕跡が増加する。新堂遺跡では、この時期の水田や竪穴建物、土坑、溝等の遺構が確認されており、遺構からの出土遺物も量が多くなる。河川及びそれに繋がる溝(水路)に設置された井堰も存在する等、積極的な土地開発に乗り出していることが窺える。遺構は地点こそ限定的であるが古墳時代前期を通じて見られる。曲川遺跡では前期後半以降、曲川古墳群が形成されていく。曲川古墳群は墳丘が削平されたいわゆる埋没古墳で、一辺10~18 mの方墳18基が検出されている。古墳の築造は中期後半にかけて続く。地理的に連続する新堂遺跡とも関わり深い遺跡と言える。

古墳時代中期は、調査地周辺での活動が非常に盛んになる時期である。東坊城遺跡では平成3年度に橿原市教育委員会が実施した店舗建設に伴う発掘調査において中期の大溝から土師器、初期須恵



図2 調査地周辺遺跡地図 (S = 1/12,500。遺跡範囲は2022年度当初の内容)

器、韓式系土器に加え、鉄滓・輪の羽口・砥石といった生産関連遺物や鋳造鉄斧が出土しており、以前から注目されてきた。近年の調査によって新堂遺跡と曲川遺跡からも陶質土器・韓式系土器を含む多量の土器や金属器生産関連遺物、祭祀具等が多数出土し、渡来系遺物を多く含む中期（一部は数を減しながら後期まで続く）の集落が、この一帯に展開していたことが明らかとなっている。中期の遺構は土坑や河道が主であり、居住域を示すような明確な建物跡の存在は確認されていない。その一方で河道を始めとする遺構からの遺物出土量は非常に多く、近隣に集落の居住域が存在する可能性は高いと考えられる。橿原市中央部の四条遺跡周辺や、飛鳥地域等の遺跡とともに、古墳時代の奈良盆地南部の集落における外来要素の受容過程を知ることができる重要な地域と言える。

近年の新堂遺跡の調査成果を見ると、新堂遺跡の北西部で大型店舗建設に伴い実施した発掘調査（橿教委 2016-2 次調査『新堂遺跡Ⅳ』）で、河道から中期前半に遡る多量の初期須恵器が出土し、さらなる注目を集めている。この地点では中期末頃にかけての遺構・遺物が確認されている。また、今回の調査地の東隣における発掘調査（橿教委 2002-2 次調査『新堂遺跡』、橿教委 2005-4 次調査『新堂遺跡Ⅱ』、橿教委 2006-2 次調査『新堂遺跡Ⅲ』）においても古墳時代の河道及び河岸沿いの井戸や土坑等から中期後半～後期前半を中心とする多量の土器を始めとする遺物が出土している。

曾我川の downstream に目を向けると古墳時代中期後半から後期前半にかけての時期に大規模な玉作り遺跡である曾我遺跡が存在する。また、曾我川の上流、調査地から南南東に約 2 km の距離に位置する新沢千塚古墳群も、この時期に造墓活動の最盛期を迎える。より広域な視点に立っても遺跡の形成として現れる人間活動が非常に活発な時期と言える。

古墳時代後期後半頃から古代にかけての時期には、新堂遺跡周辺では遺構の存在が希薄になる。その後、再び遺構が多く確認されるようになるのは平安時代後期以降のことである。

新堂遺跡では京奈和自動車道建設による複数の発掘調査で平安時代後期以降、特に平安時代末期から鎌倉時代前半にかけての遺構が多く確認されている。遺構から出土する遺物の量も多い時期である。この時期の遺構・遺物は新堂遺跡の南部に特に多く、区画溝を伴う屋敷地（『新堂遺跡Ⅱ』）、井戸、土坑といった遺構の存在や耕作地としての利用状況が明らかにされている。出土遺物としては多量の瓦器や土師器の他、輸入磁器の存在等が知られている。新堂遺跡の南端では鎌倉時代中頃に埋没したと考えられる河道の存在が確認されている。東坊城遺跡での発掘調査と合わせて河の両岸が検出されており、検出地点での川幅は最大で約 60m に及ぶ（『新堂遺跡Ⅲ』）。屋敷地や耕作地としての利用も、この河道との関係の中での変遷が窺える。この河道は発掘調査で確認されている他、条里地割の乱れ、および堤防の高台として現地地形でも確認することができる（図 3 右下）。その痕跡は、南は大和高田市根成柿、北は橿原市曲川環濠付近までの範囲で追うことができる。また、新堂遺跡の北東部においても河道沿いに平安時代末から鎌倉時代初頭と考えられる掘立柱建物群や井戸、土坑等の遺構の存在が確認されている（橿教委 2010-3 次調査）。井戸出土の鬼面墨書土器といった特徴的な遺物も見られる。

このような平安時代後期から鎌倉時代前半にかけての遺構は、曲川遺跡と東坊城遺跡にも存在するが、量は新堂遺跡がもっとも多い。これ以降の時期は、曲川遺跡において室町時代の建物跡がわずかに検出されている程度で、他は耕作地としての利用が主となっていったようである。

なお、調査地は『大和国条里復原図』によると高市郡路西二十七条五里（葛下部二十七条一里）三十坪にあたる。

第三章 調査の成果

第1節 調査の方法

調査区の位置と形状

調査地は調査開始時点では道路用地として盛土造成が行われた状態であったが、敷地東半はそれ以前も工場・店舗用の宅地として利用されていた土地である。そのさらに以前は水田として利用されていたことが確認できる。敷地の東辺は国道24号線に、敷地の北辺は国道165号線大和高田バイパスにそれぞれ接しており、新堂ランプ（2022年現在）の南西隣にあたる。調査地から南に約150mの地点には、近鉄南大阪線が西北西—東南東方向に通る。

調査区の形状は基本的に敷地の縁辺に沿った形であるが、調査区東辺については敷地内に敷設されている大型の農業用水路に合わせた形状となっている。調査区北辺中央部は調査途中で範囲を拡張している。なお敷地の南東部については、調査排土の搬出用の重機作業場として利用している。調査区面積は2,050㎡である。

調査の手順

敷地東半部は現代の水田面から最大で厚さ2m近い盛土造成が行われた状態であり、調査開始前に

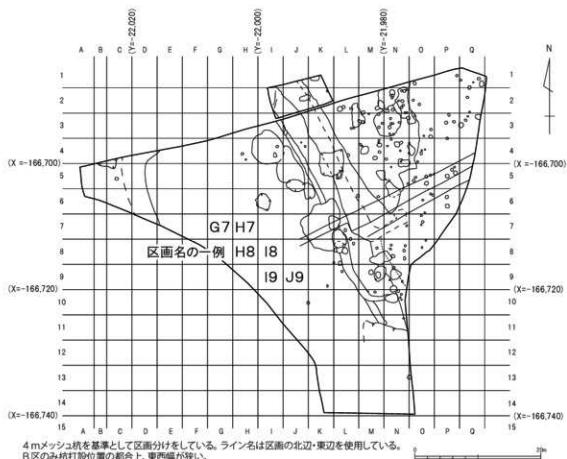


図4 調査区区割図 (S = 1/600)

先行して調査区設定範囲の周辺部まで含む形で造成土を重機（バックホウ）で約1m程度除去している。調査区壁面断面図（図5～12）は、この造成土上部を除去した後の状態を記している。敷地内で排水置場を確保できないため排水はトラックで場外搬出を行っており、期間を通じて搬出作業に重機を使用している。

上層遺構面の直上まで重機による掘削を行い、以降の掘削・記録作業は人力で行っている。調査区内には遺構面下に及ぶ現代の攪乱が存在し、これらも多くは重機掘削作業と並行して除去を行っている。調査区の各壁面沿いには、人力によって排水溝を掘削している。

調査の途中段階には、調査区北辺中央部を北側へ面積50㎡（東西10m×南北5m）の調査区拡張を行っている。この拡張区は、主に古墳時代の溝1001SDの北側延長部を調査する必要性から設定したものである。

遺構名

遺構名は、調査時に遺構毎に付与する数字（遺構番号）と、遺構種を示す通有の2字のアルファベット（遺構記号）の順で組み合わせることで記録しており（1001SD等）、今回の報告でもこれを踏襲している。遺構番号は、遺構種全体を通して1から順に付与している。遺構番号は主として遺構を認識した順に付与しており、検出段階に明確に下層遺構（古墳時代以前）と認識した遺構については1001以降の数字を使用している。ただし、1000番までの遺構の中にも古墳時代以前の遺構が含まれており、あくまで調査の作業場における便宜上の使い分けに留まっている。

遺構名は基本的に調査時のものをそのまま使用して報告を行っているが、遺構に対する認識の変更や番号の重複等の理由で本報告段階で一部、変更や追加を行った遺構が存在する。

調査区割

調査区内に4m間隔を基本として打設した測量メッシュ杭を基準に、地区割を行っている（図4）。この地区割を作業工程の区切りや遺物の取り上げ記録等に利用している。

写真撮影

調査写真の撮影は各遺構面の検出・完掘状況の他、調査区及び遺構の土層断面や遺物の出土状況等、調査の過程で記録が必要な段階で行っている。

撮影の際に使用したフィルムは、主に4×5インチサイズの白黒フィルムとカラーポジフィルムである。また、バックアップ用に35mmサイズの同フィルムを使用している。主要な写真についてはフォトCDを作成してデジタルデータの保存も行っている。

第2節 基本層序

基本層序は以下のとおりである。以下に示す各層の状況は調査区全体で概ね共通するが、IV層の分布範囲が限定的である点等をはじめ地点による差異も存在する。詳細は各層の項で述べる。調査時に存在していた現代造成土は、基本層序には含んでいない。地点によっては厚さ最大1m以上の造成土が施されていたが、調査開始前ある程度の除去を重機で行っている。調査区断面図（図5～12）は、その除去後の状態を作図している。

調査区東壁（図10～12）は遺構面下の大部分が古墳時代以前の河道（1013NR）の縦断面が占めており、遺構面下にあたる基本層序IV層以下の一般的な状況については調査区北壁（図5～9）のほうがよく表れている。各層序の上面は調査地周辺の現況地形と同様、南から北に向かってごく緩やかに低くなる傾向にある。

本項で示す基本層序については、過去に『平成20年度橿原市文化財調査年報』において報告した際に提示した基本層序から再整理・修正を行った内容であり、土層番号や内容は対応していないので注意が必要である。

基本層序

- I層：水田耕作土（現代。上面高は標高約63.3～63.5 m。厚さ0.1～0.2 m）
- II層：床土（上面高は標高約63.2～63.3 m。厚さ0.2～0.5 m）
- III層：旧耕作土（上面高は標高約62.7～63.1 m。厚さ0.1～0.4 m）
- IV層：氾濫層（上面が遺構面。上面高は標高約62.7～62.8 m。厚さ0.2～0.3 m）
- V層：遺構基盤層（上面が遺構面。縄文時代中期～晩期の遺物包含層。
上面高は標高約62.6～62.8 m。厚さ0.1～0.3 m）
- VI層：地山（上面高62.5～62.7 m）

※各土層断面における基本層序に対応する土層の番号は、各図に記している。

I層は現代の水田耕作土である。淡緑灰色粘質土、黄灰褐色砂質土、にぶい黄灰色土等から成る。水田の上面は造成工事の際に部分的に削平を受けており、調査区内の一部には遺構面にまで及ぶ擾乱も存在する。

II層は床土である。暗黄灰色土、淡黄褐色砂質土、にぶい黄灰褐色砂質土等から成る。近世以降の耕作層を含む。

III層は鎌倉時代以降の耕作層であり、いわゆる耕作溝の埋土もここに含まれる。暗灰色粘質土、明灰褐色粘質土、濃灰褐色粘質土、淡黄灰色粘質土等から成る。

IV層は調査区の北東部、1013NRと1001SDとの間の一帯に広がって存在する。褐色～暗褐色砂質土、濃灰色微砂質土、暗黄灰色砂質土から成る。1013NRからの氾濫堆積層であると考えられる。IV層には弥生土器の細片がごく少量含まれ、IV層上面に存在する遺構の時期と合わせて、弥生時代後期より前に堆積したと考えられる。IV層は1013NRの最終堆積層ではなく、IV層堆積後も1013NRは機能し続けている。

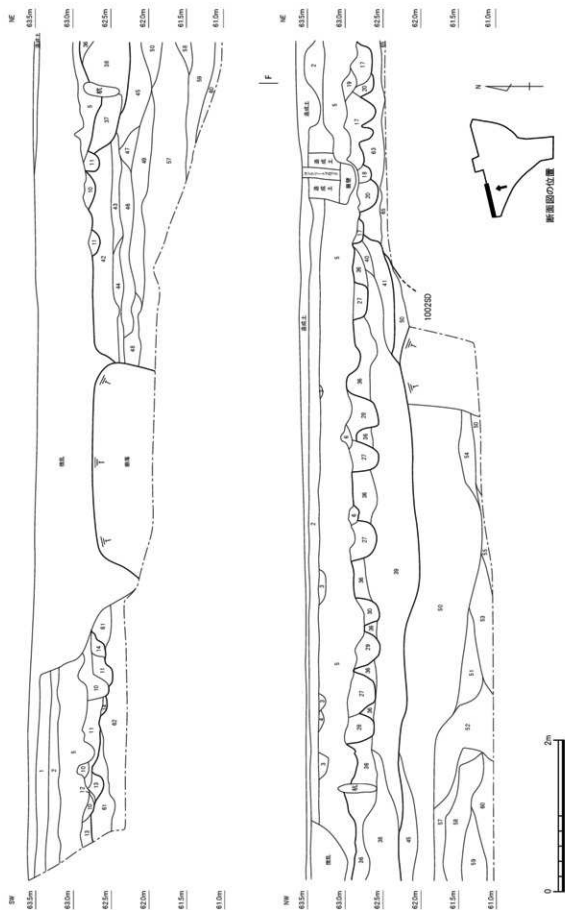
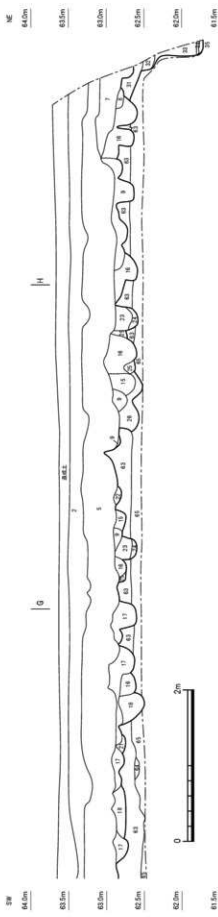


図5 調査区北壁西半部土層断面図① (S = 1/50)



調査区北墓西半部上層断面図② (S = 1/50)

- | | | |
|--|--|--|
| <p>1. におい・黒灰色砂質土
2. 淡褐色砂質土
3. 黒灰色粘土
4. 淡褐色砂質土
5. 淡褐色砂質土
6. 淡褐色砂質土
7. 黒褐色砂質土
8. 黒褐色砂質土
9. 黒褐色砂質土
10. 黒褐色砂質土
11. 黒褐色砂質土
12. 黒褐色砂質土
13. 黒褐色砂質土
14. 黒褐色砂質土
15. 黒褐色砂質土
16. 黒褐色砂質土
17. 黒褐色砂質土
18. 黒褐色砂質土
19. 黒褐色砂質土
20. 黒褐色砂質土
21. 黒褐色砂質土
22. 黒褐色砂質土</p> | <p>23. 黒褐色砂質土
24. 黒褐色砂質土
25. 黒褐色砂質土
26. 黒褐色砂質土
27. 黒褐色砂質土
28. 黒褐色砂質土
29. 黒褐色砂質土
30. 黒褐色砂質土
31. 黒褐色砂質土
32. 黒褐色砂質土
33. 黒褐色砂質土
34. 黒褐色砂質土
35. 黒褐色砂質土
36. 黒褐色砂質土
37. 黒褐色砂質土
38. 黒褐色砂質土
39. 黒褐色砂質土
40. 黒褐色砂質土
41. 黒褐色砂質土
42. 黒褐色砂質土
43. 黒褐色砂質土
44. 黒褐色砂質土</p> | <p>45. 明褐色砂
46. 淡褐色砂
47. におい・明褐色粘土
48. 明褐色粘土
49. 淡褐色砂
50. 淡褐色砂
51. 淡褐色砂
52. 淡褐色砂
53. 淡褐色砂
54. におい・灰色シルト
55. 明褐色粘土
56. におい・明褐色シルト
57. 淡褐色砂
58. 褐色砂
59. 明褐色砂
60. 灰色砂
61. 明褐色粘土
62. 明褐色粘土
63. 明褐色粘土
64. 明褐色粘土
65. 明褐色粘土</p> |
|--|--|--|

基本層序 I 層：1～4 層、基本層序 II 層：5～7 層、基本層序 III 層：8～30 層、1008SD：31～35 層、1002SD (新)：36～41 層、1002SD (旧)：42～62 層、
基本層序 V 層：63 層、基本層序 VI 層：64・65 層

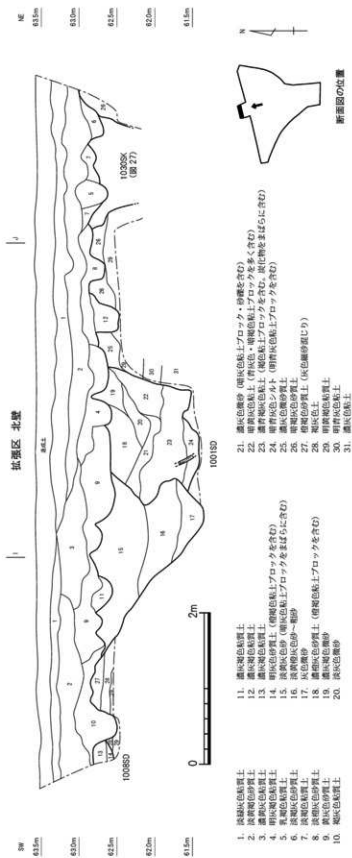


図7 調査区北壁中央部北壁区土層断面図 (S = 1/50)

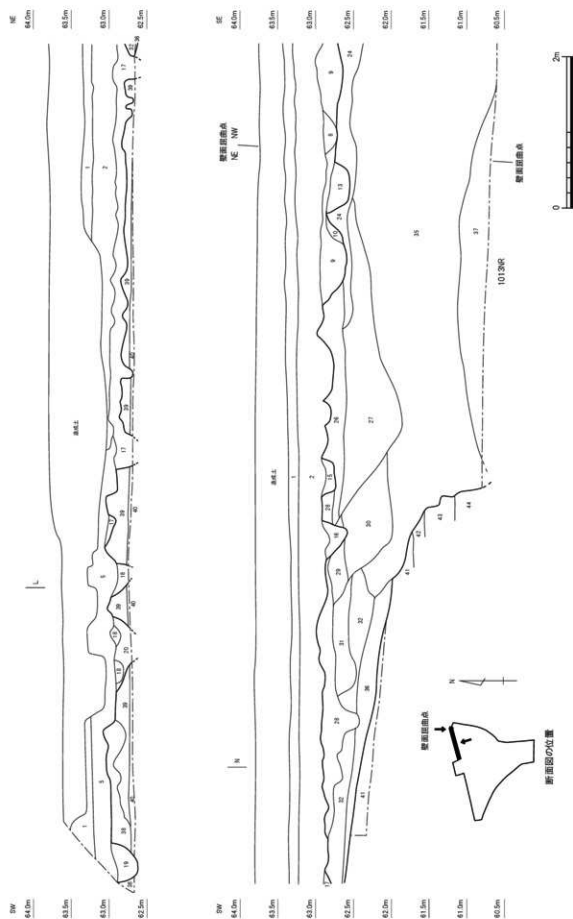
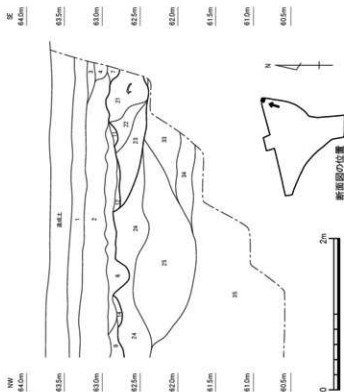


図8 調査区北壁東半部上層断面図① (S = 1/50)



調査区北壁東半部 (図8-9)

1. 暗褐色粘質砂質土
2. におい、灰褐色砂質土
3. 暗褐色土
4. 暗褐色粘質土
5. 暗褐色砂質土
6. 灰褐色粘質土
7. 暗褐色粘質砂質土
8. 暗褐色粘質土
9. 暗褐色粘質土
10. 暗褐色粘質土
11. 暗褐色粘質土
12. 暗褐色粘質土
13. 暗褐色粘質土 (炭化物を含む)
14. 暗褐色粘質土
15. 暗褐色粘質土
16. 暗褐色粘質土
17. 暗褐色粘質土
18. 暗褐色粘質土
19. 暗褐色粘質土
20. 暗褐色粘質土
21. 暗褐色粘質土
22. 暗褐色粘質土 (炭化物を含む)
23. 明灰褐色粘質土
24. 明灰褐色粘質土
25. 明灰褐色粘質土 (明灰褐色シルトを含む)
26. 暗褐色粘質土
27. 暗褐色粘質土
28. におい、暗褐色粘質土
29. 暗褐色粘質土
30. 暗褐色粘質土 (黄褐色粘土ブロックを基ばらに含む)
31. 暗褐色粘質土
32. 暗褐色粘質土
33. 暗褐色粘質土
34. 暗褐色粘質土
35. 暗褐色粘質土
36. 暗褐色粘質土 (暗褐色粘土ブロックを含む)
37. 暗褐色粘質土 (暗褐色粘土ブロックを含む)
38. 暗褐色粘質土
39. 暗褐色粘質土
40. 暗褐色粘質土
41. 暗褐色粘質土
42. 暗褐色粘質土
43. 暗褐色粘質土
44. 暗褐色粘質土

基本層序Ⅰ層：1層、基本層序Ⅱ層：2～5層、基本層序Ⅲ層：6～20層、
 1013NR (古墳時代中期)：21～23層、1013NR (古墳時代前期以前)：24～37層、
 基本層序Ⅳ層：38～39層、基本層序Ⅴ層：40～44層

V層は遺構基盤層である。縄文時代中期～晩期の遺物包含層である。出土遺物には縄文土器片・石器片がある。遺物の量は少ない。灰褐色砂質土、褐色灰土、濃褐色粘質土から成る。

VI層は遺物を含まない地山層である。黄褐色粘質土～砂質土、明青灰色粘土、暗褐色粘土、暗灰色粘土等から成る。標高62.0m前後より下は粘土層が基本となる。

遺構面はIV層上面及びV層上面である。調査区北東部ではIV層除去後のV層上面において遺構の検出作業を行ったが、明確にIV層下に位置すると思われる遺構は存在しなかった。さらに、調査区全体においてV層除去後のVI層上面で遺構の検出作業を行い、遺構は存在しないことを確認している。

図9 調査区北壁東半部土層断面図② (S = 1/50)

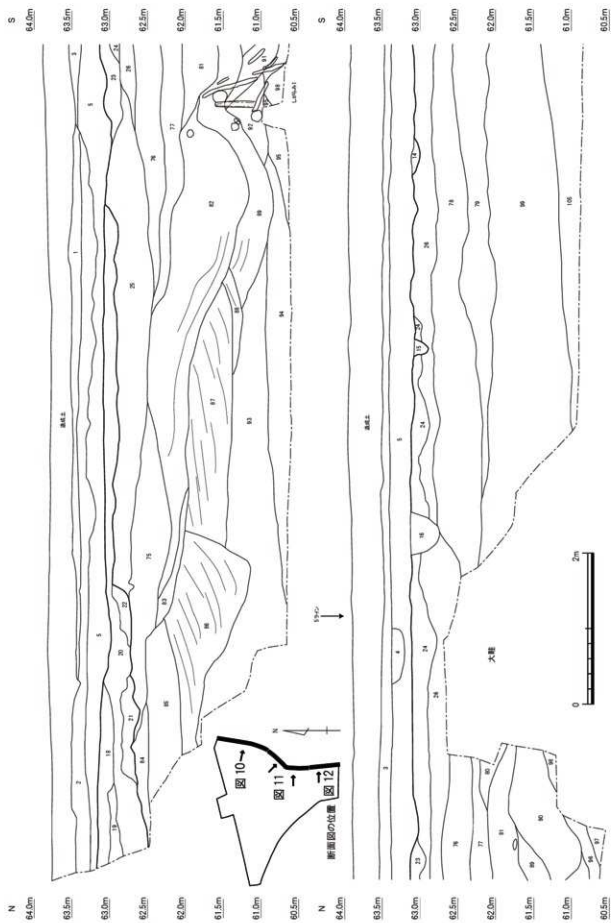


図 10 調査区東壁土層断面図① (S = 1/50)

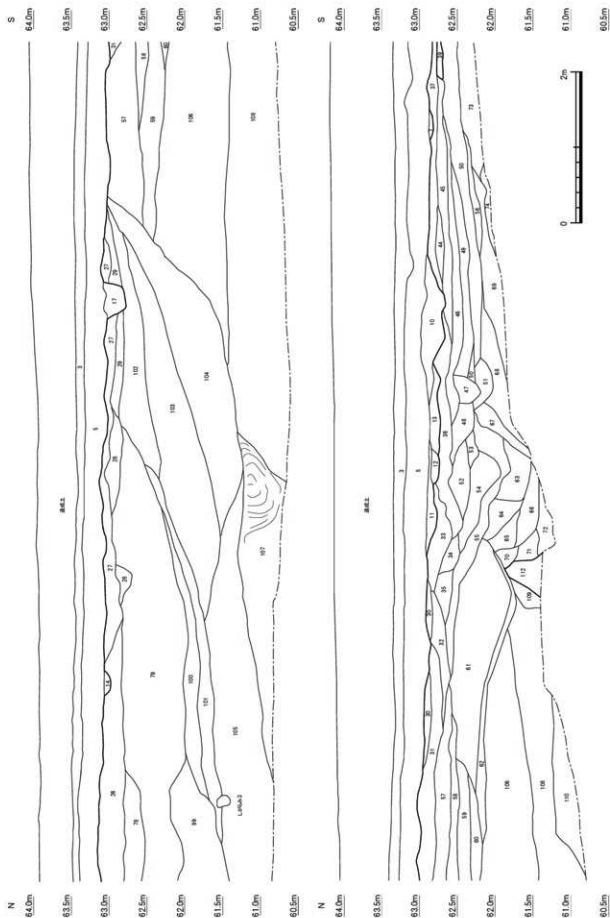
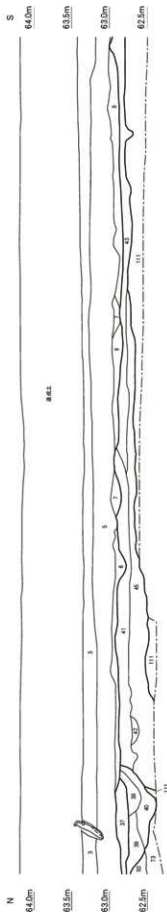


圖 11 調査区東壁土層断面図② (S = 1/50)



基本層序I層: 1~4層, 基本層序II層: 5層, 基本層序III層: 6~17層, 1013NR (古墳時代中期): 18~20層, 1013NR (古墳時代前期以前): 21~37・41~110層, 1001SD: 38~40層, 基本層序VI層: 111・112層

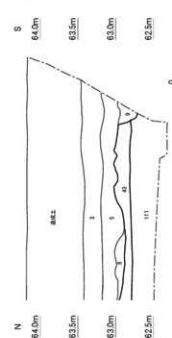


図12 調査区東壁土層断面図③ (S = 1/50)

- 78. 淡灰褐色砂
- 79. 淡灰褐色砂 (暗灰色シルトを含む)
- 80. 淡灰褐色砂
- 81. 濃灰褐色砂
- 82. 濃灰褐色砂 (暗灰色シルトをまばらに含む)
- 83. 濃灰色シルト
- 84. 淡灰色砂質土
- 85. 暗灰色砂質土
- 86. 暗灰色砂質土
- 87. 暗灰色シルト
- 88. 暗灰色シルト
- 89. 暗灰色シルト
- 90. 淡灰褐色砂
- 91. 淡灰褐色砂
- 92. 淡灰褐色砂 (暗灰色シルトを多く含む)
- 93. 淡灰褐色砂
- 94. 淡灰褐色砂 (暗灰色シルトをまばらに含む)
- 95. 濃灰色シルト
- 96. 暗灰色砂
- 97. 暗灰色砂
- 98. 暗灰色砂 (暗灰色シルトを多く含む)
- 99. 暗灰色砂
- 100. 暗灰色砂
- 101. 暗灰色砂 (暗灰色シルトをまばらに含む)
- 102. 暗灰色シルト
- 103. 暗灰色砂質土
- 104. 暗灰色砂質土
- 105. 暗灰色砂質土
- 106. 暗灰色砂質土
- 107. 暗灰色砂質土
- 108. 暗灰色砂質土
- 109. 暗灰色砂質土
- 110. 暗灰色砂質土
- 111. 暗灰色砂質土
- 112. 暗灰色砂質土

- 43. 暗灰色粘質土
- 44. 暗灰色粘質土
- 45. 暗灰色粘質土
- 46. 暗灰色粘質土 (暗灰色シルトをまばらに含む)
- 47. 暗灰色粘質土 (暗灰色シルトをまばらに含む)
- 48. 暗灰色粘質土
- 49. 暗灰色粘質土
- 50. 暗灰色粘質土
- 51. 暗灰色粘質土
- 52. 暗灰色粘質土
- 53. 暗灰色粘質土
- 54. 暗灰色粘質土
- 55. 暗灰色粘質土
- 56. 暗灰色粘質土
- 57. 暗灰色粘質土
- 58. 暗灰色粘質土
- 59. 暗灰色粘質土
- 60. 暗灰色粘質土
- 61. 暗灰色粘質土
- 62. 暗灰色粘質土
- 63. 暗灰色粘質土
- 64. 暗灰色粘質土
- 65. 暗灰色粘質土
- 66. 暗灰色粘質土
- 67. 暗灰色粘質土
- 68. 暗灰色粘質土
- 69. 暗灰色粘質土
- 70. 暗灰色粘質土
- 71. 暗灰色粘質土
- 72. 暗灰色粘質土
- 73. 暗灰色粘質土
- 74. 暗灰色粘質土
- 75. 暗灰色粘質土
- 76. 暗灰色粘質土
- 77. 暗灰色粘質土
- 78. 暗灰色粘質土

- 22. 暗灰色砂
- 23. 暗灰色砂
- 24. 暗灰色砂
- 25. 暗灰色砂
- 26. 暗灰色砂
- 27. 暗灰色砂
- 28. 暗灰色砂
- 29. 暗灰色砂
- 30. 暗灰色砂
- 31. 暗灰色砂
- 32. 暗灰色砂
- 33. 暗灰色砂
- 34. 暗灰色砂
- 35. 暗灰色砂
- 36. 暗灰色砂
- 37. 暗灰色砂
- 38. 暗灰色砂
- 39. 暗灰色砂
- 40. 暗灰色砂
- 41. 暗灰色砂
- 42. 暗灰色砂

- 1. 暗灰色砂質土
- 2. 暗灰色砂質土
- 3. にこみ-暗灰色粘質土
- 4. 暗灰色粘質土
- 5. 暗灰色粘質土
- 6. 暗灰色粘質土
- 7. 暗灰色粘質土
- 8. 暗灰色粘質土
- 9. 暗灰色粘質土
- 10. 暗灰色粘質土
- 11. 暗灰色粘質土
- 12. 暗灰色粘質土
- 13. 暗灰色粘質土
- 14. 暗灰色粘質土
- 15. 暗灰色粘質土
- 16. 暗灰色粘質土
- 17. 暗灰色粘質土
- 18. 暗灰色粘質土
- 19. 暗灰色粘質土
- 20. 暗灰色粘質土
- 21. 暗灰色粘質土

第3節 遺構

遺構は大きく2時期に分けられ、平安時代後期～鎌倉時代、弥生時代～古墳時代の遺構が存在する。調査時には便宜上、前者を上層遺構、後者を下層遺構として括って調査・記録の作業を行っている。これらの遺構の掘り込み面は、前節で述べた通り同一である。弥生時代～古墳時代の遺構は、中でも弥生時代終末期～古墳時代中期が大部分を占める。

以下に各時代の遺構について上層から順に述べる。

平安時代後期～鎌倉時代の遺構（図13・14）

この時期の遺構には、耕作溝群と落ち込み、ピットがある。

耕作溝群は、耕作活動の累積によって形成されたと考えられる遺構群で、いわゆる素掘り溝の集まりである。出土遺物から、耕作溝群の形成時期は12世紀以降であると考えられる。それぞれの溝の規模は、幅約0.2～0.4m、深さ最大約0.3mである。なお、図13に示す平面図では、調査区中央のやや南西および調査区北東部が空白となっているが、これは調査記録の欠落によるものであり、この範囲にも耕作溝が存在している。ただし調査区北東部については遺構ベース層が下層の河道埋土の砂層であることが影響しているのか、明確に溝状の痕跡を残すものは限られる（図版5・6）。耕作溝の方向は、南北方向を基本とし、調査区南東部を中心に少数ながら東西方向のものが存在する。このうち調査区南東部に存在する東西方向の溝144SDについては、幅約0.6m、深さ約0.5mと他の溝よりも大型であり、耕作溝ではなく区画溝であった可能性が考えられる。

耕作溝群からの出土遺物は、耕作溝の形成期にあたと考えられる平安時代末～鎌倉時代の土師器、と瓦器の他、下層の遺構や包含層に由来すると考えられる平安時代後期や古墳時代以前の遺物も含まれる。

1012SXは調査区南東部に位置する大型の落ち込みである（図14）。1012SXが存在する地点においては、耕作溝群より古い遺構であることが遺構の重複関係から確認できる。1012SXの東端及び南端は調査区東辺・南辺沿いの排水溝内に位置しており、調査区東壁断面図には表れない。平面形は東西約8.2m、南北約14.6mを測る長方形を呈する。深さは最大約0.6mで、落ち込みの底面には細かな窪みが複数存在する。出土遺物は土師器、瓦器皿、瓦器碗がある。底面付近から完形に近い瓦器碗が複数出土している（図52-39-44）。遺構埋土は、ほぼ全体が粘土ブロックを含む粘土～粘質土であり、人為的に埋められたと考えられる。出土遺物から12世紀の遺構であると考えられる。

この他、調査区北東部を中心とする範囲に、小規模なピットが100基以上存在する（便宜上、図16に記している）。ピットは調査区西部および南部には、ほとんど存在しない。遺構の重複関係から耕作溝群より古い遺構であると判断できるが、これらのほとんどは出土遺物が無く、詳細な時期は不明である。この中に平安時代後期～末頃に属すピットを含んでいる可能性がある。

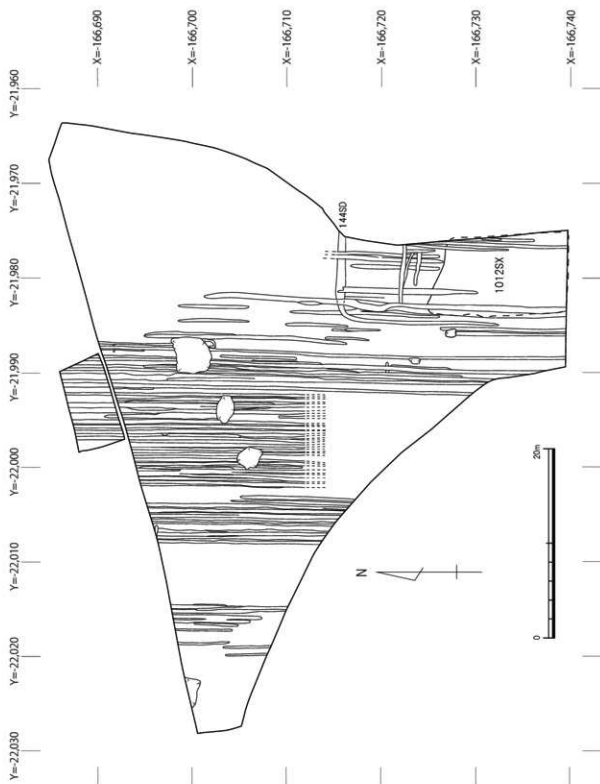


図 13 平安時代後期～鎌倉時代遺構配置図 (S = 1/400)

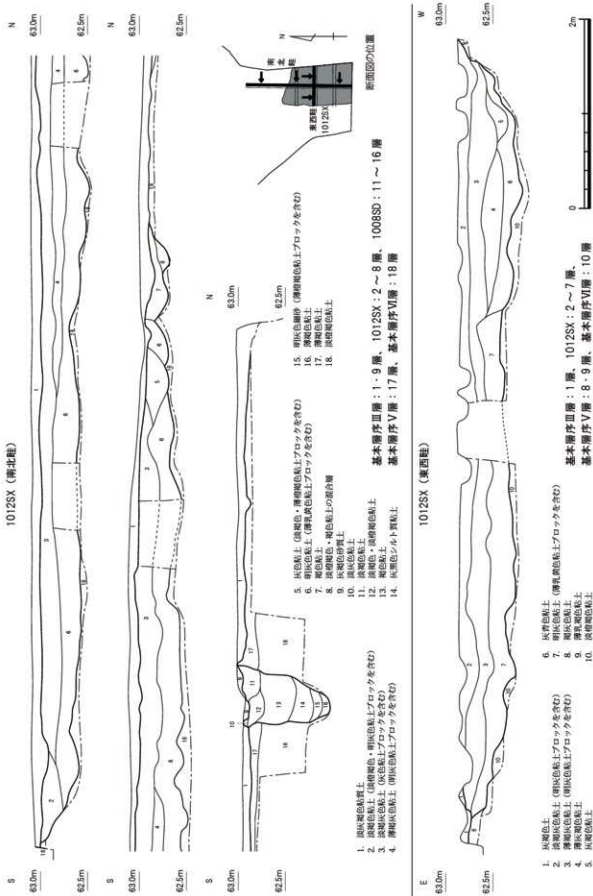


図14 1012SX土層断面図 (S = 1/40)

弥生時代～古墳時代の遺構（図15～50）

弥生時代～古墳時代の遺構および出土遺物は、今回の発掘調査における主要な成果に位置付けられる。出土遺物の量もこれらの時期が最も多い。遺構の時期は、弥生時代後期～古墳時代初頭と古墳時代中期が大部分を占める。発掘調査時には、これらの遺構を一括して下層遺構として調査を行っている。

図15・16の平面図には弥生時代～古墳時代と考えられる遺構を図示している。図15は土坑、溝、落ち込み等の主要な遺構の番号を、図16はピットの番号を記している。ただし平安時代後期～鎌倉時代の遺構の項でも述べた通り、ピットの中には古墳時代より後の時代のものを含んでいる可能性がある。遺構は調査区の中央部から東部にかけての範囲に密に存在している。

古墳時代中期の遺構

図17には明確に古墳時代中期と考えられる遺構を抽出して記している。

古墳時代中期の遺構には土坑、落ち込み、ピット、河道がある。遺構の時期は古墳時代中期後半が主であるが、出土遺物には古墳時代中期前半に遡るものも少量含まれる。古墳時代中期の遺構は、調査区中央部から調査区北辺中央の一帯に集中する。特に調査区中央部付近には複数の土坑が近接ないし重複して存在している。

1013NRは弥生時代から継続する河道であり、調査区の範囲内においては古墳時代前期のうちに大幅に埋没が進み、古墳時代中期の段階では調査区北東隅の位置へと河道西岸が移動している（古墳時代初頭以前の状況については後述する）。図17に記している古墳時代中期段階の1013NR西岸は、調査時には平面的に認識できていない。調査時には1013NRの最上層に古墳時代中期の遺物を含む土層が存在することを主として土層断面の観察で把握しており、調査区壁面土層断面の記録から平面上の位置を復元して記している。古墳時代中期における1013NRは検出幅東西約2.5m・深さ約0.6mである。

河道以外の遺構は、古墳時代中期における1013NR西岸から西に約10～30mの地点に存在している。その一部は、古墳時代中期までに既に埋没している1013NRの旧流路上に位置している（図15）。

土坑は14基、落ち込みは4基、ピットは3基、存在する。

1003SK・1004SK・1006SK・1007SKは調査区中央部にまとまって存在する土坑である（図18～20）。このうち1004SK・1006SK・1007SKは重複関係がある。1004SKおよび1006SKは、遺構検出段階において単体の土坑と認識していたものが調査の結果、それぞれ二つの土坑であることが明らかとなり、最終的に1004SK（古）・1004SK（新）および1006SK（古）・1006SK（新）として記録を行っている（新・古は時期的前後関係と対応する）。これらの土坑は遺構の重複関係から、1007SKと1004SK（新）が1006SK（新）より新しい遺構であることが確認できる。1004SK（古）と1006SK（新）・（古）の時期的前後関係は不明である。

1003SKは1004SKのすぐ北隣に位置する土坑である（図20・大畦）。平面形は直径1.8～2.2mの不整形である。深さは約0.7mで、断面形は弧状を呈する地点や台形を呈する地点があり不整形である。須恵器、土師器、韓式系土器、縄文土器、桃核1点、木実の皮が出土している。出土遺物から古墳時代中期後半の土坑であると考えられる。

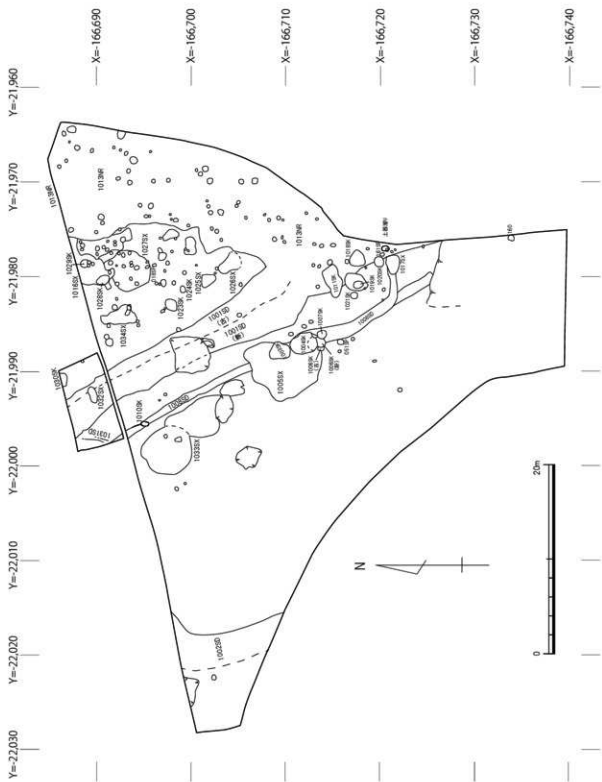


图 15 弥生时代~古坟时代遺構配置图① (S = 1/400。主要遺構番号を图示)

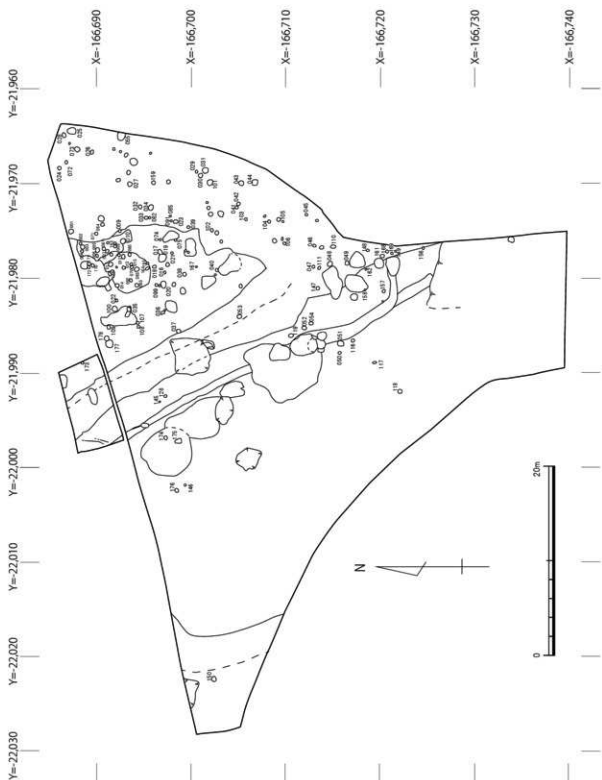


図 16 弥生時代～古墳時代遺構配置図② (S = 1/400。小規模遺構の番号を中心に図示)

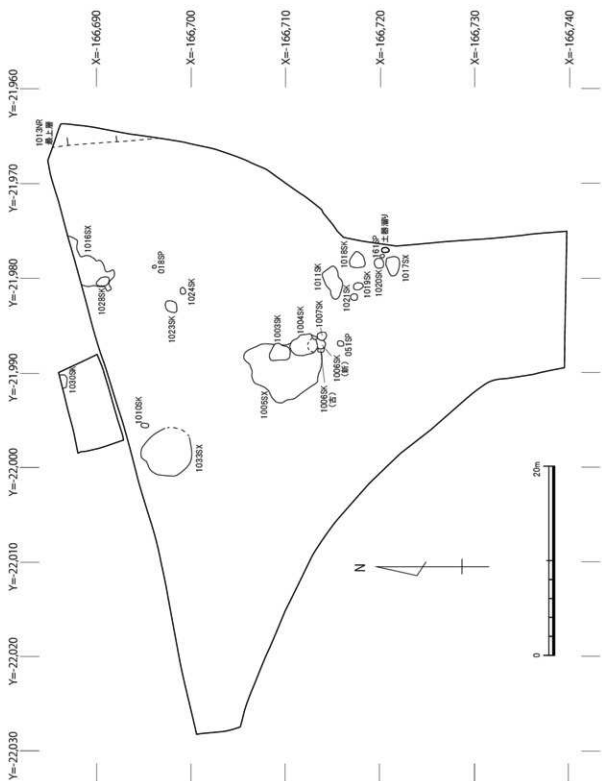
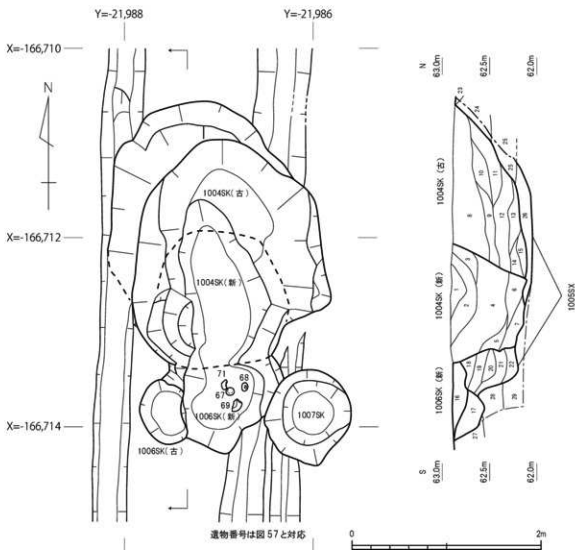


图 17 古墳時代中期遺構配置圖 (S = 1/400)



- | | | |
|--------------------------|----------------------|----------------------------|
| 1. 濃灰色砂質粘土 | 11. 明灰色砂質土 | 21. 薄黄灰色シルト (薄灰色粘土ブロックを含む) |
| 2. 濃灰色粘土 | 12. 灰色砂質土 | 22. 淡黄灰色粘土 (薄灰色粘土ブロックを含む) |
| 3. 濃灰色砂質土 (灰褐色粘土ブロックを含む) | 13. 灰色砂質土 (灰乳色細砂混じり) | 23. 濃茶褐色粘土 |
| 4. 灰色砂質土 | 14. 灰色粘土 (薄灰色微砂混じり) | 24. 黄褐色微砂 |
| 5. 濃灰色砂質土 (茶灰色砂質土混じり) | 15. 灰乳色粗砂 | 25. 灰色粘土 |
| 6. 濃灰色砂質土 (薄灰色粘土ブロックを含む) | 16. 灰色砂質土 | 26. 淡黄灰色微砂 |
| 7. 灰色砂質土 | 17. 濃灰色砂質土 | 27. 濃茶褐色粘土 |
| 8. 灰褐色砂質土 | 18. 薄乳灰色微砂 | 28. 黄褐色粘土 |
| 9. 濃灰色砂質土 (灰褐色粘土ブロックを含む) | 19. 暗茶褐色粘土 | 29. 薄黄灰色粘土 |
| 10. 灰褐色砂質土 | 20. 灰色粘土 | |

1004SK (新) : 1~7層、1004SK (古) : 8~15層、1006SK (新) : 16層、1006SK (古) : 17層、
1005SK : 18~26層、地山 (基本層序 V・VI層) : 27~29層

図 18 1004SK・1006SK・1007SK 平面・断面図 (S = 1/40)

1004SK (新) は平面形が東西 1.5 m・南北 1.3 m の円形の土坑である。深さは 0.8 m で、断面形は台形を呈する。1004SK (古) は平面形が東西 2.2 m・南北 2.8 m の楕円形の土坑である。深さは 0.8 m で、断面形は弧状を呈する。1004SK (新) (古) の出土遺物には、須恵器、土師器、韓式系土器、製塩土器がある。鍋が複数個体出土している点も特徴的である。出土遺物は 1004SK 一括として取り上げが行われている。出土遺物の時期は古墳時代中期後半である。その中に中期末頃と考えられる須恵器を含んでおり、少なくとも 1004SK (新) は中期末頃の遺構であると考えられる。

1006SK (新) は平面形が東西 1.1 m・南北 0.9 m の円形の土坑である。深さは 0.7 m で、断面形は下半部が台形を呈し、上半部は外に開く形状である。1006SK (古) は平面形が直径 0.7 m の円形

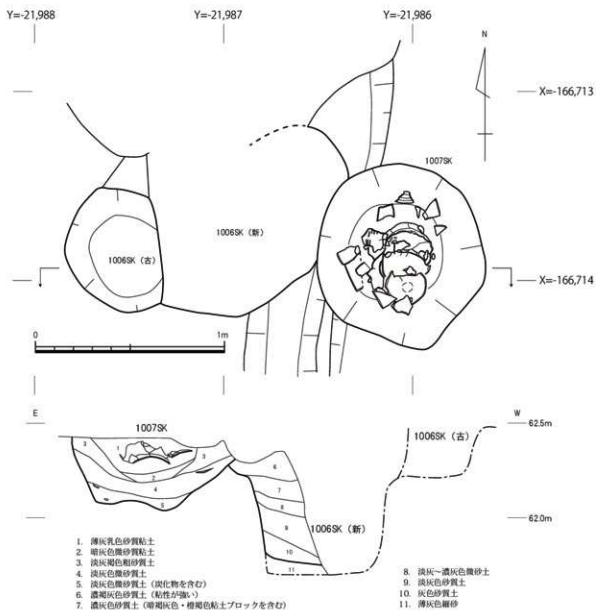


図19 1006SK・1007SK 平面・断面図 (S = 1/20)

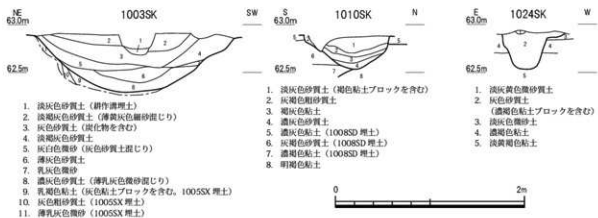


図20 1003SK・1010SK・1024SK 断面図 (S = 1/40)

の土坑である。深さは0.3 mであるが、詳細な断面記録は無い。1006SK（新）（古）の出土遺物には、須恵器、土師器、桃核1点がある。出土遺物は1006SK一括として取り上げが行われている。出土遺物の時期は古墳時代中期後半である。出土遺物の量は遺物コンテナ0.5箱分と周辺の土坑と比較して少ないながら、破片が大きく状態が良好な土器が含まれる。

1007SKは平面形が直径1.0 mの円形の土坑である。深さは0.4 mで、断面形は台形を呈するが底面は平坦ではなく若干の起伏がある。出土遺物には須恵器、土師器、製塩土器がある。遺構埋土上層から大型の須恵器甕と土師器長胴甕が固まって出土している。出土遺物の時期から古墳時代中期後半の土坑であると考えられるが、中期前半に遡る土器片も含まれている。

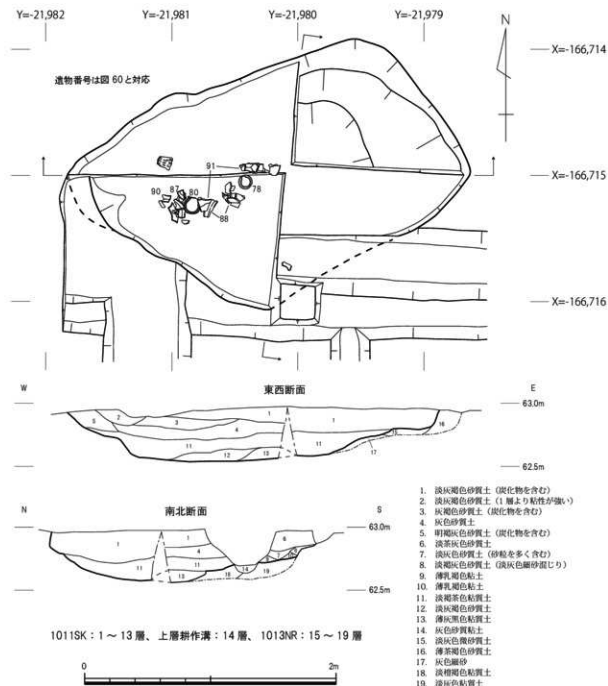


図21 1011SK平面・断面図 (S=1/30)

1010SKは調査区北辺沿い、拡張区の南隣に位置する土坑である。平面形は直径0.8～1.0mの円形である。深さ0.4mで、断面形はやや緩やかなV字形である。少量ながら古墳時代中期後半の土師器が出土している。

1011SKは調査区中央からやや南東に位置する土坑である(図21)。平面形が長辺2.5m・短辺1.5mの長方形の土坑である。深さは0.4mで、断面形は弧状を基本とするが土坑壁面の一部は垂直気味に立ち上がる。遺構埋土には炭化物がまばらに含まれる。須恵器、土師器、韓式系土器、製塩土器が出土している。製塩土器の出土量は今回の調査で最も多い。遺物は土坑全体から出土しているが、大きめの土器片は土坑南西部から多く出土している。出土遺物から古墳時代中期後半の遺構であると考え

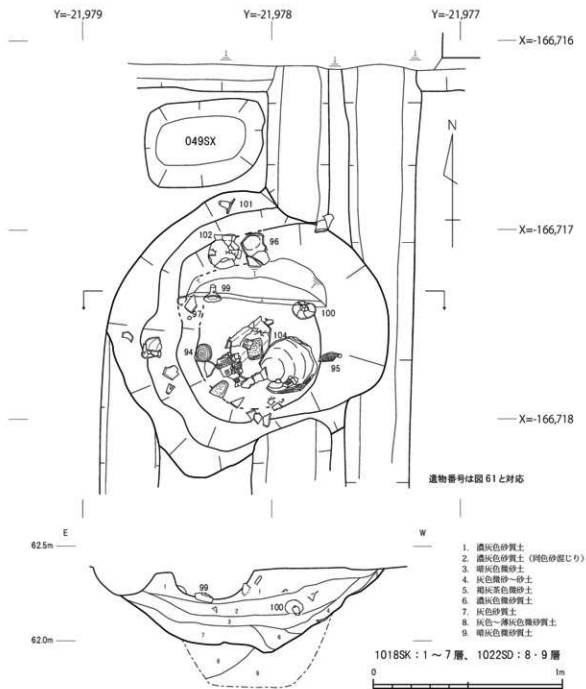


図22 1018SK 平面・断面図 (S = 1/20)

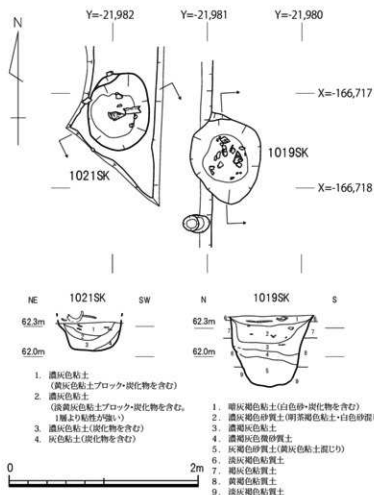


図23 1019SK・1021SK 平面・断面図 (S=1/40)

物から古墳時代中期後半の土坑であると考えられる。

1020SKは1018SKの南隣に位置する土坑である(図24)。平面形は直径0.9~1.1mの円形である。深さは0.6mである。出土遺物は須恵器、土師器、製塩土器、木材がある。土器のうち須恵器は表1点のみで、他は土師器である。土師器は特に高坏が多く、少なくとも15個体分が出土している。遺物は遺構検出面直下の深さから多数が出土している(図24-上段、土層断面1層)。出土遺物から古墳時代中期の土坑であると考えられる。

1021SKは1019SKから約0.5m北西隣に位置する土坑である(図23)。平面形は直径0.6~0.8mの円形である。深さは0.4mで、断面形はU字形を呈する。出土遺物には須恵器、土師器がある。土師器は器面の磨滅が激しいものが大半を占める。出土遺物から古墳時代中期後半の土坑であると考えられる。

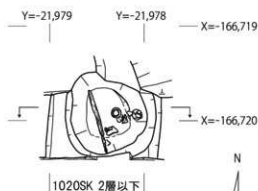
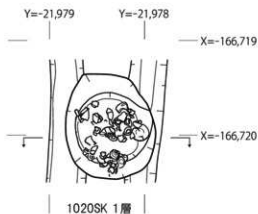
1023SKは調査区北東部に位置する土坑である(図25)。平面形は直径1.1~1.5mの楕円形である。深さは1.2mで、断面形は土坑下半部が緩やかなV字形で上半部は外に開く形状である。須恵器、土師器、韓式土器が出土している。出土した土師器には内面底部に炭化米が付着した糞が存在する。古墳時代中期後半の土坑であると考えられる。

1024SKは1023SKの南東に位置する土坑である(図20)。平面形は直径0.6~0.7mの円形である。

えられる。

1018SKは1011SKの南東に位置する土坑である(図22)。平面形は直径1.5mの円形である。深さは0.4mで、断面形は掘り鉢形を呈する。須恵器、土師器、韓式土器、製塩土器が出土している。土師器と韓式土器は破片状態で出土しているが、鍋(図61-104)はほぼ全体の破片が遺存している。出土遺物から古墳時代中期中葉の土坑であると考えられる。古墳時代中期前半に遡る土器も含まれる。

1019SKは1018SKの西隣に位置する土坑である(図23)。平面形は直径0.7~1.0mの楕円形である。深さは0.7mで、断面形は砲弾形である。須恵器、土師器、砥石の他、2~5cm大の粘土塊や小礫が複数出土している。これらの出土遺物は、いずれも土坑上半の埋土から出土している。出土遺



1020SK : 1~5層、1022SD : 6層、地山 : 7~9層

1. 灰色粘土(黄褐色粘土ブロックを含む)
2. 淡灰色シルト質粘土(炭化物を含む)
3. 灰乳色粘土(炭化物を含む)
4. 灰乳色粘土(濃灰色砂質土混じり)
5. 濃灰色粘土(黄褐色粘土混じり)
6. 濃灰色砂質粘土
7. 濃灰色粘土
8. 淡灰褐色粘土(黄褐色粘土混じり)
9. 黄褐色粘土



図24 1020SK 平面・断面図 (S = 1/40)

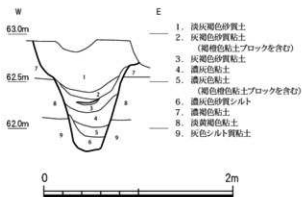
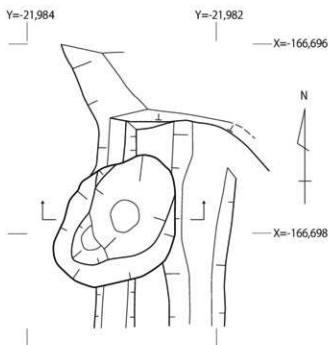


図25 1023SK 平面・断面図 (S = 1/40)

深さは0.4mで、断面形はやや開くU字形を呈し西側は上部が浅く広がる。古墳時代中期と考えられる土師器の小片がわずかに出土している。

1028SKは調査区北東部に位置する土坑である(図版14右上)。平面形は直径0.8~1.5mの不整形である。深さは約0.7mである。土坑の底面から完形に近い状態の須恵器甕が1点出土している(図66-152)。甕の底部には網籠と考えられる植物片が付着していた。この他に土師器甕の底部片1点と桃核2点が出土している。出土遺物から古墳時代中期後半の土坑であると考えられる。

1030SKは調査区北側拡充区の北東隅に位置する土坑で、遺構の北半部は調査区外にある(図

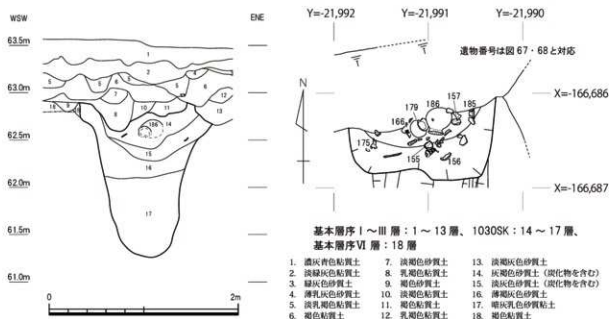


図 26 1030SK 平面・断面図 (S=1/40)

26)。平面形は東西 1.5 m、南北 0.9 m 以上の隅丸方形であると考えられる。深さは 1.6 m で、断面形は上方がやや外に開く U 字形である。出土遺物には須恵器、土師器がある。出土遺物の多くは遺構埋土上層 (図 26 の 14・15 層) から出土している。土師器は遺存状態が良いものが多く、完形に近い状態の甕・壺・高坏もある。土師器高坏は数量が多く、少なくとも 16 個体分が存在し、うち 11 点はほぼ完形の状態で出土している。出土遺物から古墳時代中期後半の土坑であると考えられる。

1005SX は調査区中央部に位置する落ち込みである。平面形は直径 6.8～8.4 m の不整形である。深さは最大 0.8 m で、断面形は掘り鉢状を呈する (図 37)。出土遺物は須恵器、土師器、サマカイト、結晶片岩が存在するがいずれも細片で量も少ない。遺構の重複関係から、古墳時代中期後半の土坑群である 1003SK・1004SK・1006SK・1007SK よりも古い遺構であることが確認でき、出土遺物と合わせて古墳時代中期の落ち込みであると考えられる。

1016SX は調査区北東部に位置する落ち込みである。平面形は直径 3.2～5.0 m の不整形である。深さは 0.1 m 未満で、浅く広い範囲に微砂層が堆積している。須恵器、土師器、製塩土器、燃えさしが出土している。時期は古墳時代中期後半であると考えられる。遺構の重複関係から 1028SK より古い遺構である。1013NR の古墳時代中期における氾濫層の溜まりである可能性が考えられる。

1017SX は調査区南東部、古墳時代中期の遺構の中では最も南に位置する遺構である (図 27)。平面形が東西 2.0 m、南北 1.3 m の楕円形である。深さは 0.3 m で、断面形は緩やかな弧を描く形状である。須恵器、土師器、韓式系土器が出土している。須恵器と韓式系土器はそれぞれ甕の体部 1 点のみで、他は全て土師器である。古墳時代中期の落ち込みであると考えられる。

1033SX は調査区北辺沿い中央部に位置する落ち込みである (図 28)。平面形は東西 4.9 m、南北 4.2 m の楕円形である。深さは 0.6 m で、断面形は緩やかな弧を描くが東・南側では側面が垂直気味に立ち上がる。遺構埋土は炭化物を含む粘土層が大半を占める。出土遺物は須恵器、土師器、ミニチュア土器がある。須恵器と土師器は表面が磨滅した細片ばかりである。古墳時代中期の落ち込みであると考えられる。

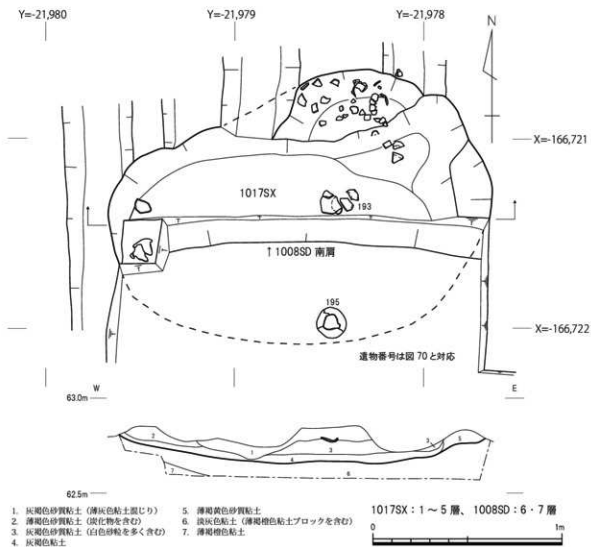


図 27 1017SX 平面・断面図 (S = 1/20)

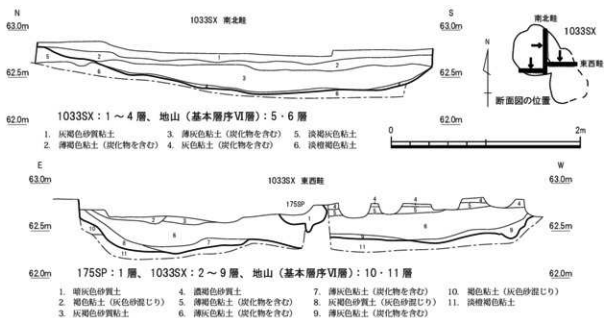


図 28 1033SX 断面図 (S = 1/40)

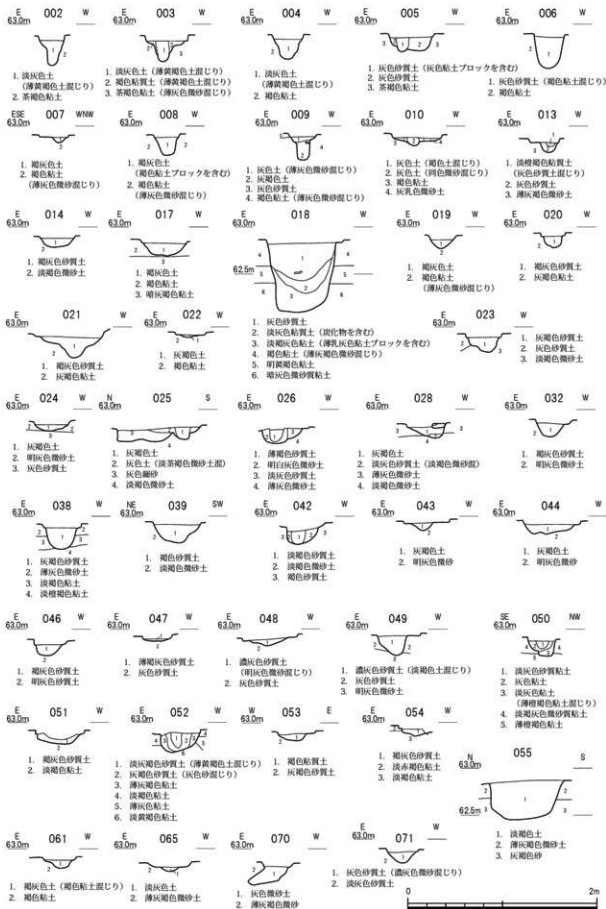


図 29 SP 断面図① (S = 1/40)

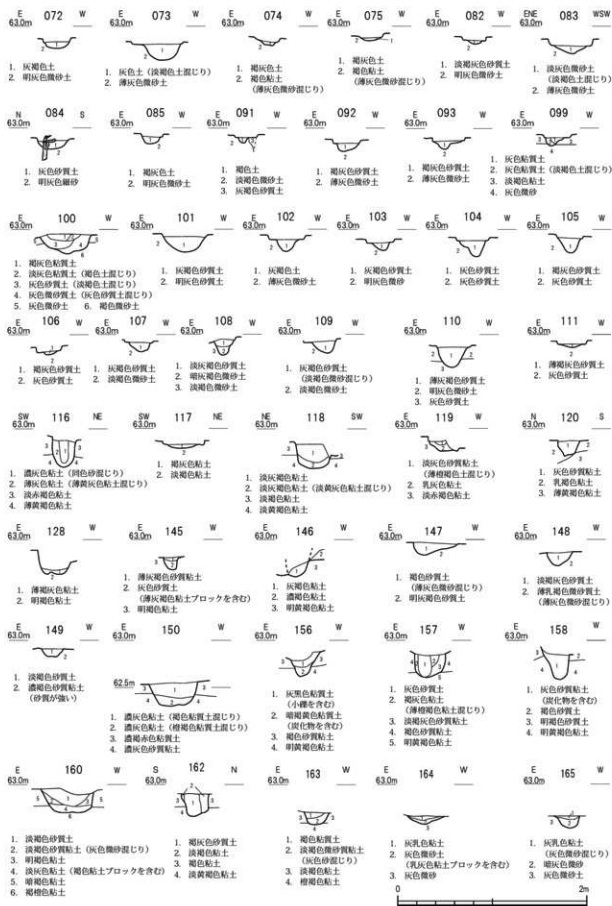


図 30 SP 断面図② (S = 1/40)

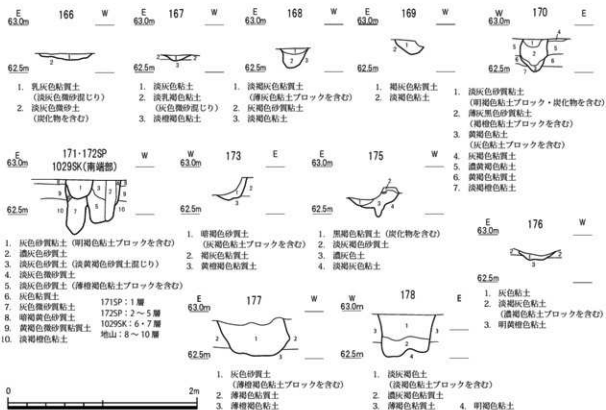


図 31 SP 断面図③ (S = 1/40)

018SPは調査区北東部に位置するピットである(図29)。平面形は直径0.7mの円形である。深さは0.7mで、断面形はU字形である。須恵器、土師器、韓式系土器が出土している。また、馬歯がまとめて出土している(図版15)。出土遺物から古墳時代中期後半の遺構であると考えられる。

051SPは調査区中央部、1006SKの南に位置するピットである(図29)。平面形は直径0.4mの円形である。深さは0.2mで、断面形はU字形である。須恵器、土師器が出土している。出土遺物から古墳時代中期の遺構であると考えられる。

161SPは調査区南東部に位置するピットである(図32)。平面形は東西0.4m、南北0.5mの隅丸方形である。深さは0.4mで、断面形はやや開くU字形である。須恵器、土師器、製塩土器が出土している。出土遺物から古墳時代中期後半の遺構であると考えられる。

161SPから東に約1mの地点では、土器

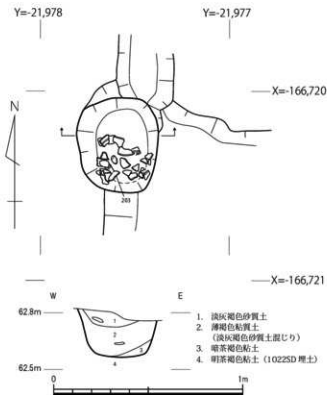


図 32 161SP 平面・断面図 (S = 1/20)

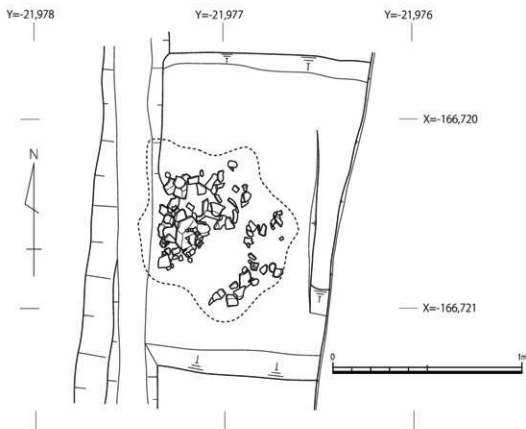


図 33 調査区南東部 土器溜まり平面図 (S = 1/20)

が平面的にまとまって出土する土器溜まりが存在することを確認している (図 33)。直径約 0.6 m の範囲に土器が集中している。須恵器、土師器、製塩土器があり、大部分が土師器である。古墳時代中期後半の遺物である。周辺に存在する同時期の土坑・落ち込みと同様の遺構であった可能性が高いが、調査時に遺構としてのまとまりを把握できていない。

平安時代～鎌倉時代の遺構の項末尾で述べたように、この他に詳細時期不明の小規模ピットが多数存在する (図 15・16・29～31)。これらのピットの大部分は調査区北東部を中心とする範囲に分布しており、1013NR や耕作溝群との重複関係から古墳時代中期～平安時代末頃のいずれかの時期の遺構であると考えられる。

弥生時代後期～古墳時代前期の遺構

この時期の遺構は河道、溝、落ち込みがある (図 15・16)。今回の調査地の南隣で実施した榎教委 2007-5 次発掘調査 (榎原市教育委員会 2021『新堂遺跡 V』で報告済) においては、この時期の遺構・遺物が多数存在することを確認している。同報告では、いわゆる庄内式期から布留 0 式期にかけての時期を古墳時代初頭として扱っており、今回の報告でもこれを踏襲する。今回の調査地点で確認した遺構の時期は、弥生時代後期から古墳時代前期前半 (布留 1 式期) にかけての範囲である。これらの遺構からの出土遺物には、弥生時代中期以前のもも含まれる。

1013NR は調査区東辺沿いに位置する河道である (図 15・34・35)。南から北に向かって流れる河道の西岸部にあたり、東西幅約 10.2 m、南北長約 50.0 m の範囲を検出している。この数値は 1013NR と 1001SD の間に存在する 1013NR からの氾濫層であると考えられる砂質土 (基本層序 IV 層)

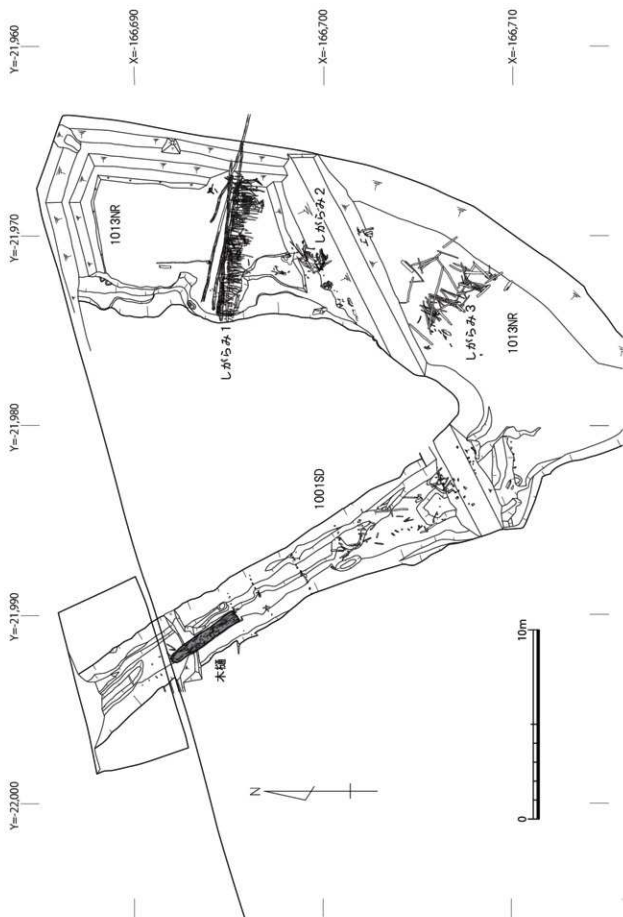


图 34 1013NR・1001SD 平面図 (S = 1/200)

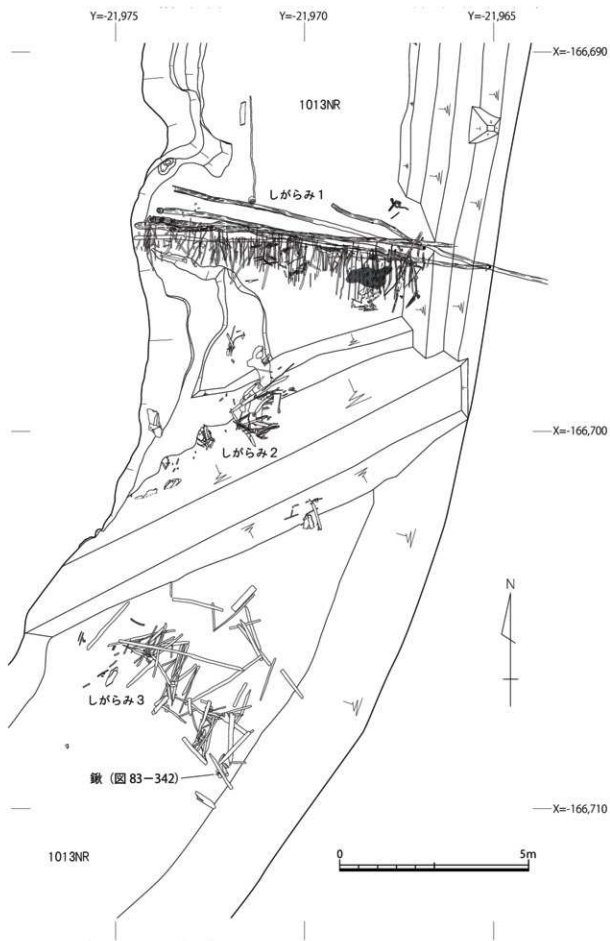


図 35 1013NR 北半部平面図 (S = 1/100)



图 36 1013NR 大畦北面土層断面图① (S = 1/40)

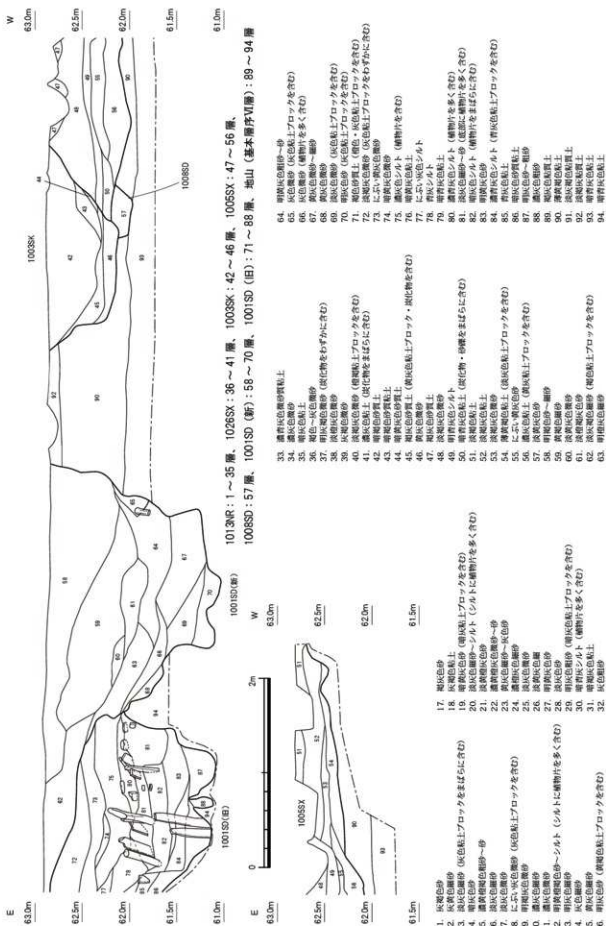


図 37 1013NR 大畦北面上層断面図② (S = 1/40)

の範囲は含んでいない。1013NRは調査区の範囲内においては、弥生時代後期から古墳時代前期に掛けての期間に流水がある状態を保ち、古墳時代初頭から次第に埋没が進み、古墳時代前期前半のうちに大部分が埋没する。ごく一部の古墳時代中期まで継続する地点については、古墳時代中期の遺構の項で述べている。深さは最大約2.7mで、埋土の大半を微砂～砂層が占める。調査時には、調査区東辺北半から調査区中央部にかけて1013NRを始めとする複数の遺構を含む大畦を設定して土層断面の記録を行っている(図36・37)。

1013NR北半部の3ヶ所に、多数の木材を組み合わせた、しがらみ遺構が存在することを確認している(図35)。北から順にしがらみ1・2・3と認識して調査を行っている。それぞれの時期は、しがらみの内部および周辺からの出土遺物から、しがらみ2・3が庄内式段階に埋没し、しがらみ1が布留式古段階に構築されたと考えられる。各しがらみの詳細な構造については後述するが、河岸から河の中に流れと直交する方向で設置されており、制水目的で造られた構造物と考えられる。また、しがらみの南西には1013NRと1001SDの接続部が位置しており、1001SDへ導水する役割も果たしていたと考えられる。

しがらみ1は最も北側に位置し、今回確認した中では構築時の状態を最も良く遺している(図38～44)。しがらみ1の基本的な構造は、直径約0.1～0.2mで長さ約7.0mを越えるような長い木材を河の流れに直交する方向(概ね東西方向)に横木として重ね、その南面(上流側)に直径0.03～0.05mの杭材を多数並べる形である。横木はほぼ水平方向に据えられている。杭材はほぼ垂直から約45度頭を北に倒す範囲の角度で立て並べられている(図44)。杭材は北面には存在せず、いわゆる合掌形の構造ではない。杭の長さは約1.0～1.5mのものが主である。横木は杭材の上半部にあたる位置にあり、杭材の下半部は地中(河道の古い埋土である砂層)に打ち込まれていた可能性が高い。しがらみ1の検出長は調査区東壁までの東西約8.0mである。横木の一部は、そこからさらに東へ約3.0m以上続くことを確認している(図35)。しがらみ上面の位置は、河道上面から約0.5mの深さにある。しがらみ1の西端部一帯は、河岸が周辺よりも抉れており、しがらみを構築するために河岸を若干掘削したと考えられる。横木は西端部に加工を施したものが含まれている(図39)。横木と杭材を組み合わせて構築されているが木材のみで大型の横木を保持できるような構造ではなく、砂層や粘土とも組み合わせる形の不透過性の水制構造物であったと考えられる。ただし木材の周辺に堆積する土層のどの範囲までが一連の遺構であったかについては明確にできていない。しがらみ1の内部(横木直下の砂層。図41～6層)からは布留式古段階の土師器が出土している。また、しがらみ1を覆う河道埋土からも同様の時期の遺物が出土しており、構築から比較的早い段階でしがらみ1は砂中に埋もれたと考えられるが、水制としての役割は果たし続けていたと推測される。なお、しがらみ1の北側ではしがらみから流出したと考えられる木材の出土量はわずかである。

しがらみ2は、しがらみ1の西半部から南に約3～7mの範囲に広がって、大小の木材がまとまって出土している(図35、図版23)。板材、杭材、自然木が混ざる形で出土している。しがらみ1のように構造物として木材が組み合った状態ではなく、それが倒壊して流出した姿であると考えられる。元は上流に位置するしがらみ3の一部であった可能性もある。しがらみ2の周辺からは庄内式期の土器が出土しており、しがらみ1の周辺と比較して弥生土器の出土量も多い。

しがらみ3は最も南に位置するしがらみである(図35、図版23)。南西―北東方向に延びる河岸に直交するように北西―南東方向に並ぶ形で、板材や丸太材、杭材、自然木が多数出土している。木

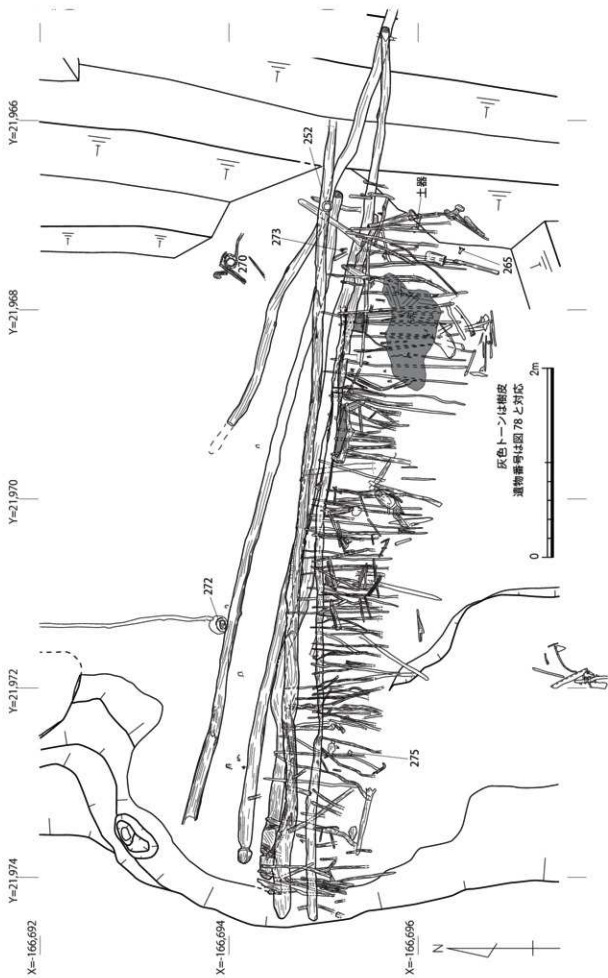
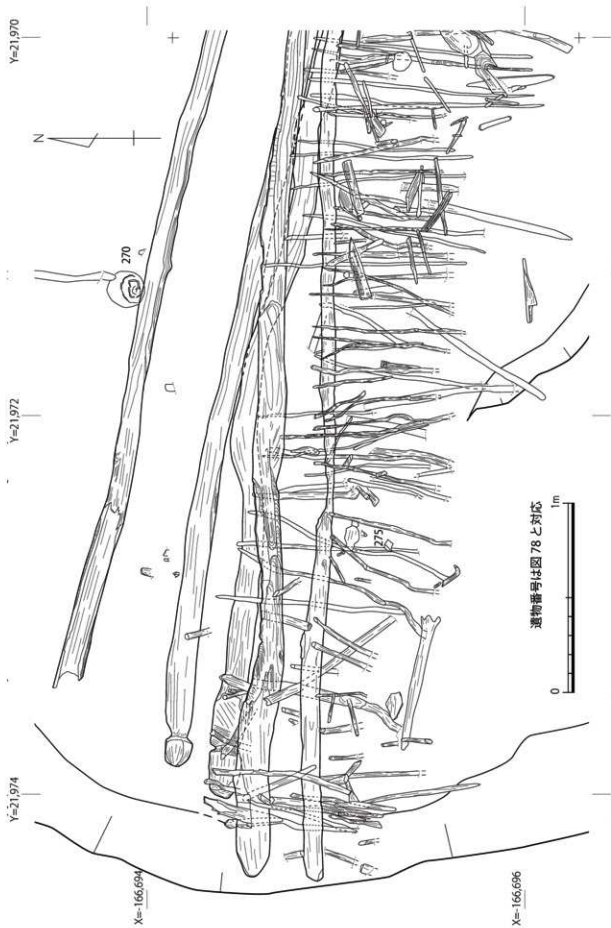


図 38 1013NR しがらみ 1 平面図 (S = 1/40)



遺物番号は図78と対応

図39 1013NR しからみ1 概大平面図① (S = 1/20)

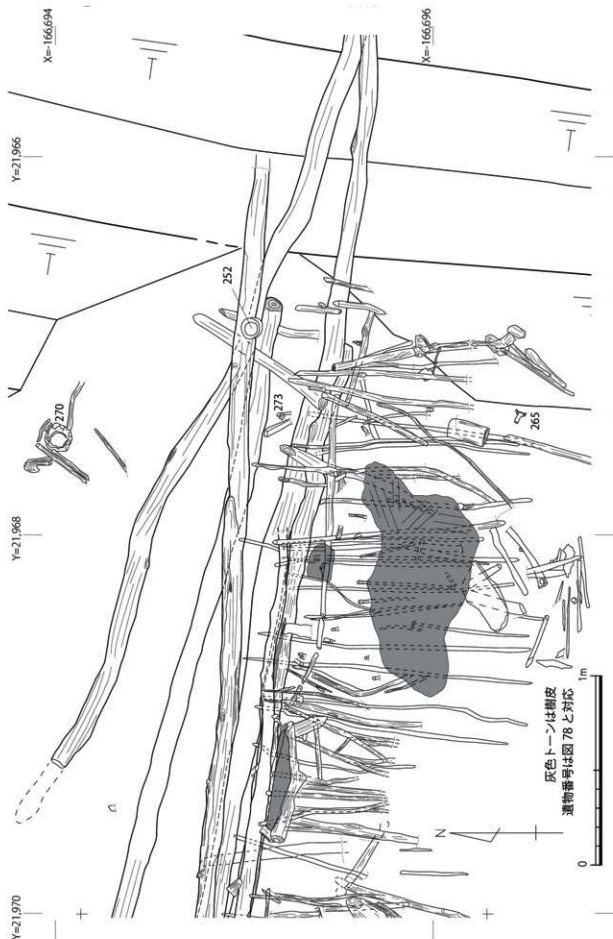


图 40 1013NR しがらみ 1 批大平面图② (S = 1/20)

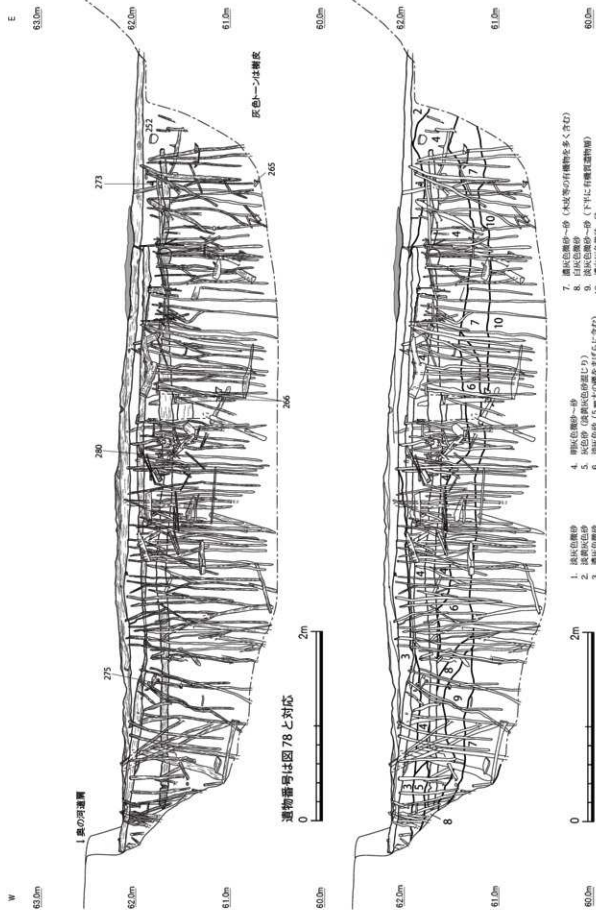


図41 1013NR しがらみ I 立面・土層断面図 (S = 1/40)

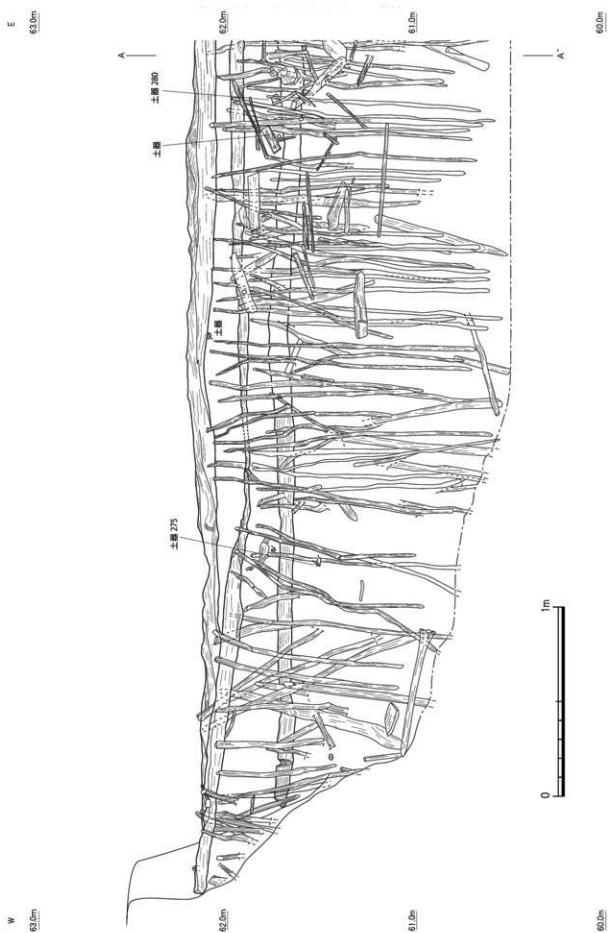


図 42 1013NR しがらみ 1 概大立面図① (S = 1/20)

W
63.0m

E
63.0m

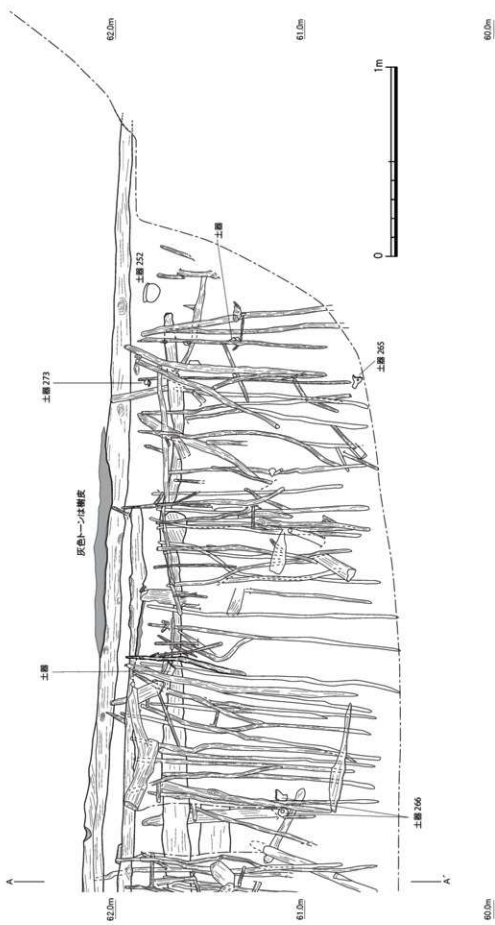


图 43 1013NR しがらみ 1 概大立面图② (S = 1/20)

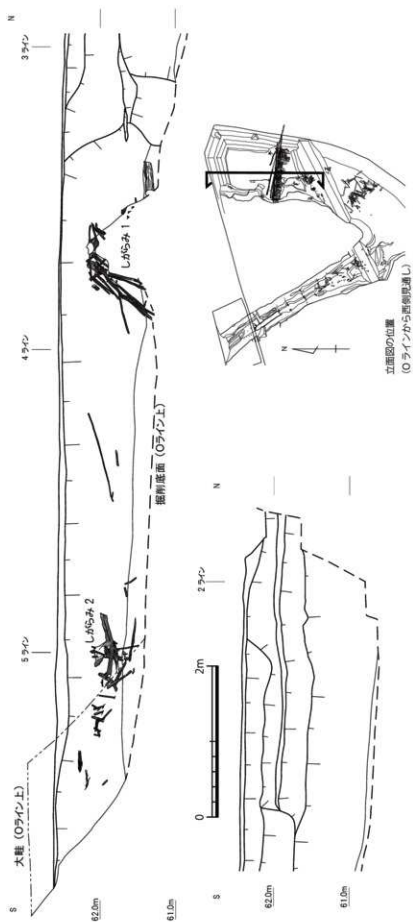


図 44 1013NR 大畔以北 縦断面図 (S = 1/50)

製鐵も1点含まれている。長さ1mを超える木材が多くを占め、長さ3m超の丸太材も含まれる。これらの木材は構築当初の姿から倒壊した状態で出土していると考えられるが、位置は概ね保っていると推測される。構築時の構造は、しがらみ1と同様の不透透性の構造物であったか否かは不明である。しがらみ3周辺からの出土遺物は、しがらみ2と同様である。

1013NR内のしがらみは、まず庄内式段階にしがらみ2・3が構築される。その後、布留式古段階になってしがらみ1が構築される。しがらみ2・3はこの時点で既に倒壊して埋没した状態であるが、水制構造物としての機能がある程度維持されていたかどうかは不明である。

1001SDは調査区北半部に位置する溝である(図45~49)。北北西—南南東方向の直線的な溝で、南端は1013NRと接続する。南から北に向かって水が流れたことが断面確認でき、1013NRからの導水路であったと考えられる。1001SDは掘り直しが行われており、新・古の二段階が存在している(図37・46)。図45は両者を完掘した状態の平面図である。1001SD(新)は1001SD(古)の埋没後にやや西の位置に掘られており、北側ほど両者が重なる位置関係にある(図15)。1001SD(新)の規模は幅約2.6~3.3m、長さ約39.0mである。深さは約1.6~1.8mで、断面形は南側では台形を呈し、北側ではV字形に近くなる。溝底面の標高は北側がわずかに低い。1001SD(新)の北半部では木樋が一ヶ所で出土している(図45~48)。木樋は一木を半裁して内側を削り抜いた後に、上下(蓋・身)に組み合わせて筒状にして溝の底面に据えられている。木樋の規模は長さ4.2m、幅0.6~0.7m、高さ0.3~0.4mである。身・蓋とも厚さは0.03~0.04mである。蓋には南側に二ヶ所、身には北側に一ヶ所、それぞれ直径約0.05cm大の孔が穿たれている。木樋はこの一ヶ所のみで、他に木樋の痕跡や部材の一部は存在していない。1001SD(古)の規模は幅最大約3.2m、長さ約26.5mである。深さは約1.6~1.8mで、断面形は南側では台形を呈する。底面の高さは1001SD(新)とほぼ同様である。1001SD(古)は西半全体を1001SD(新)によって削平されているため、本来の幅は不明であるが概ね1001SD(新)と同様の規模であったと推測される。1001SD(古)には、溝を横断する形で矢板杭を並べた堰状の構造物が、少なくとも8ヶ所に存在する(図45・49)。特に溝の北半部の矢板杭列は遺存状態が良く、1001SD(新)の掘削が行われた際に当該部分の矢板が除去されていることも確認できる。一方、溝の南半部では矢板杭を含む複数の木材が散乱した状態で出土している。これらは北半部と同様の矢板杭列や、1013NRとの接続部一帯に存在していた導水路の構造物の残骸である可能性が考えられる。出土遺物については、1001SD(古)は数が非常に少ないが庄内式期の遺物が存在している。1001SD(新)からは布留式古段階の遺物が出土している。1001SD(古)が掘削された時期は明確ではないが、庄内式期を中心に利用されて埋没したと考えられる。おそらく埋没からそれほど時期を経ないうちに1001SD(新)の掘削が行われ、布留式古段階のうちに埋没したと考えられる。なお、1013NRは1001SD(新)の埋没後も調査区の範囲内において河道として継続していたことが確認できる。

1002SDは調査区北西部に位置する河道である。最終段階の堆積(図5—36~39層)が幅約8mの溝状を呈することから1002SDとの遺構番号が付与されているが、最終的に幅約15m以上の河道であることが明らかとなった。深さは1.9m以上である。出土遺物はほとんど無く、わずかに弥生土器の小片が出土している。出土遺物から弥生時代後期以降の遺構であると考えられる。

1008SDは調査区中央部に位置する溝である(図50)。北北西—南南東方向の直線的な溝で、1001SDおよび1013NR南半西岸と平行する位置関係にある。溝の南端は東へ屈曲し1013NRに接

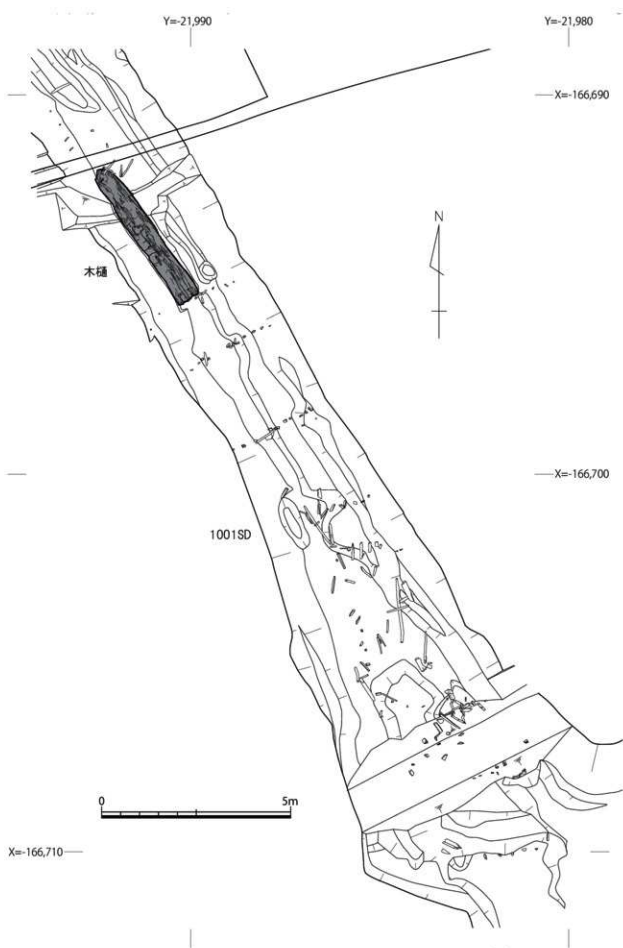
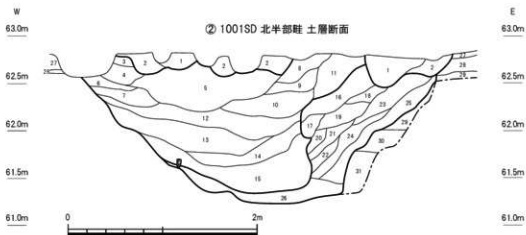


图 45 1001SD 平面图 (S = 1/100)



中世以降の耕作層：1～3層、1001SD（新）：4～19層、1001SD（旧）：20～25層、地山：26～31層

- | | | |
|-------------------|-----------------------------|---------------------|
| 1. 薄灰色粘質土 | 12. 灰青色粘土 (薄黄褐色粘土ブロック混じり) | 23. 青灰色微砂混じり粘土 |
| 2. 淡褐色砂質土 | 13. 濃灰色砂質粘土 (薄灰青色粘土ブロック混じり) | 24. 暗灰青色粘土 |
| 3. 灰褐色粘質土 | 14. 灰褐色砂質土 | 25. 濃褐色粘土 (黄灰色砂混じり) |
| 4. 淡灰色砂質土 (砂質が強い) | 15. 灰色粘土 (薄灰褐色微砂混じり) | 26. 淡褐色粘土 |
| 5. 黄灰色砂質土 | 16. 灰青色粘土・灰褐色砂の混合層 | 27. 淡褐色粘土 |
| 6. 灰白色砂 | 17. 濃灰色砂質粘土・灰青色粘土の混合層 | 28. 暗褐色粘土 |
| 7. 淡灰色細砂 | 18. 濃灰色砂質土 | 29. 青灰色粘土 |
| 8. 淡灰色砂 | 19. 暗灰色粘土 (灰白色微砂混じり) | 30. 青灰色微砂質粘土 |
| 9. 黄灰色砂 | 20. 濃灰茶色粘土 | 31. 濃灰色粘土 |
| 10. 薄灰色微砂 | 21. 灰青色粘土 | |
| 11. 黄灰色砂質土 | 22. 濃灰色粘土 | |



中世以降の耕作層：1・2層、1001SD（新）：3～15層、1001SD（旧）：16～26層、地山：27～31層

- | | |
|-------------------------|-----------------|
| 1. 灰褐色粘質土 | 23. 濃灰茶色粘土 |
| 2. 薄灰色粘質土 | 24. 濃灰緑色微砂混じり粘土 |
| 3. 薄灰色微砂 (淡灰色砂混じり) | 25. 濃灰色粘土 |
| 4. 淡灰色砂 | 26. 明灰色微砂 |
| 5. 灰白色砂 | 27. 淡褐色粘土 |
| 6. 灰褐色砂 | 28. 淡褐色粘土 |
| 7. 薄灰色砂 (濃灰色微砂混じり) | 29. 視褐色粘土 |
| 8. 淡灰色砂 | 30. 青灰色粘土 |
| 9. 淡灰色微砂 | 31. 濃灰色粘土 |
| 10. 淡灰色微砂～微砂 | |
| 11. 淡褐色粘土 | |
| 12. 淡灰色砂 | |
| 13. 灰白色砂 | |
| 14. 灰白色砂 (濃灰色微砂混じり) | |
| 15. 淡灰色微砂 | |
| 16. 濃灰色砂質土 | |
| 17. 灰褐色粘土 (淡緑灰色微砂混じり) | |
| 18. 濃灰茶色砂質粘土 | |
| 19. 灰褐色粘土 | |
| 20. 灰褐色砂 | |
| 21. 灰褐色粘土・淡緑灰色微砂混じりの混合層 | |
| 22. 灰青色粘土 (濃灰緑色微砂混じり) | |

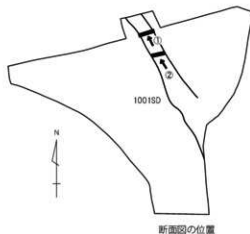


図 46 1001SD 北半部断面図 (S = 1/40)

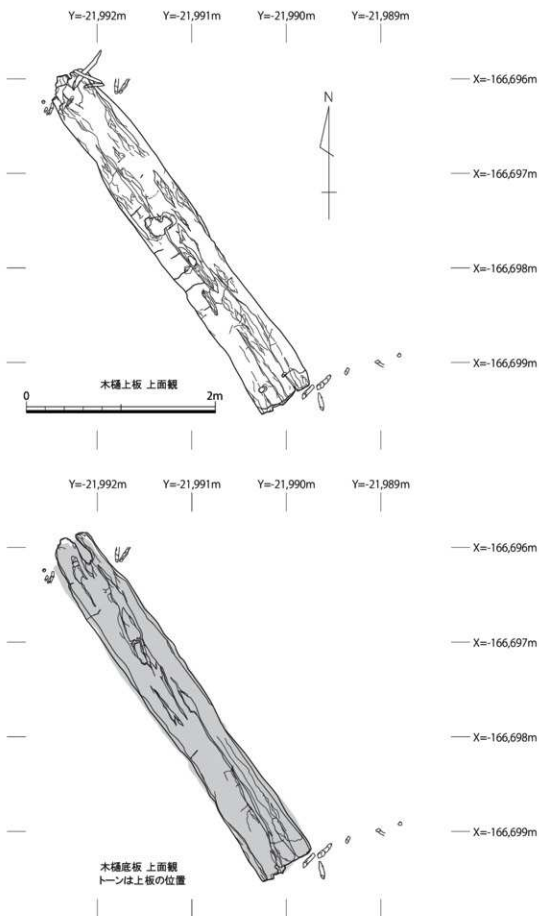


图 47 1001SD 木樋出土状況图 (S = 1/40)

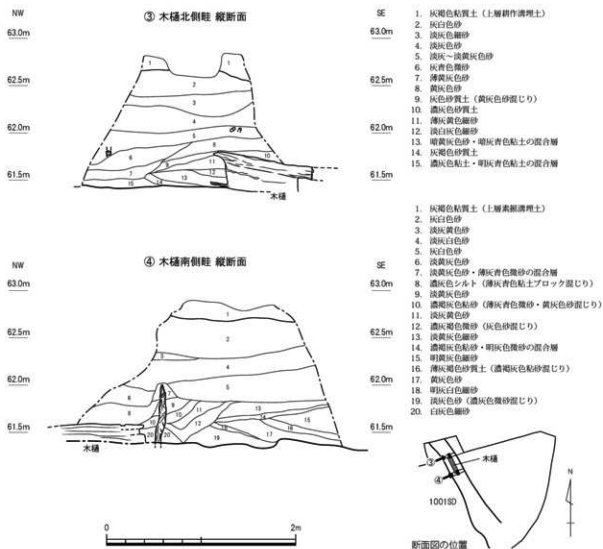


図 48 1001SD 木樋両端部断面図 (S = 1/40)

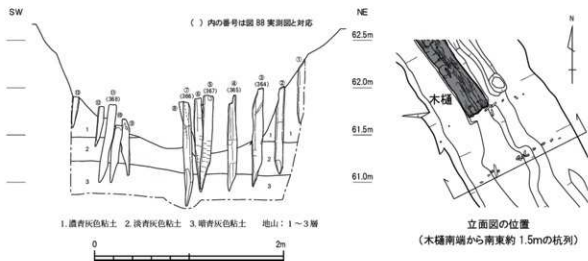


図 49 1001SD 木樋南側堰立面図 (S = 1/40)



図50 1008SD 断面図 (S = 1/40)

続する。規模は長さ約 37.5 m、幅約 0.6~1.2 m である。深さ約 0.5~0.9 m で、全体の傾向として北側ほど幅が細く深くなり、断面形は南側では台形、北側ではU字形となる。最終的に溝の大部分が人為的に埋め立てられている。遺物は出土していないが、周辺の遺構との関係性から弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのいずれかの時期の溝であると考えられる。

1031SD は調査区北部の拡張区西半に位置する北北東—南南西方向の溝である。1001SD と 1008SD の間に位置するが、溝の両端が耕作溝によって削平されており、両者との新旧関係は不明である。規模は長さ 2.8 m、幅約 0.3 m、深さ約 0.2 m である。出土遺物は、古墳時代初頭の土師器の小片がある。

1025SX は調査区中央部、1013NR と 1001SD との接続部から北に約 5 m の地点に位置する落ち込みである。平面形は直径約 1.1~1.4 m の不整形である。深さ約 0.2 m 未満の浅い落ち込みである。出土遺物には土師器、弥生土器がある。

1026SX は 1025SX の南東隣に位置する落ち込みである(図 36)。平面形は直径約 1.1~2.8 m の不整形である。深さ約 0.6 m で、断面形は台形を基本として底面には凹凸が多く存在する。1013NR の氾濫層であると考えられる微砂層が堆積している。出土遺物は弥生土器、縄文土器、石器がある。

この他、出土遺物は無いものの 1013NR の氾濫層であると考えられる微砂~砂層が堆積している落ち込みとして 1027SX、1034SX がある。いずれも深さ約 0.3 m 未満の浅い落ち込みである。

第4節 遺物

出土した遺物には、土器（縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・韓式系土器・瓦質土器・瓦器・磁器・ミニチュア土器・製塩土器）、石製品、石器、木製品、鉄製品、動物骨（馬歯）等がある。

出土遺物の量は遺物コンテナ約150箱分である。縄文時代後期以降の各時期の遺物が出土している。量的には弥生時代後期～古墳時代初頭および古墳時代中期の遺物が多数を占め、平安時代後期～鎌倉時代がこれに次ぐ。これらは今回の調査で確認できた遺構の時期と対応する。前節で述べたとおり各時期の遺構検出面は基本的に同一であり、新しい時期の遺構に古い時期の遺物も多く混入する状態となっている。

今回報告を行う遺物は、概ね全体像の分かる遺物や、出土遺構・層序の時期や性格をよく表すと考えられる遺物、その他特徴的な遺物を中心に抽出して図化を行ったものである。以下に各遺構、層序ごとに出土遺物について述べる。遺構の順序は基本的に第3節遺構の記載順に倣う。

平安時代後期～鎌倉時代の遺構（図51・52）

平安時代後期～鎌倉時代の遺構には耕作溝と落ち込み、ピットがある。これらの遺構からの出土遺物は12世紀後半のものが多くを占め、一部にその前後の時期を含む。また、下層遺構に由来する古墳時代以前の遺物も含まれる。遺構別では耕作溝からの出土量が最も多いが、遺物の状態はごく一部を除いて細片が主である。耕作溝以外では1012SXがある。1012SXの出土遺物は完形の瓦器碗をはじめ、耕作溝出土遺物より状態が良好な破片が多い。その他の遺構は、図化が難しい細片が少量あるのみである。

耕作溝出土遺物（図51-1～36）

1～7は土師器皿である。1は口径9.1cm、器高1.5cmである。全体をナデ調整で仕上げる。外面底部には指頭圧痕が残る。2は口径9.8cm、器高1.5cmである。全体をナデ調整で仕上げる。3は口径9.1cm、器高1.4cmである。全体をナデ調整で仕上げるが、外面下半は仕上げが粗く、細かな粘土粒が複数付着する。4は口径9.8cm、器高1.5cmである。外面は口縁部と底部との境にナデ調整の強弱による段が存在する。5は復元口径10.7cm、器高1.3cmである。口縁部は直線的に低く開く形状である。6は復元口径13.1cm、器高1.8cmである。口縁部は内外面の横ナデにより小さな段が見られる。7は復元口径14.4cm、器高2.5cmである。口縁部は上方に立ち上がる形状である。底部は平底である。内外面とも下半部は指頭圧痕が存在する。

8～14は瓦器碗である。8は復元口径13.9cm、器高5.8cmである。表面が磨減しており細かなミガキは確認できないが、見込みには輪状の暗文が確認できる。9は復元口径14.3cm、器高5.7cmである。圏線ミガキは外面は不明瞭であるが内面には密に施す。見込みには連結輪状暗文を施す。8・9は今回出土した瓦器碗の中では古相を示す。10は口径13.6cm、器高4.8cmである。見込みには圏線の暗文を施す。11は口径14.5cm、口径5.1cmの準完形品である。内面の大部分と外面の一部

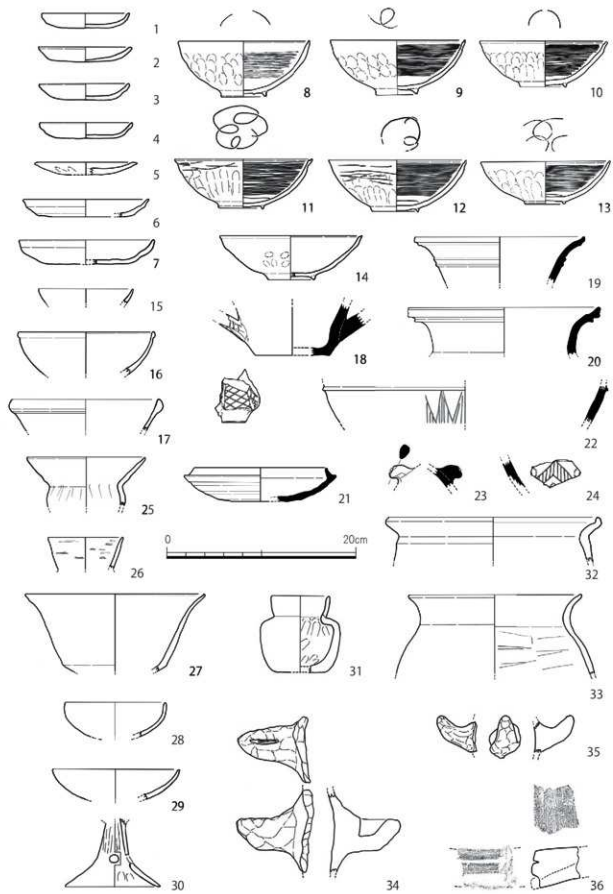


图 51 耕作溝出土遺物 (S = 1/4)

に漆が薄く付着しており、漆碗として使用されていたようである。見込みには一筆書きの輪状暗文を施す。12は口径14.5cm、器高5.4cmの完形品である。内面には回線ミガキを密に、外面は上半部に粗くヘラミガキを施す。見込みには連結輪状暗文を施す。13は復元口径13.6cm、器高4.4cmである。高台は断面形が台形を呈する。14は復元口径14.9cm、器高4.6cmである。全体に外に広がる形状である。磨滅により表面の調整は不明である。

15は白磁の塊もしくは皿の小片である。16は灰釉陶器の塊である。黄灰色の釉が施されている。外面下端は無釉であることがわずかに確認できる。時期は11世紀後半であると考えられる。17は白磁碗である。口縁部の小片である。口縁部の釉葉は部分的に厚く溜まりが存在する。外面は遺存範囲内に無釉部分が見られる。

18～24は須恵器である。18はカップ形の平底部片で、把手の付け根が存在する。把手はひとつのみだが、外面と断面とでそれぞれ図化している。内外面に自然釉が薄く付着する。把手は板状の粘土を貼り付けており、両側面と外面に格子目状の刻み目を施す。19は壺の口縁部である。内外面とも強めの回転ナデ調整を施す。内面には降着灰が見られる。20は裏の口縁部である。口縁上半部が外反する形状である。21は坏身である。復元口径13.9cmである。時期は6世紀後半であると考えられ、調査地周辺では出土例が少ない時期である。22は器台の坏部である。内部を斜線で満たす山形文を施す。23は器種不明の小突起である。瓶類肩部の把手である可能性が考えられる。24は器台の脚部上半である。山形文が縦に二つ以上並び、その両側面に円形スタンプ文を施す。

25～35は土師器である。25は小形丸底壺で、口縁は大きく直線的に開く。26は小型壺の口縁部である。内外面に細かな横方向のミガキを施す。27は大型高坏の坏部である。下半部は直線的に開き、上半部はさらに外側へ外反気味に開く。口縁端部はごく小さく摘み上げる。28は塊あるいは塊形高坏である。29は高坏の坏部である。磨滅により内外面とも調整は不明であるが全体に滑らかな仕上がりにある。内面は下半が炭化している。30は高坏の脚部である。円形スカシを一もしくは二方向に穿つ。31は平底の小型壺である。体部が厚手の作りで重量感がある。32は裏の口縁部である。外面には煤が付着する。33は広口壺である。内面は口縁部から頸部にかけて広くナデ調整を施し、体部のケズリとの境は不明瞭である。34・35は把手である。34は鍋の把手であると考えられる。ほぼ横方向に伸びる把手で、上面はほぼ水平になる。35は大きく反り上がる小型の把手である。

36は重弧文の軒平瓦である。上面にわずかに布目痕が確認できる。

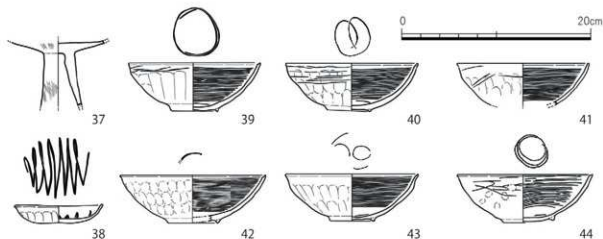


図52 1012SX出土遺物 (S = 1/4)

10125X 出土遺物 (図 52-37~44)

37は土師器高環である。外面には細かなハケ調整を施す。環部底面は平坦面が広い形状である。

38は瓦器皿である。口径9.3cm、器高1.3cmである。見込みにはジグザグ状暗文を施す。

39~44は瓦器碗である。39は口径13.8cm、器高5.1cmの準完形品である。内面の圏線ミガキは密だが個々の線はやや太い。見込みには同心円状暗文を施す。40は口径14.0cm、器高4.9cmの準完形品である。内面の圏線ミガキは強めに施し、線も太い。見込みには輪状暗文を施す。41は復元口径13.9cmである。42は復元口径15.2cm、器高5.1cmであるが、歪みが見られ口径はこれより小さい可能性がある。内面に圏線ミガキを細かく施す。見込みには暗文を施すが全体像は不明である。43は口径14.0cm、口径4.9cmである。外面の指頭圧痕は上下二段に分かれるように存在する。見込みには連結輪状暗文を施す。44は復元口径14.2cm、器高5.0cmである。内面の圏線ミガキは他より粗である。見込みには同心円状暗文を施し、圏線ミガキとの間には約1.5cmの空白地帯が存在する。高台は他より低く、底部中央が接地する。

古墳時代中期の遺構 (図 53~75)

古墳時代中期の遺構には河道、土坑、落ち込み、ピットがある。土坑からの出土遺物が中心で、一括性が高い資料が多いと言える。古墳時代中期でも後半の遺物が多数を占めるが、少量ながら中期前半に遡る可能性がある遺物も存在する。

1013NR 最上層出土遺物 (図 53-45)

45は須恵器坏身である。口径13.0cm、器高4.5cmの完形品である。外面底部中央に×字のヘラ記号を刻む。古墳時代後期に入る6世紀前半の土器であると考えられるが、便宜上、ここで報告する。調査区壁面の河道1013NR最上層から出土した土器であり、調査区北東隅の地点において、この時期まで河道が次第に埋没しつつも存在していたことを示す。

10035K 出土遺物 (図 54-46~50)

46~48は縄文土器深鉢の口縁部で、時期は縄文時代後期後半~末であると考えられる。46は口縁端部を上方向に揃み上げる。47は外側に開く形状で、外面に二条の凹線が巡る。48は直線的に立ち上がる形状である。内面の口縁部下に凹線が巡る。

49は弥生土器甕の口縁部である。表面の磨滅により調整は不明である。

50は韓式系土器平底鉢の底部である。外面には縦方向のミガキを施す。小片のため全体像は不明であるが、底部中央は接地しない可能性がある。

10045K (新) 出土遺物 (図 55-51~63)

51~56は須恵器である。51は蓋環の蓋である。口

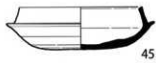


図 53 1013NR 最上層出土遺物 (S = 1/4)



図54 1003SK出土遺物 (S = 1/4)

径13.2cm、器高4.3cmである。頂部は平坦面が広い。52は高環の蓋である。頂部のつまみが失われている。復元口径11.6cmとやや小型である。53は無蓋高環の坏部である。内面中央部には自然釉が厚く付着している。外面はヘラケズリが丁寧で非常に平滑な仕上がりである。54は有蓋高環の坏部である。55は大型高環の坏部であると考えられる。内外面とも淡緑色の自然釉が付着しており、外面は特に厚い。外面下半に波状文を施す。56は甕の体部である。外面に縦方向のタタキを施し、その上に横方向の凹線が約2.5cm間隔で平行して巡る。

57～59は製塩土器である。57は全体像が復元可能な資料である。口径5.0cm、器高8.0cmで、口縁部がわずかに窄まる筒形である。平底気味で自立する。外面はタタキの痕がわずかに残るが全体に平滑に仕上げている。58は下膨れの形状で、調整は57と同様である。59は平底の底部である。

60は土師器高環の坏部である。坏底部まで貫通する差し込み式の脚部が失われている。内外面ともハケ調整とケズリを施し、いずれも粗い。61は土師器甕である。外面肩部以下に薄く煤が付着する。

62・63は韓式系土器鍋である。62は把手は先端が失われている。胎土には1～2mm大の小礫が多

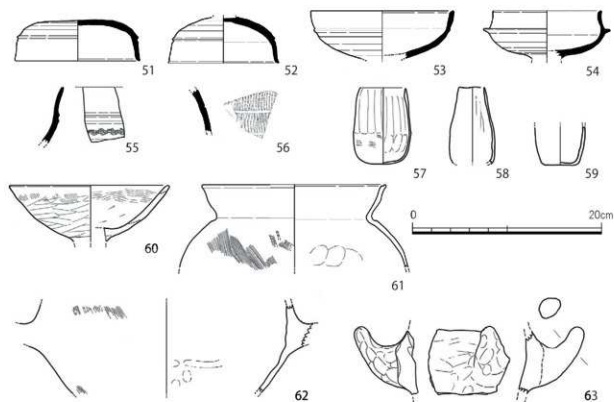


図55 1004SK出土遺物 (S = 1/4)

く含まれる。63は中実の大きく反り上がる把手である。把手と体部の接合痕が断面確認できる。表面の磨滅により細かな調整は不明である。

1004SK (古) 出土遺物 (図56-64~66)

64は須恵器高環の身である。蓋環の身である可能性もあるが、体部下半が尖り気味であることから高環である可能性が高いと考えられる。65は須恵器把手である。下端には体部との剥離面が存在する。体部との間には直径約1.0cm大の空隙があったと考えられる。

66は土師器甔の底部である。直径約2.5cm大の蒸気孔を多数穿っていたと考えられる。底部は平底であるが、稜は丸みを帯びる形状である。外面はハケ状工具で摺り上げている。

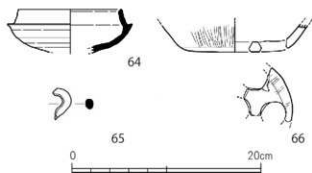


図56 1004SK (古) 出土遺物 (S = 1/4)

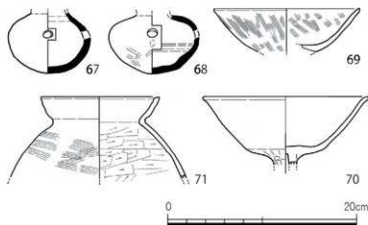


図57 1006SK (古) 出土遺物 (S = 1/4)

1006SK (古) 出土遺物 (図57-67~71)

67・68は須恵器甔である。どちらも口縁部を綺麗に打ち欠いた状態の体部である。67は外面上半部および内面底部に自然軸が付着する。68は外面下半部に強めのナデ調整で仕上げるが、全体に凹凸が残る。

69・70は土師器高環の環部である。69は内外面ともにハケ調整で仕上げる。外面のハケ調整は底面中央から放射状に施す。70は内面環底面を中心に炭化物が付着する。71は土師器甔である。外面体部にはやや粗いハケ調整を施し、肩部には煤が付着する。

1007SK 出土遺物 (図58-72~76)

72~74は須恵器である。72は甔の口縁部である。頸部上半には鈍い稜が巡る。73は壺あるいは甔の口縁部であると考えられる。焼成がやや悪く全体に瓦質状の仕上がりである。外面にはナデ調整の後、波状文を施す。74は大型の甔である。口縁部は垂直に立ち上がる。外面体部は細かなタタキの後にナデ調整を施しており、タタキ痕は目立たない。口縁部および内面体部はナデ調整で平滑に仕上げる。外面の頸部には焼成時に生じたひび割れが存在する。

75は製塩土器である。截頭卵形の口縁部である。1007SKからはこの他にも製塩土器の細片が出土しているが図化できるものは無い。

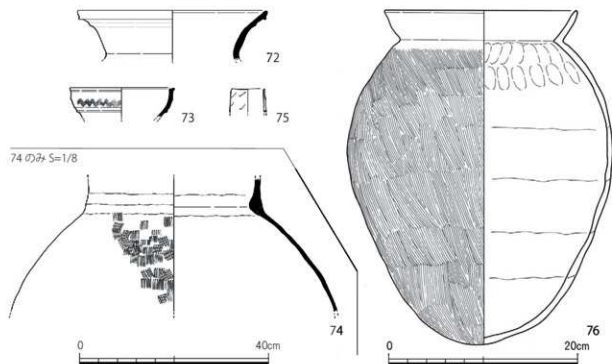


図 58 1007SK 出土遺物 (S = 1/4・1/8)

76 は土師器長胴甕である。破片状態で出土しているが、ほぼ全体が遺存する。内外面の調整は全体に丁寧に施されている。外面肩部以下の範囲に煤が部分的に薄く付着する。

1010SK 出土遺物 (図 59-77)

77 は土師器甕である。内外面とも平滑に仕上げられている。

1011SK 出土遺物 (図 60-78~93)

78~80 は須恵器蓋環の身である。78 は口径 9.4cm、器高 4.4cm である。受部外縁に 0.5cm 大前後の細かな打ち欠きが複数存在する。79 は外面底部中央に川の字状のへら記号を施す。80 は口径 10.8cm、器高 6.0cm である。体部上半が外に張り出す形状である。底部中央はわずかに平底である。

81~85 は製塩土器である。いずれも裁頭卵形のうち筒形に近い形状の一群である。ナデ調整で仕上げる。83 は口縁先端への粘土の継ぎ足しが断面で確認できる。84 は内面にはしぼり痕が残る。

86~93 は土師器である。86 は高坏である。壙形高坏で、脚部には円形スカシを二方向に穿つ。87 は壺の体部である。やや張り出しが強い球形である。88~90 は甕である。88 は口縁端部を外側

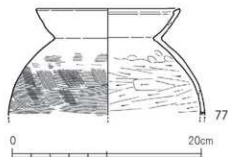


図 59 1010SK 出土遺物 (S = 1/4)

に小さく折り返す。表面の磨滅により調整は不明である。89 は口縁端部に面をもつが稜は鈍い。90 は内外面ともに被熱痕がある。91 は甕である。底部および把手は遺存していない。下端部で楕円形と考えられる蒸気孔の一部が確認できる。92 は甕あるいは鍋の把手である。切り込みは下部まで貫通する。切り込みの位置は把手の中軸からずれている。なお、91 とは別個体である。93 は鍋の把手である。把手は全体に指

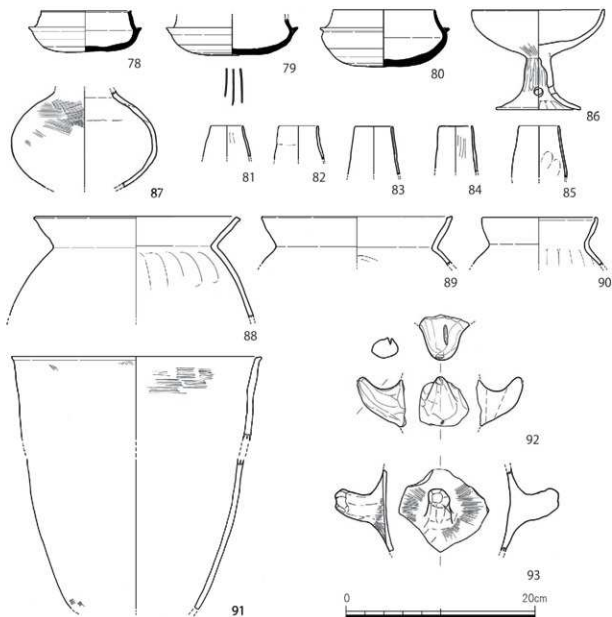


図 60 1011SK 出土遺物 (S = 1/4)

頭圧痕が目立つ。

10185K 出土遺物 (図 61-94~106)

94は須恵器高環の脚部である。環部との接合面で剥離している。下半部に回転ナデにより細い稜を作り出している。

95~105は土師器である。95~97は高環の環部である。95は塊形高環で、外面には放射状のハケ調整を施す。96は大型高環である。外面下半部にはにぶい凹線が巡る。97は直線的に開く大型高環である。98~101は高環の脚部である。98は上端部に環部との接合痕が存在する。99は円形スカシを三方向に穿つ。上面には環部底面が遺存する。100はラッパ状に開く形状である。101は外面に面取り状の痕が残る。102・103は直口壺である。どちらも全体に被熱しており表面は劣化している。104は鍋である。割れた状態で出土しているが、ほぼ全体が遺存している。底面は平底状で座りが良いが、中央は上方に窪む。外面には格子目タタキを施す。外面中段には横方向の凹線を巡ら

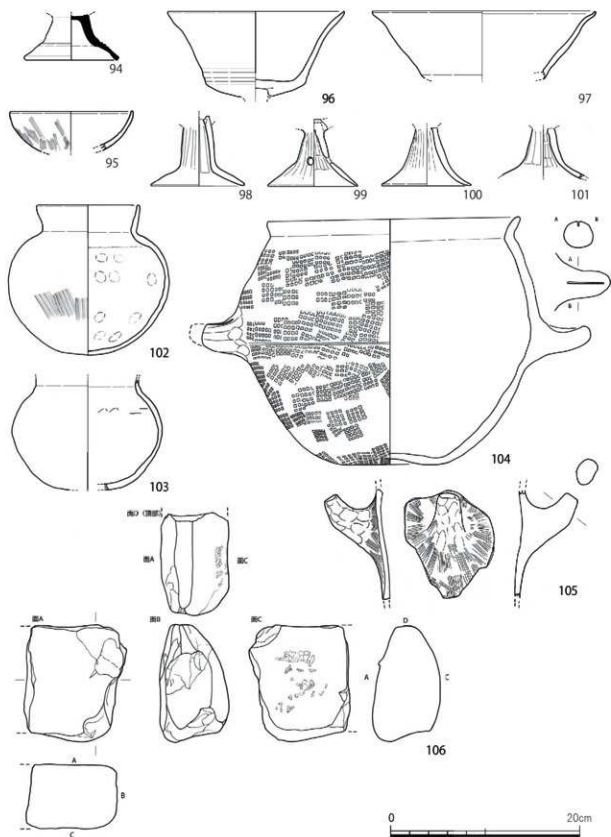


図 61 1018SK 出土遺物 (S = 1/4)

せる。内面は全体にナデ調整を施す。把手には上面から浅く長い切り込みを施す。105は甕の把手である。把手の先端には直径約1cmの面を作り出す。

106は擦石・叩石である。重量1442gである。やや扁平な六面体である。うち一面は割れ面であ

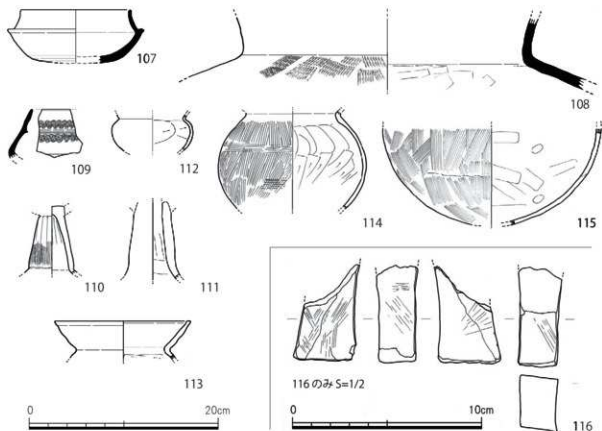


図62 1019SK出土遺物 (S = 1/4・1/2)

るが、この状態で使用を続けた可能性も高い。

1019SK 出土遺物 (図 62-107~116)

107~109は須恵器である。107は蓋坏の身である。底面がやや広く、ヘラケズリの範囲は狭い。108は大甕の頸部である。内面体部はナデ調整で仕上げるが、調整単位の窪みが部分的に残る。109は壺あるいは甕の口縁部である。外面中段に鋭い稜を作り、その上下に波状文を施す。

110~115は土師器である。110・111は高坏の脚柱部である。110は外面に縦方向のハケ調整とミガキを施す。111は上端部に坏部の痕跡が存在する。112は小形丸底壺の体部である。被熱により全体に器面が荒れている。113は甕の口縁部である。口縁端部を小さく肥厚させる。114は甕の体部である。外面肩部以下の全体に煤が付着している。115は甕の体部下半である。外面体部中段に煤が付着する。

116は砥石である。棒状砥石の端部であると考えられる。破面以外の各面に擦痕がある。重量40.6gである。

1020SK 出土遺物 (図 63-117~142)

117・118は須恵器甕である。117は外面に格子タタキとナデ調整、内面にナデ調整を施す。全体に薄手の作りである。118は同一個体と考えられる頸部と底部付近の破片を図化している。内外面ともナデ調整を施す。

119は瓦質土器の甕である。同一個体であるが接合しない2点の体部片を合成図化している。外

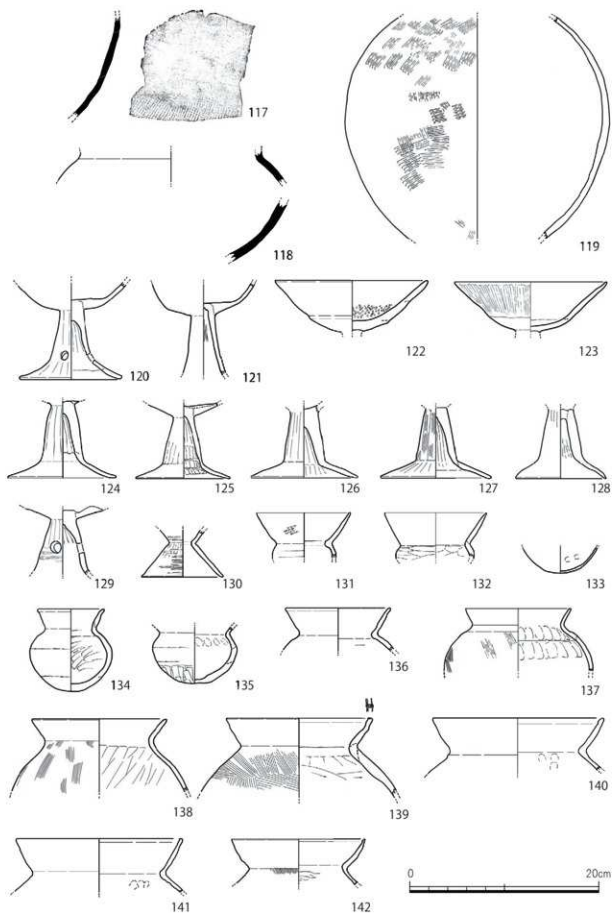


图 63 1020SK 出土遗物 (S = 1/4)

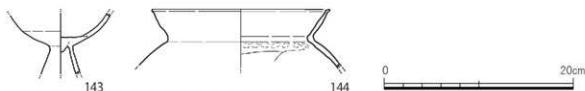


図 64 1021SK 出土遺物 (S = 1/4)

面には平行タタキとナデ調整を施す。内面はナデ調整で非常に平滑に仕上げる。

120～142 は土師器である。

120～129 は高環である。120・121 は埴形高環であると考えられる。いずれも環部と脚部の接合状況が断面確認できる。120 は脚部には円形スカシを三方向に穿つ。122・123 は直線的に開く環部である。122 は内面環部下半に 0.1～0.2cm 大の円形敲打痕が多数存在する。123 は底面に脚部との剝離面がある。外面にはヘラナデを施す。124～129 は脚部である。124 は内面脚柱部にしぼり痕が明瞭に残る。125 は環部との接合状況が断面確認できる。内面には細かな指頭圧痕が存在する。126 は脚柱部と裾部の境が内外面ともに明瞭である。127 は外面に縦方向のハケ調整を施す。128 は環部との接合時に充填した粘土が上端部に残る。129 は脚柱部の中段に円形スカシを三方向に穿つ。

130 は小形器台の脚部である。外面には横方向のミガキを施す。131・132 は小形丸底壺である。131 は全体に丸みを帯びた形状である。口縁部に被熱痕がある。132 は扁球状の体部をもつと考えられる。体部にはケズリを施す。133 は製塩土器であると考えられる。埴形の底部である。134・135 は小型壺である。134 は全体に器壁が厚く、重量感がある。135 は外面全体に黒斑が広がる。

136～142 は甕の口縁部である。136 はナデ調整による凹凸が目立つ。137 は肩部が大きく張り出す形状で、口縁部は短い。138 は外面体部のハケ調整と内面体部のケズリをそれぞれ縦方向に施す。139 は口縁部が二重口縁状である。口縁端部に文様状の窪みが存在するが、遺存範囲が少ないため全体が同様であるかは不明である。全体に器壁が厚い。140 は口縁端部を内側に肥厚させる。141 は口縁端部に小さな面を作る。142 は外面に煤が付着する。

1021SK 出土遺物 (図 64-143・144)

143 は土師器高環である。埴形高環であると考えられる。環部底面から充填した粘土が確認できる。144 は土師器甕である。外面肩部以下全体と口縁部の一部に煤が付着する。

1023SK 出土遺物 (図 65-145～151)

145 は須恵器器台の環部下半である。外面に波状文を施す。内面には降着灰が付着する。146 は須恵器壺の口縁部である。外面には二段の稜を作り出す。内面には降着灰と自然釉が付着する。

147～151 は土師器である。1023SK から出土した土師器はいずれも表面の磨滅が激しい。147 は大型高環の環部である。表面が磨滅しており調整は不明である。148 は高環の脚部である。外面脚柱部に面取りを施す。149 は甕である。外面体部のハケ調整は単位がやや大きい。150 は大甕である。細かな調整は不明であるが、体部外面にわずかにハケ調整が確認できる。151 は壺の口縁部である。

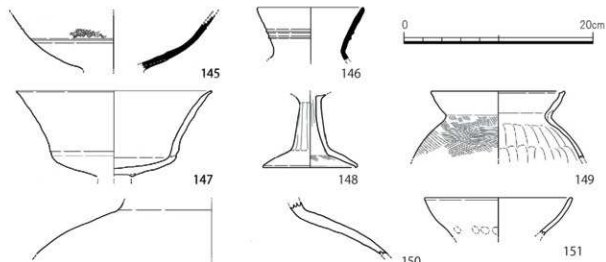


図65 1023SK 出土遺物 (S = 1/4)

1028SK 出土遺物 (図66-152~154)

152は須恵器甕である。底面以外の全体に自然軸が付着している。外面体部はタタキの後、ナデ調整で仕上げている。内面体部中段に残る当て具痕は細かくて浅い。153・154は土師器甕の下半部である。153は外面全体に煤が付着する。内面底部付近には少量の炭化米が付着する。154

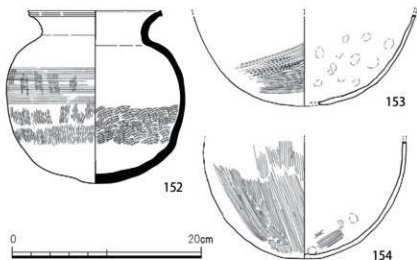


図66 1028SK 出土遺物 (S = 1/4)

は外面に煤が付着するが底部付近はこれを欠く。内面底部にはごく少量の炭化米が付着する。

1030SK 出土遺物 (図67・68-155~190)

155~162は須恵器である。155は蓋環の蓋である。口径13.2cm、器高4.8cmである。156は蓋環あるいは高環の蓋である。頂部のヘラケズリは肩部まで広い範囲に施す。157は蓋環の身である。口径11.2cm、器高4.6cmである。底面中央に直線のヘラ記号が存在する。158は高環である。脚部に方形のスカシを穿つ。内面環部底面に自然軸が付着する。159は高環の環部である。外面に鋭い稜と沈線を巡らせ、波状文を施す。160は器台の口縁部である。外面に鎖状文を施した後、その上から円形スタンプ文を施す。161は高環の脚部である。全体に回転ナデ調整を施す。162は壺の口縁部である。外面に三段の波状文を施す。それぞれの波状文は位置や間隔に乱れが大きい。

163~190は土師器である。

163~177は高環である。163~173は完形およびそれに準じる状態である。163は外面脚柱部

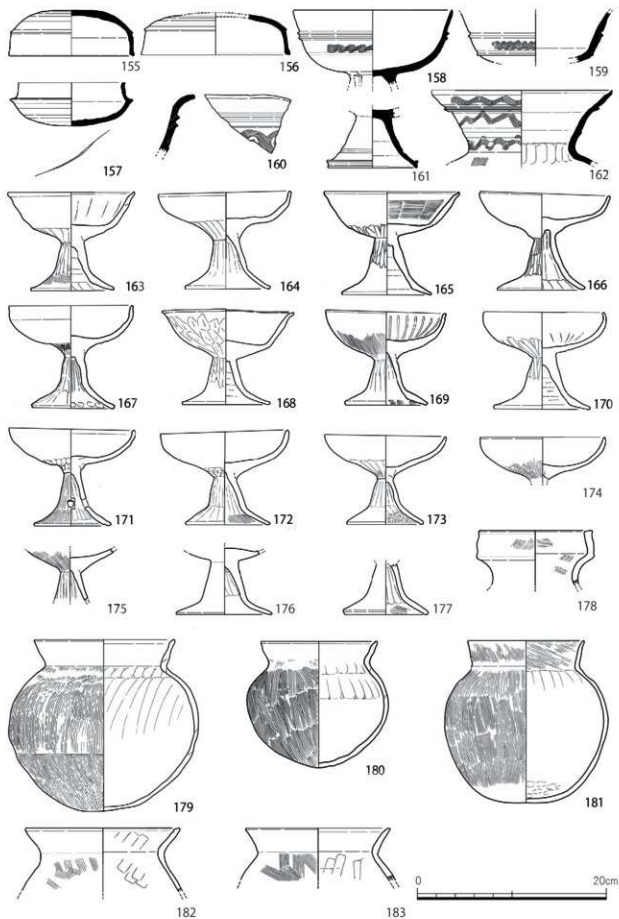


图 67 1030SK 出土遗物① (S = 1/4)

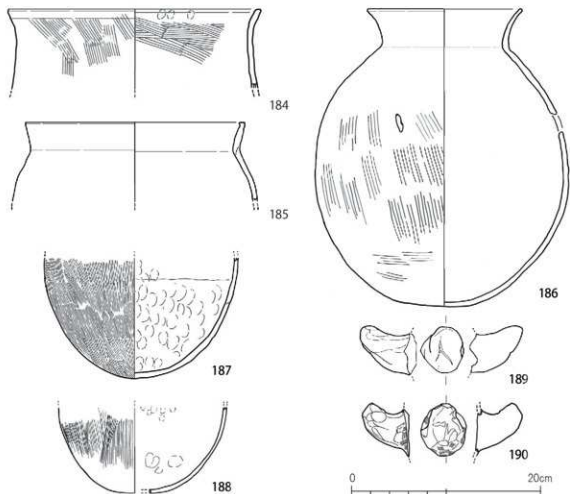


図 68 1030SK 出土遺物② (S = 1/4)

にヘラミガキを面取り状に施す。外面環部の表面には細かなひび割れが多い。164 は裾部と環部にそれぞれ黒斑が存在する。165 は外面環部下半と脚柱部上半に粗いケズリを施す。内面環部はハケナデの痕跡が明瞭に残る。166 は内面環部底面付近に直径 0.2cm 大の円形敲打痕が複数存在する。167 は全体をナデ調整で仕上げる。外面頸部にはハケ調整を施す。168 は外面にケズリを施す。169 は環部は外面にハケ調整を、内面にミガキを、それぞれ放射状に施す。170 は 168 と同様の範囲にケズリを施すが仕上げは丁寧である。環部底面中央に脚部との接合により生じたひび割れが存在する。171 は外面脚部にハケ調整を施す。内面裾部には布目痕が存在する。172 は外面にナデ調整を施す。内面裾部にはハケ調整を放射状に施す。173 は 172 と同様の調整を施す。胎土には 0.2cm 大のやや大きめの礫が目立つ。174 は壙形の環部である。外面下半にはハケ調整を放射状に施す。内面接合部には下からの棒状刺突痕が確認できる。175 は頸部である。174 と同様の調整を施す。176 は外面にナデ調整を施す。177 は外面にナデ調整、内面裾部にハケ調整を施す。

178 は壺の口縁部である。二重口縁で、上段はやや内傾する。179～183 は甕である。179・180 は完形の甕である。どちらも表面は全体に磨滅しているが、外面体部全体にハケ調整を施すことが確認できる。181 は口縁部が直立気味に立ち上がる。口縁部はハケ調整の後、ナデ調整で仕上げているがハケの痕が多く残る。182・183 は口縁部である。182 はやや細頸である。183 は頸部の稜が内外面ともやや鈍い。

184 は鉢の口縁部である。内外面に粗いハケ調整を施す。185 は鉢あるいは鍋の口縁部である。

口縁部はナデ調整を施す。体部は表面の磨滅により調整は不明である。186 はほぼ完形の壺である。表面は全体に磨滅している。外面体部にはハケ調整を施す。体部中段に長さ 1.9cm、幅 0.6cm の細長い孔を内側から穿孔している。187 は甕の下半部である。体部中段にわずかに煤が付着する。188 は甕の底部である。平底気味で座りが良い。外面は底部中央以外に煤が付着する。

189・190 は中実の把手である。189 は把手下面に粘土の振れが確認できる。190 は体部との外面接続部にハケ調整が確認できる。

1016SX 出土遺物 (図 69—191・192)

191 は土師器高環の脚部である。脚部上端に環部まで貫通する直径 0.4cm の孔が存在する。192 は甕の底部片であると考えられる。内外面に同様のハケ調整を施す。

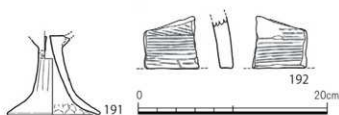


図 69 1016SX 出土遺物 (S = 1/4)

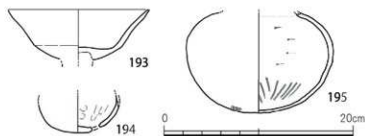


図 70 1017SX 出土遺物 (S = 1/4)

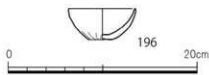


図 71 1033SX 出土遺物 (S = 1/4)

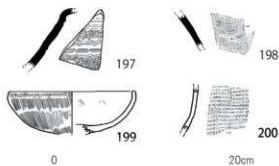


図 72 018SP 出土遺物 (S = 1/4)

1017SX 出土遺物 (図 70—193~195)

193 は土師器高環の環部である。調整は不明である。底面に環部の剥離痕が存在する。194 は小型壺の体部である。底面中央よりやや上の位置に直径 0.8cm の円形の穿孔を内外両側から施す。195 は壺の体部である。

1033SX 出土遺物 (図 71—196)

196 は土師質のミニチュア土器碗である。平底である。全体にナデ調整を施すが、器面には細かなひび割れが残る。

018SP 出土遺物 (図 72—197~200)

197 は須恵器器台の口縁部である。外面に波状文を施す。198 は須恵器甕の体部である。外面に格子タタキを施す。焼成が不良で瓦質状である。199 は土師器高環の環部である。外面にハケ調整を放射状に密に施す。200 は韓式系土器の甕あるいは鉢の体部である。外面に格子タタキを施す。

018SP からはこの他に、馬の歯がまとまって出土している (図版 60)。

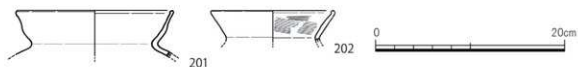


図73 161SP出土遺物 (S = 1/4)

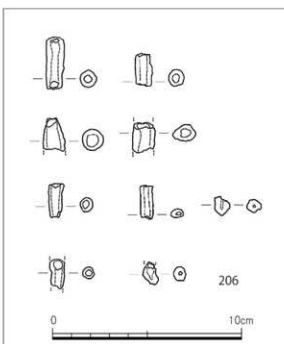
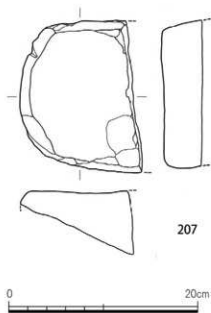
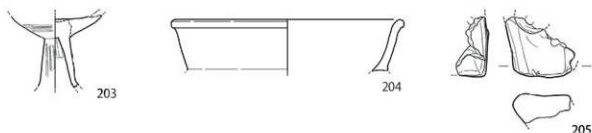


図74 SP一括出土遺物 (S = 1/4・1/2)

161SP 出土遺物 (図73-201・202)

201・202は土師器甕の口縁部である。202はナデ調整で仕上げる。内面にはハケ調整の痕跡がわずかに残る。

SP一括出土遺物 (図74-203~207)

203は土師器高環である。環部と脚部の接合状況が断面確認できる。204は壺の口縁部である。下端に剝離面が存在し、二重口縁の上段部分であると考えられる。205は不明土製品である。中央部がやや窪む平坦な面が三面存在する。

206は不明筒状製品である。棒状製品の鋳型であった可能性がある。内径0.4~1.2cmの筒状片が9点存在し、元はこれらが一本の筒状であったと考えられる。

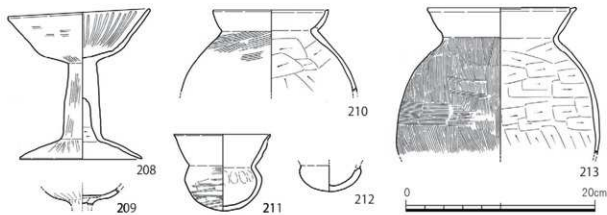


図 75 土器溜まり出土遺物 (S = 1/4)

207 は花崗岩の石皿である。図の下面は剖面であるが平坦であり、この状態で使用した可能性も高い。重量 1734 g である。

土器溜まり出土遺物 (図 75-208~213)

208~213 は土師器である。208 は細頸の高環である。外面と内面環部にミガキを施す。脚柱部上半は中実である。209 は高環の環部底面である。脚部との接合部分に下側からの刺突が二ヶ所に存在する。210 は甕である。体部中ほどが張り出す形状である。211 は完形の小形丸底壺である。外面体部に横方向の粗いミガキを施す。212 は小形丸底壺あるいは埴の体部である。口縁部が失われた塊状の形で使用していた可能性がある。213 は甕である。外面体部に細かなハケ調整を施す。内面体部のケズリは丁寧に施して平滑に仕上げている。

弥生時代後期~古墳時代前期の遺構 (図 76~89)

この時期の遺構には河道、溝、落ち込みがある。出土遺構別では河道 (1013NR) およびこれに接続する溝 (1001SD) からの出土遺物が大部分を占める。遺物の時期は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての各段階の遺物が存在し、庄内式から布留 1 式期の時期の量が最も多い。また、1013NR からは弥生時代中期以前の遺物も出土している。新堂遺跡周辺の地域においては古墳時代初頭前後の時期に、いわゆる弥生傾向・庄内傾向・布留傾向の土器 (主として甕) が混在する状態が長く続く傾向にあり、出土した小片のみでは詳細時期を明確にし得ない場合がある。そのため、弥生土器とする中に古墳時代遺物を含む可能性がある。

1013NR 上層出土遺物 (図 76-214~230)

214・215 は土師器高環である。214 は環部に細かなミガキを施す。環部下半には鈍い段が存在する。脚部には円形スカシを三方向に施す。215 は磨滅により調整が確認できないが、器面は全体に平滑に仕上げられている。216 は土師器小形丸底壺である。やや扁平な形状である。217 は壺の上半部である。底部の形状は不明である。内面頸部には折り返した余剰粘土がそのまま残る。218 は小形壺の体部である。内外面とも平滑に仕上げている。219 は弥生土器広口壺の口縁部である。

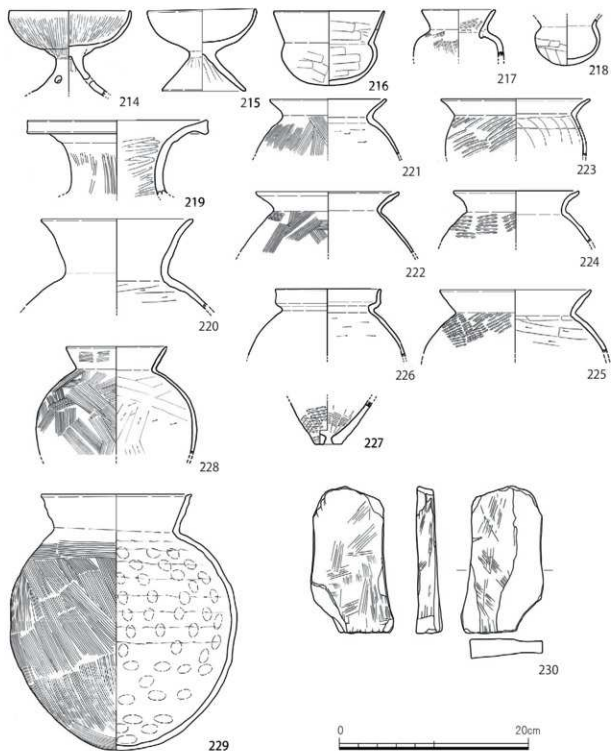


図76 1013NR上層出土遺物 (S = 1/4)

ミガキを外面には縦方向に、内面には横方向に施す。220は土師器壺である。内面体部にケズリを施す。221・222は土師器甕である。221は外面に細かなハケ調整を施す。222は口縁端部を上方にごく小さく摘み上げる。223～225は弥生土器あるいは弥生傾向の甕である。223は外面体部にタタキを弱く施す。224は外反する口縁部をもつ。タタキは水平に近い右肩上がりで施す。225は外面に細かな右肩上がりのタタキを施す。内面はケズリを施す。226は山陰系の甕である。表面の磨滅により調整は不明である。胎土は在地の土器と同様である。227は甕あるいは鉢の底部である。底部中

尖に穿孔を施す。228 は土師器甕である。胎土には 0.1～0.3cm 大の礫を多く含む。229 は土師器甕である。外面体部に細かなハケ調整を施す。口縁部および内面体部にナデ調整を施す。外面の底部中央を除いた体部下半に煤が付着する。

230 は砥石である。板状で全体に使用痕がある。重量 421 g である。

1013NR 下層出土遺物 (図 77-231～248)

231 は弥生土器器台である。外面および内面上部にヘラミガキを施す。柱部には円形スカシを四方向に穿つ。232 は土師器の器台である。ミニチュア製品である可能性もある。円形孔を四方向、二段に穿つ。孔の配置間隔は不均等である。233 は土師器の小形器台の脚部である。外面にはミガキを施す。円形スカシを三方向に穿つ。234 は小形壺である。外面体部に縦方向のハケ調整を施す。体部の表面を直径 1～2cm 大の円形に薄く削り取った痕が三ヶ所存在する。

235～241 は甕である。235 は磨滅しているが外面にわずかにハケ痕が確認できる。236 は口縁部が反転する形状である。外面には黒斑が存在する。237 は口縁部に粘土の継ぎ足し痕が残る。内外面とも頸部の稜は鋭い。238 は台付甕である。台部も含めて全体に厚手の作りである。全体にナデ調整を施すが、部分的に指頭圧痕や工具痕が残る。239 は鉢である可能性がある。外面全体に煤が薄く付着する。240 は上半部が球形に近い形状の体部である。外面に右肩上がりのタタキを整然と施す。241 は大型の甕である。外面にハケ調整を施す。内面は上半部にナデ調整、下半部にケズリを施す。

242 は細頸の甕あるいは壺である。外面にハケ調整を長い単位で施す。内面は全体にケズリを施す。243 は丸底の甕あるいは壺の底部である。全体に厚手である。内外面とも表面を平滑に仕上げている。244 は弥生土器壺の平底の底部である。外面にはミガキを施す。245～248 は甕あるいは鉢の底部である。245 は底部中央が円形に窪む。内面はハケ状工具によるケズリを施す。246 は甕の下半部あるいは鉢である。底部はやや細く高い形状である。247 は弥生土器である。内面は全体が体部からの剥離面である。248 は有孔鉢であると考えられる。内面に黒斑が存在する。底部の孔は両側から円形に削り出して穿孔している。

1013NR しがらみ 1 出土遺物 (図 78・79-249～280)

249～253 は小形壺である。249 は内外面の体部にケズリを丁寧に施して平滑に仕上げる。250 は外面体部に左肩上がりのタタキを施す。外面下半部の広い範囲に表面粘土の剥落が存在する。251 は球形の体部に短い口縁部をもつ。252 は底部が尖底気味である。内外面とも上半部にナデ調整を施す。外面下半部は磨滅により調整が不明である。253 は外面下半部に底部中央から掻き上げる粗いケズリを施す。

254 は弥生土器甕の底部である。外面は底部付近までタタキを密に施す。255 は土師器高環の環部である。内外面に幅広でやや粗いミガキを施す。表面に赤色顔料が付着する。256 は弥生土器高環の環部である。全体にミガキを施す。底部には脚部との接合面が残る。257 は高環である。全体をナデ調整で仕上げるが環部には粘土組織が残る。

258 は小形高環あるいは器台の脚部である。円形スカシを四方向に穿つ。259～265 は高環の脚部である。259 は外面に縦方向のミガキを施す。260 は高さに比して径が小さい脚部である。円形ス

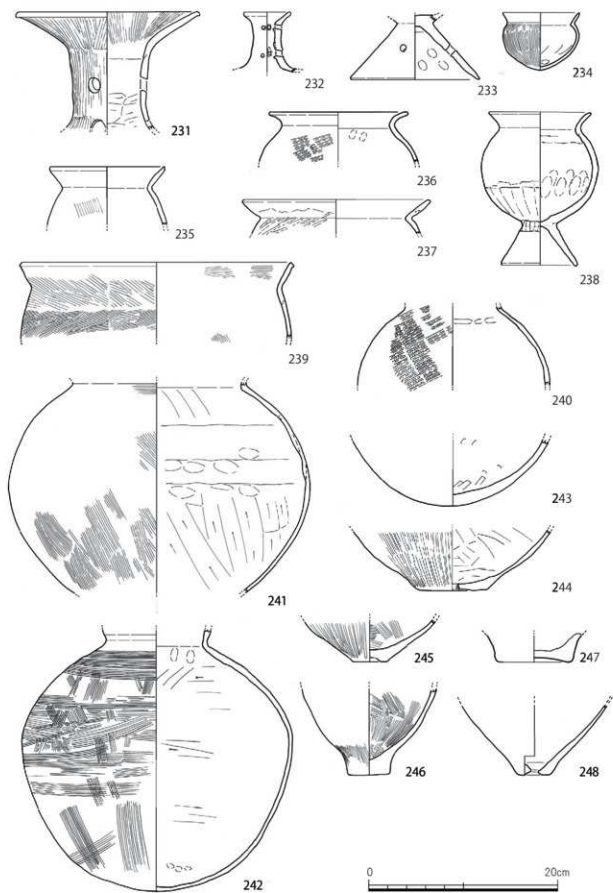


图 77 1013NR 下層出土遺物 (S = 1/4)

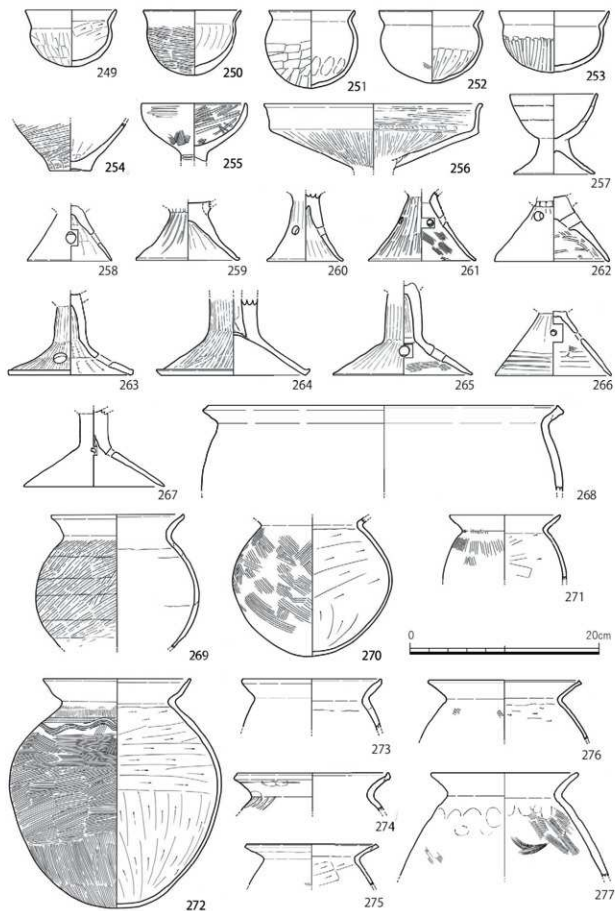


图 78 1013NR しがらみ 1 出土遺物① (S = 1/4)

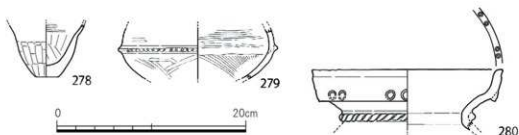


図 79 1013NR しがらみ 1 出土遺物② (S = 1/4)

カシを三方向に穿つ。261 は環部底面に円形孔が存在する。円形スカシを四方向に穿つ。262 は環部直下の位置に円形スカシを三方向に穿つ。器壁が全体に厚い。263 は外面に縦方向のミガキを施す。裾部に円形スカシを三方向に穿つ。264 は脚柱部が中空であるが、その下端部を薄い粘土で塞いでいることが断面確認できる。外面にはミガキを施す。265 は表面が磨滅しているが全体に丁寧な仕上げであることが確認できる。裾部に円形スカシを四方向に穿つ。部分的に赤色顔料が付着する。266 は小型器台である。円形スカシを三方向に穿つ。環部との接合面には刻みを施す。267 は弥生土器高環である。脚柱部下端に円形スカシを三方向に穿つ。脚柱部上半部は中実である。

268 は弥生土器大甕の口縁部である。復元口径 37.6cm である。269 は甕である。体部は外面にタタキ、内面にナデ調整を施す。270 は甕の体部である。外面にハケ調整をやや粗く施す。外面中段以下に煤が薄く付着する。271 は外面体部に縦方向のハケ調整を施す。272 は土師器甕である。完形である。外面体部には全体にハケ調整を施す。肩部の波状のハケは全周する。外面の肩部以下に煤が付着し、内面底部付近には炭化物の痕跡が存在する。273～276 は甕の口縁部である。273 は内面口縁部に黒斑が存在する。274 は弥生土器である。口縁端部に面を作り出す。275 は口縁端部に細い凹線が巡る。276 は外面体部に細かいハケ調整を施す。色調は高環や器台によく見られるような明橙色を呈する。277 は壺である。内面体部にハケ調整を施し、工具先端で弧状に抉り取った痕も存在する。

278 はミニチュア土器の環である。底部は平底である。279 は手摺り形土器である。体部最大径部分に突帯を巡らせて刻みを施す。280 は弥生土器二重口縁壺である。上段口縁部下に貼り付けて垂下させた粘土は広い範囲で剥落している。口縁端部には竹管文を施す。内面は被熱して表面の一部は炭化している。

1013NR しがらみ 2・3 出土遺物 (図 80-281～302)

281・282 は弥生土器器台である。281 は口縁端部に三条の沈線を巡らせる。沈線には焼成前に生じた傷が複数存在する。282 は口縁端部に四条の沈線を巡らせ、その上から三個一組の円形浮文を貼り付ける。

283～288 は高環の脚部である。283 は脚柱部上半は中実である。スカシは円形であると考えられるが方向は不明である。284 は脚柱部が筒状で、環部から粘土を充填して蓋をしている。裾部には円形スカシを六方向に穿つ。285 は脚上端部を環部底面に挿入する作りである。円形スカシを三方向に穿つが、うち二つは穿孔後の内面調整により孔がやや塞がっている。286 は脚部中段に円形スカシを三方向に穿つ。287 は脚柱部に細かい凹線と竹管文を横方向に巡らせる。竹管文は上下二段が存在し、それぞれ径が異なる。裾部には小円形孔を 0.4～0.8cm 間隔で巡らせる。288 は環部底

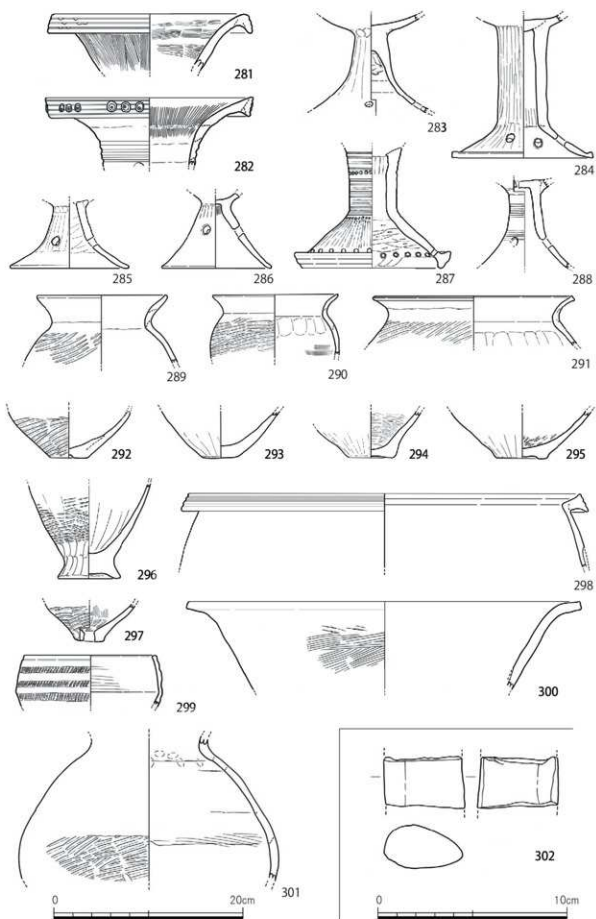


图 80 1013NR しがらみ2・3出土遺物 (S = 1/4・1/2)

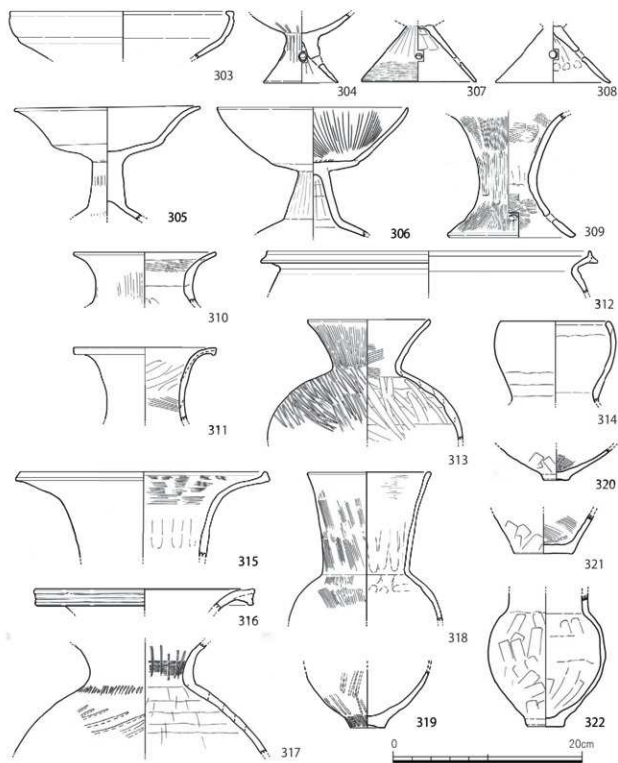


図81 1013NR一括出土遺物① (S = 1/4)

面に直径0.2cmの小孔を穿つ。位置は底部中心からやや外れる。脚部中段に円形スカシを三方向に穿つ。

289～296は甕である。289は内面口縁部および体部に丁寧なナデ調整を施す。外面体部のタタキは巾広である。290は内面体部下半にハケ状のケズリを施す。外面口縁部下半以下に煤が付着する。291はやや大型の口縁部である。外面には粘土紐痕が存在する。292は内面に黒斑が存在する。底部中央に指頭による窪みが存在する。293は内面に炭化物が付着する。外面底部の稜は丸みを帯びる。

294 は全体に歪みが大きい形状である。内面にはハケ調整を施す。295 は外面底部の中央が浅く広く窪む。内面にはへら状工具の痕跡が多く残る。296 は底部が裾広がりの形状である。底部中央部は広く窪む。体部の開きは狭い。

297 は有孔鉢の底部である。底部は狭く、やや丸みを帯びた平底である。

298 は大型鉢である。外側に折り返した口縁の端部には三条の凹線を巡らせる。外面には黒斑が存在する。299 は細頸壺の口縁部である。外面には刺突文を横方向に三列、密に施す。300 は広口壺の口縁部であると考えられる。表面の磨滅により細かな調整は不明であるが、外面にはハケ調整が確認できる。301 は細頸壺である。体部は下膨れの形状であると考えられる。外面体部下半にはタタキを施す。

302 は断面形が雫形の石製品である。石刀の一部である可能性がある。表面は一部を除いて滑らかである。

1013NR 一括出土遺物 (図 81・82-303~339)

303・304 は弥生土器高坏である。303 は口縁部外面に鈍い凹線を巡らせる。304 は外面にミガキを施す。脚部には円形スカシを四方向に穿つ。スカシの位置は高さが一定しない。

305・306 は土師器高坏である。305 は磨滅により調整は不明であるが、一部にミガキが確認できる。脚柱部は中実である。306 は内面坏部と坏底部に分かれたミガキを放射状に施す。307・308 は土師器小型器台である。307 は円形スカシを四方向に穿つ。スカシは内面側を広く削り取っている。308 は円形スカシを三方向あるいは二方向に穿つ。表面は磨滅しているが、内面にはケズリ痕と指頭圧痕が存在する。

309 は弥生土器器台である。内外面にハケ調整を施し、外面柱部にはミガキを施す。裾部に円形スカシを四方向に施す。310・311 は弥生土器壺の口縁部である。310 は表面は磨滅しているが、外面は縦方向、内面は横方向のミガキが確認できる。311 は口縁端部を小さく垂下させる。

312 は弥生土器大甕である。内外面ともナデ調整を施す。

313~322 は弥生土器壺である。313 は外面にミガキを施す。内面体部には指によるナデを施すが粘土紐痕も明瞭に残る。314 は細頸壺の口縁部である。全体に磨滅しているが外面には櫛描文と考えられる痕がわずかに残る。315 は広口壺の口縁部である。内面上半部に横方向のハケ調整を施す。316 は壺あるいは器台の口縁部である。外面に沈線を巡らせる。端部には粘土を垂下させており、表面の一部に紐痕が確認できる。317 は頸部裾にハケ状工具による文様を巡らせる。内面口縁部にはハケ状工具の静止痕が多く残る。内面体部にも工具の静止痕が存在し、粘土紐痕が明瞭に残る。318 は長頸壺である。外面は弱いハケ調整を施す。内面はナデ調整で仕上げが、頸部以下を中心にしぼり痕や指頭圧痕が残る。319 は甕あるいは壺の底部である。外面には平底の底部付近までミガキを施す。320 は弥生土器壺の底部である。底部は径が小さい平底である。内面底部中央にハケ状工具の静止痕が存在する。321 は弥生土器甕の底部である。外面にはケズリを施す。内面にはハケ調整を放射状に施す。322 は弥生土器長頸壺である。口縁部は直立気味に立ち上がる。内外面ともケズリの後にナデ調整を施す。表面には粘土の剥落が存在する。

323 は土師器甕である。体部は球形で、底部はごくわずかに尖り気味である。内面体部上半のケズリは横方向に施す。324~335 は土師器および弥生土器の甕である。324 は外面体部にタタキを

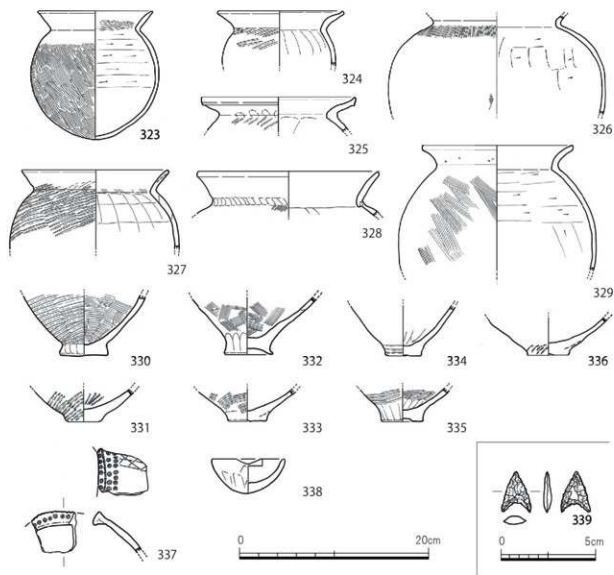


図 82 1013NR 一括出土遺物② (S = 1/4・1/2)

施した後、肩部以下の範囲にはナデ調整を施す。325は口縁端部下半に鈍い凹線を巡らせる。外面頸部には指頭圧痕が並ぶ。326は外面肩部に縦方向のハケ調整を施す。内面体部にはケズリを施す。327は外面のタタキが口縁部の一部にも残る。内面はナデ調整で仕上げる。328は外面頸部の粘土継ぎ足し部分に指頭圧痕が並ぶ。329は口縁部が外反する形状である。各部のハケ調整、ナデ調整、ケズリはいずれもやや強めに施されている。330は壺の底部である。底部は平底であるが中心からズレた位置に直径1.8cm大の浅い窪みが存在し、やや座りが悪い。内面には工具の静止痕が明瞭なハケ調整を施す。底部中央にわずかに炭化物が付着する。331は体部が大きく開く形状である。高さが低く稜が鈍い平底である。332は底部を高台状に作り出す。外面には被熱痕が存在する。333は低い稜は明瞭な平底である。底面は粘土のひび割れが目立つ。334は外面にタタキの後、ナデ調整を施しており、底部付近にわずかにタタキ痕が残る。335は平底の底部中央が浅く窪む。窪みの平面形は不整形である。内面底部中央には整然と施されたハケ状工具の静止痕と指頭圧痕が存在する。

336は土師器壺の底部である。平底で中央部がわずかに窪む。内外面ともにナデ調整を施す。

337は手焙り形土器である。天井部前面の破片である。覆部には二列の竹管文と斜格子状の細い

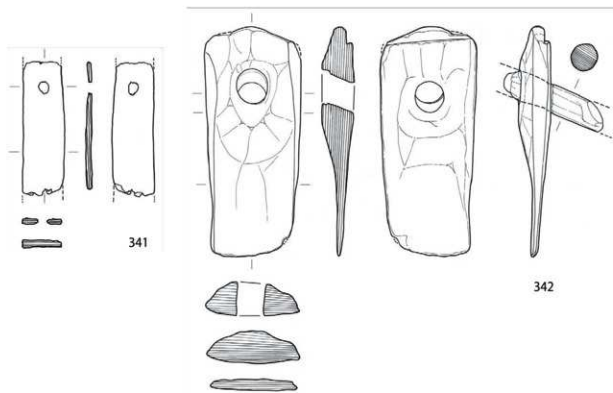
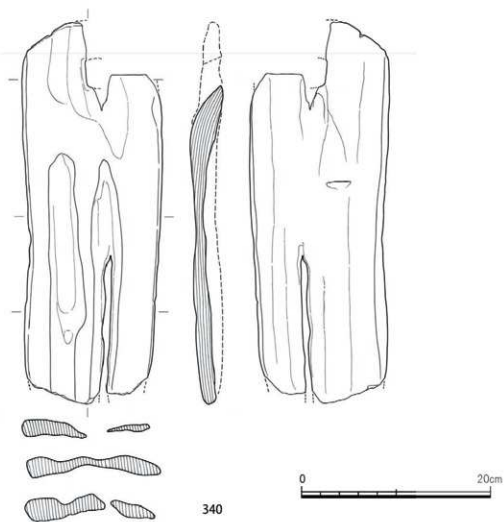


图 83 1013NR 出土木製品① (S = 1/4)

線刻を施す。小口にも一列の竹管文を施し、縁には刻みを施す。

338は土師質のミニチュア土器環である。縁には一ヶ所、小口状の半円形の窪みが存在する。小形丸底の体部下半を再利用した可能性もある。

339はサマカイトの石鐮である。無茎で、返りは鋭い。重量0.9gである。

1013NR 出土木製品 (図83・84-340~343)

340~343は1013NRから出土した木材(その多くはしがらみ構成材)のうち、木製品と呼べる資料である。いずれも高級アルコール法による保存処理を行っている。本来であれば保存処理を実施する前の状態を記録すべきであるが、実測等の詳細記録作業を行っておらず、報告図は保存処理後の状態である点に注意が必要である。

340は鎌先である。未製品であると考えられる。柁目材である。柄孔の穿孔部分に木の節と歪みが存在し、その影響で製作途中でひび割れが生じて放棄された可能性が考えられる。しがらみ1の構成材として出土している。

341は板状製品である。厚さ0.3~0.7cmの薄い板材で、直径1.2cmの円形孔が削り取られている。しがらみ1の構成材として出土している。

342は鎌の身と柄の先端部である。しがらみ3の構成材として、柄が差し込まれたままの状態出土している(図版61)。柄孔周辺は全体に隆起する形状である。頭部上端の持手側には、泥除を装着するためのものと考えられる小さな段が存在する。柄の断面形は円形である。

343は鋤である。一木鋤であると考えられる。刃部の断面形は三角形を呈する。肩部は柄から垂直に張り出すと考えられる。柄の断面形は円形から隅丸方形の範囲で部位によって異なる。しがらみ1の構成材として出土している。

1001SD (新) 出土遺物 (図85-344~358)

344は土師器鉢である。広めの平底である、外面はナデ調整、内面はハケ調整を施す。345は弥生土器壺の口縁部である。外面に円形浮文を貼り付け、その下に綾杉状の刻み目と凹線を巡らせる。346は土師器高環である。環部全体と外面脚部に縦方向のミガキを施す。脚部には円形スカシを三方向に穿つ。スカシを穿つ高さには若干のばらつきがある。347は小形丸底壺の体部である。外面に

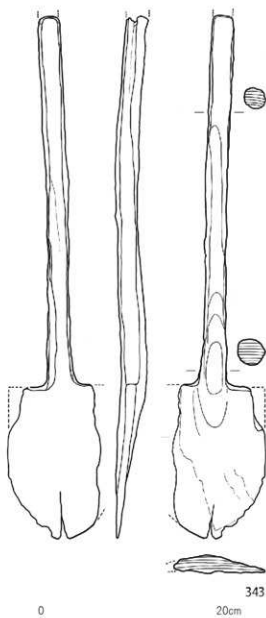


図84 1013NR 出土木製品② (S=1/4)

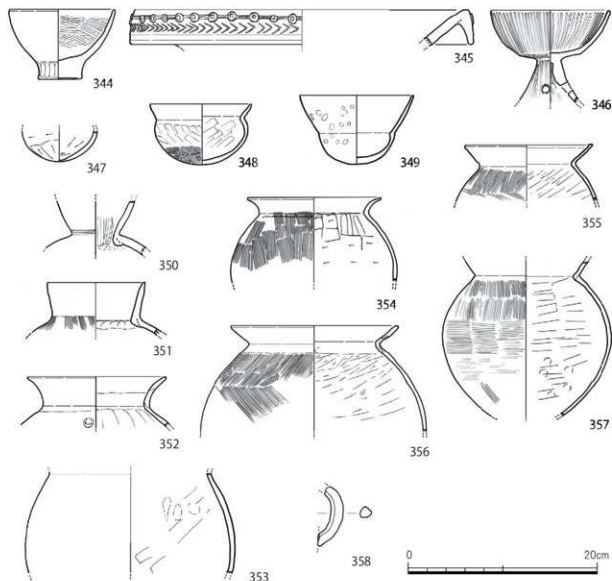


図 85 1001SD (新) 出土遺物 (S = 1/4)

はケズリを施す。遺存状態から、上部を打ち欠いて坏として二次利用していた可能性が考えられる。348・349は土師器小形丸底壺である。348は外面体部下半にハケ調整、上半にケズリを施す。全体に器壁が薄い作りである。349は外面全周に、意図的に行われたと考えられる直径0.3~1.2cm大の円形の浅い窪みが多数存在する。350は土師器細頸壺である。内面には接合時に頸部から体部へと折り返した粘土がそのまま残る。外面にはミガキを施していたと考えられ、頸部にわずかに痕跡が存在する。351は土師器直口壺である。口縁部は全体に厚手である。外面体部にハケ調整を施す。352は土師器広口壺である。外面体部に浅い竹管文状の窪みが存在する。353~357は土師器甕である。353は体部である。外面はナデ調整、内面はケズリを施す。内面には煤が薄く付着する。354は外面体部に細かなハケ調整を縦方向に施す。内面体部のケズリはやや粗く施す。外面肩部以下に煤が薄く付着する。355はハケ調整、ナデ調整、ケズリをいずれも丁寧に施す。外面口縁部に煤が付着する。356は外面体部にハケ調整を斜方向に部位によって向きを変えながら施す。外面全体に薄く煤が付着する。357は外面にハケ調整、内面にはケズリを施す。内面体部下半には指頭圧痕が目立つ。外面肩部以下と口縁部上半に分かれて煤が付着する。358は土師質の把手である。片側端部は体部と

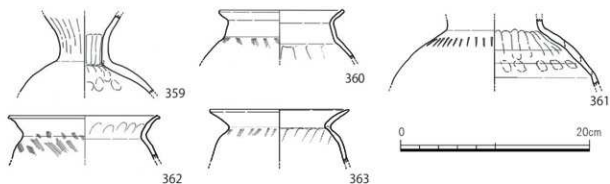


図 86 1001SD (古) 出土遺物 (S = 1/4)

の剥離面である。

1001SD (古) 出土遺物 (図 86—359～363)

359 は土師器長頸壺である。内外面にナデ調整を施す。内側頸部には絞り痕が残る。360 は土師器広口壺である。頸部はやや内傾し、口縁部は外に開く。外面体部に縦方向のハケ調整を施す。361 は細頸壺である。外面はナデ調整で仕上げ、頸部下にヘラ状工具先端の刺突痕を 0.5～1.0cm 間隔で巡らせる。362 は土師器甕である。外面にハケ調整を施す。内面体部はケズリの後、ナデ調整で仕上げる。363 は土師器甕である。肩部の屈曲が目立つ形状である。全体をナデ調整で仕上げる。

1001SD 出土杭 (図 87—364～368)

1001SD には堰状遺構として矢板杭が打設されている。この一部を持ち帰り、保存処理を行っている。対象は図 49 立面図に示した木樋南隣の矢板杭である。図 87 に示す実測図は、先述の河道出土木製品と同様に、保存処理後の状態を記録している。

364～368 は矢板杭である。長さ 81.8～107.1cm、幅 9.0～11.1cm、厚さ 3.3～5.3cm である。これらが 1001SD で使用された矢板杭の中で大型の部類であり、小型では長さ 30cm 程度のももある。地中に打ち込む先端部を三角形に削り出す。断面形は長方形を基本とするが、三角形に近い部分も存在するなどきれいな板材というわけではない。各外面には加工痕が存在するが、木の節を突起状にそのまま残す部分も存在する。

1025SX 出土遺物 (図 88—369・370)

369・370 は土師器甕である。369 は底部にごく小さな平底面が存在する。外面体部は右肩上がりのタキを施す。内面体部はケズリを施す。370 はわずかに下膨れの球形体部である。外面体部にやや粗いハケ調整を施す。肩部から体部中段にかけて薄く煤が付着する。

1026SX 出土遺物 (図 89—371・372)

371 は縄文土器深鉢の口縁部である。内側端部下に凹線が二条巡る。時期は縄文時代後期中葉である。372 はサヌカイト製の石礫である。無茎式で、返りはやや丸みを帯びる。重量 0.6g である。

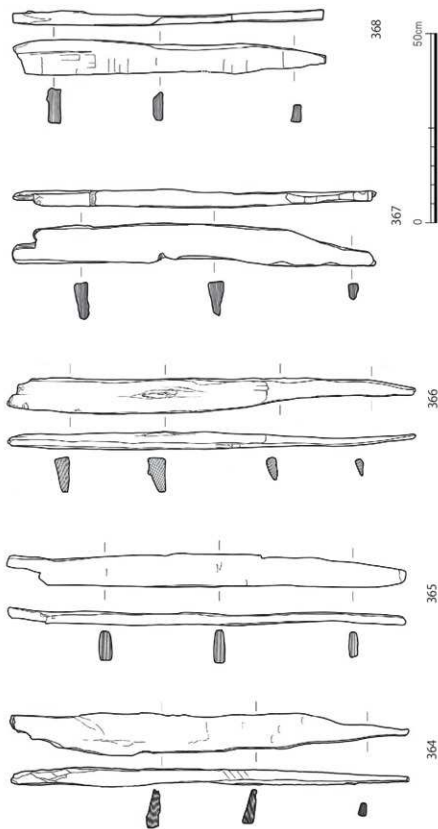


图 87 1001SD 出土杭 (S = 1/10)

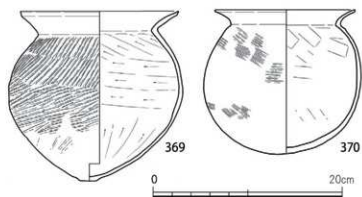


図 88 1025SX 出土遺物 (S = 1/4)

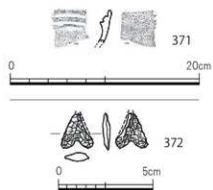


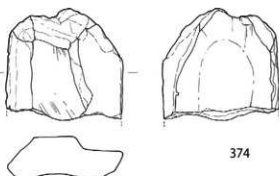
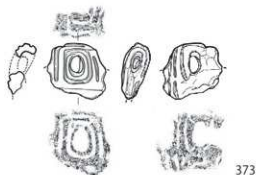
図 89 1026SX 出土遺物 (S = 1/4・1/2)

基本層序V層出土遺物 (図90-373~375)

弥生時代以降の遺構ベース層である基本層序V層からの出土遺物である。遺物量はかなり少ないが、縄文時代中期～晩期の縄文土器および石器が出土している。図化が困難な細片ばかりであるが、縄文土器の時期は後期が比較的多い。

373は縄文土器深鉢の口縁部である。正面観および側面観がどちらも輪状を呈し、輪に沿って凹線を施す。時期は中期末であると考えられる。

374は花崗岩の擦石・台石である。最も広い平坦面(図の右)には被熱痕が存在する。重量932gである。375はサヌカイト製の石鏃である。凹基式の無茎鏃である。重量1.8gである。



遺構面清掃時出土遺物 (図91-376~399)

調査時の遺構面清掃作業時に出土した遺物であり、本来は各遺構やベース層に伴う遺物であったと考えられる。

376~379は土師器皿である。376はて字状口縁の皿である。口径10.1cm、器高1.1cmである。ナデ調整を施す。内外面底部中央は指頭圧痕が存在す

図 90 基本層序V層出土遺物 (S = 1/4・1/2)

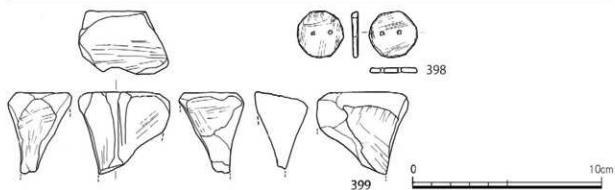
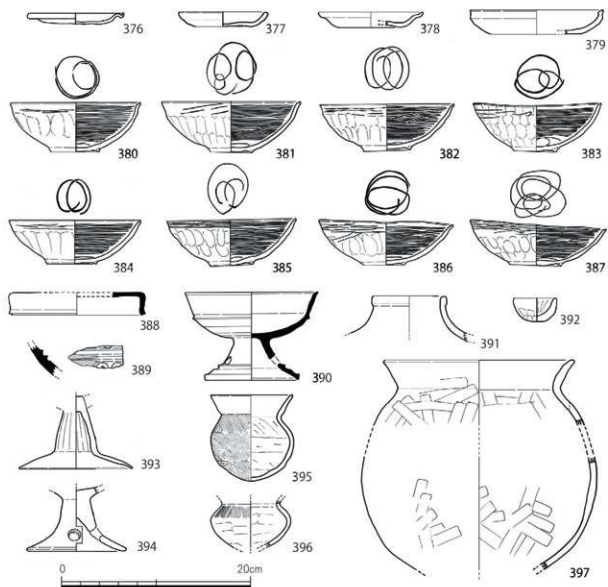


図91 遺構面清掃時出土遺物 (S = 1/4・1/2)

る。377は9.2cm、器高1.5cmである。全体をナデ調整で仕上げる。外面底部には指頭圧痕が残る。378は口縁部に段をもつ形状である。口径11.1cm、器高1.6cmである。全体にナデ調整を施す。379は口縁部が直立し、外面に面をもつ。口径13.8cm、器高2.5cmである。

380～387は瓦器境である。いずれも調査区南東部からの出土であり、本来は1012SXの埋土に含まれていた可能性が高い。380は口径13.6cm、器高5.1cmである。見込みには同心円状の暗文を施

す。381は口径14.6cm、器高5.3cmである。内面の圈線ミガキは下半の末端部分を一部に斜め方向に施す。見込みには連結輪状暗文を施す。382は口径14.1cm、器高4.9cmである。高台は一部が元から欠けており全周しない。内外面の広い範囲に重ね焼き痕が存在する。見込みには円形暗文を施す。383は口径13.5cm、器高4.3cmである。外面には面状の指頭圧痕が多数存在する。見込みの円形暗文は体部のミガキと一連で施す。384は口径13.8cm、器高4.5cmである。底部高台がやや広い形状である。見込みには円形暗文を施す。385は口径13.5cm、器高4.8cmである。外面には深めの指頭圧痕が多数存在する。内面に被熱痕が存在する。386は口径14.1cm、器高4.5cmである。高台は不整形で、断面形が三角形の部分と台形部分が存在する。見込みには同心円文を施す。387は口径14.3cm、器高4.2cmである。口縁部の形状は歪みが大きい。見込みには円形暗文を乱雑に施す。

388は須恵器蓋である。頂部は平坦で、古代の短頸壺の蓋であると考えられる。外面に濃緑色の釉が付着する。389は須恵器器台の裾部片である。外面に円形スタンプ文を横方向に密に並べる。390は須恵器無蓋高環である。脚部に円形スカシを三方向に穿つ。スカシの配置は偏りがある。裾部の横の下に深い凹線が巡る。

391は弥生土器あるいは土師器短頸壺の口縁部であると考えられる。表面の磨滅により調整は不明である。下端部に形状不明のスカシの一部が確認できる。392は埴形のミニチュア土器である。手づくね成形である。口縁部の高さにむらがある。393・394は土師器高環である。393は表面の磨滅により細かな調整は不明であるが、脚柱部に面取り状の痕としぼり痕が存在する。394は脚部上半が中実である。裾部には大きめの円形スカシを三方向に穿つ。395は土師器壺である。外面体部にハケ調整を施す。内面体部は底部中央を除きケズリを施す。396は土師器小形丸底壺の体部である。外面肩部にハケ調整を縦方向に施す。397は土師器甕である。内外面とも体部にケズリ後にナデ調整を施す。胎土は他の多くの土師器甕と異なり、色調も淡黄橙色を呈する。

398は緑泥片岩の双孔円盤である。重量3.2gである。399は砂岩の砥石である。長軸に沿う浅い溝状の窪みが一面にあり、棒状具の研磨にも使用していた可能性がある。

排水溝掘削時出土遺物 (図92-400・401)

調査区外周に掘削した排水溝から出土した遺物である。400は土師器壺の口縁部であると考えられる。外面に縦方向のミガキを施す。体部との剥離面が確認できる。401は土師器小形丸底壺である。内外面にナデ調整を非常に丁寧に施して平滑に仕上げる。

重機掘削時出土遺物 (図93-402~413)

402は土師器皿である。口径15.8cm、器高2.8cmである。外面の一部に煤が薄く付着する。403は瓦器塊である。復元口径14.5cm、器高4.8cmである。高台は細い台形である。見込みの暗文は連結輪状であると考えられる。

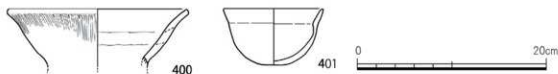


図92 排水溝掘削時出土遺物 (S=1/4)

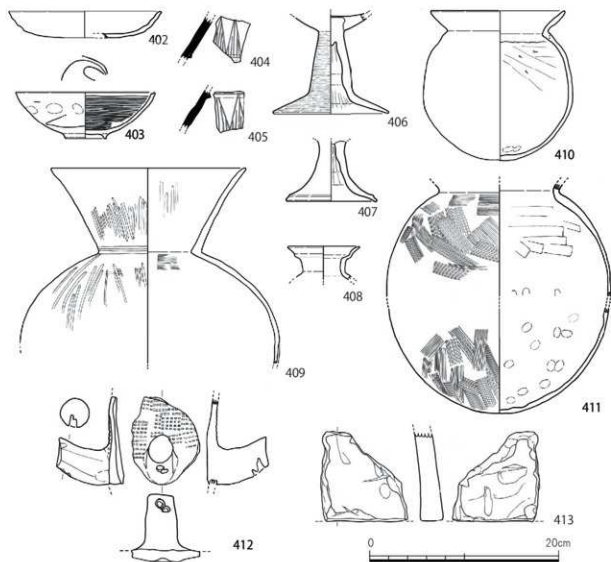


図93 重機掘削時出土遺物 (S = 1/4)

404・405は須恵器器台の坏部片である。三角形を縦線で充填する文様を施し、404は文様の下側に、405は上側に、それぞれ粘土を貼り付けた稜を巡らせる。404と405は同一個体である可能性がある。

406・407は土師器高環である。406は外面脚部全体に横方向のミガキを施す。脚部と坏部との接合方法が断面確認できる。407は外面に丁寧なナデ調整を施す。全体の形状は須恵器高環に似るが、胎土・焼成は土師器である。408は土師器二重口縁壺である。内外面ともナデ調整を施す。409は土師器壺である。外面は縦方向のミガキを基本とし、頸部にのみ横方向に巡らせる。内面体部はナデ調整で平滑に仕上げられており、一部にハケ痕が残る。410は土師器甕である。外面口縁部から体部上半にかけての範囲に被熱による表面の剥落が存在する。411は土師器甕の体部である。外面肩部以下に煤が薄く付着する。412は土師器甕の把手である。把手下面先端付近に支え棒痕が二ヶ所に存在する。413は土師器甕である。底面の破片であると考えられ、接地するとやや内傾する。

第IV章 総括

第1節 調査成果のまとめ

今回の発掘調査では、時期が明確なものとしては弥生時代後期以降の遺構が存在することを確認している。遺物は、これより古い縄文時代中期から弥生時代中期にかけての時期の遺物も出土している。遺構の時期は、大きく弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代中期、平安時代後期～鎌倉時代の三時期に分かれる。第III章第2・3節で述べたとおり、発掘調査時と今回の報告内容とで基本層序や遺構の時期的まとまりについて認識が変更されている部分が一部存在する。以下に時系列順で今回の調査成果についてまとめる。

縄文時代については、遺構は存在しないが遺構基盤層（基本層序V層）や後世の遺構埋土等から少量ながら遺物が出土している。出土遺物は縄文土器と石器がある。時期は縄文時代中期後半、後期、晩期が断続的に存在する。縄文土器は全体像が復元できるような資料は無く、小片である。

弥生時代以降は、遺構・遺物が多く見られるようになる。河道1013NRは今回の調査における主要な遺構のひとつである。1013NRは南隣の調査地（『新堂遺跡V』）で確認された河道NR170・NR397と同一の河道であると考えられる（図94）。1013NRは少なくとも弥生時代後期には調査区内を流れていたことが確認でき、弥生時代後期から古墳時代前期前半にかけての遺物が多く出土している。これらの遺物と混ざる形ではあるが、弥生時代中期以前の遺物も出土している。弥生時代中期以前の遺物は長く流水に晒された状態のものが多い。上流側にあたる調査地の南方には川西根成柿遺跡等の弥生時代遺跡が存在しており、関連性が想起される。調査地における1013NRが弥生時代のどの段階にまで遡るかは不明である。

古墳時代初頭～前期には1013NR内に木組みのしがらみ遺構が構築され、1013NRからの導水路であると考えられる1001SDが掘削されるといった大規模な活動が確認できる（『新堂遺跡V』・『新堂遺跡VI』では庄内式期～布留0式期を古墳時代初頭として扱っている）。1013NR内に構築されたしがらみ遺構1・2・3と1001SDには時期的段階差が確認でき、まず庄内式期にしがらみ2・3と1001SD（古）が構築されたと考えられる。これらの遺構の時期的前後関係は不明であるが、しがらみ3が河道の屈曲部に構築され、そのすぐ上流に1001SD（古）の取水部が位置することを考えると一体の構造である可能性は高い（図34）。1001SDと併行する位置にある1008SDについても同様の溝である可能性があるが、遺物が出土しておらず詳細は不明である。しがらみ3は木材が倒壊した状態で出土しており構築時の状態は不明だが、機能としては制水・護岸の役割を果たしていたと考えられる。1001SDは河道1013NRから枝分かれするような形で北西方向へ直線的に掘られた大型の溝である。河道の水を北西方向へ導くための溝であると考えられ、流水の勢いを制御するため溝の長軸に直交する形で矢板杭列が打ち込まれている。1001SD（古）は庄内式期～布留式期古段階のいずれかの時期に一度埋没し、その後わずかに西に移した位置に1001SD（新）へと掘り直しが行われている。この際、取水部の位置はやや南に移動し、また、溝の北部底面には木樋が設置されている。布留式期古段階には1013NRの北側にしがらみ1が新たに構築される。しがらみ1の木組み部分は構築時の状態を概ね保った状態で出土している。しがらみ1は河岸と直交する方向に構築されている。

制水目的の構造物であると考えられる。しがらみ1と1001SD(新)は布留式期古段階のうちに埋没している。ただし、しがらみ1については、埋没後も河岸沿いに存在する塊として制水機能を果たしていた可能性は高いと考えられる。この後、古墳時代前期前半、布留1式期のうちに1013NRは調査区内においてほぼ埋没する。河岸の位置が調査区より東側へと移った後、どの時期まで活動が継続していたかは不明である。

1013NRの大部分が埋没した後、やや空白期間を挟んだ古墳時代中期になると、再び遺構が形成されるようになる(図17)。古墳時代中期の遺構は複数の土坑、落ち込みがある。遺構の時期は中期後半を基本とし、中期末頃の遺構も多い。出土遺物には少量ながら中期前半のものを含む。古墳時代中期には河道(1013NR最上層)が調査区北東隅に位置を変えており、河岸から約10~30m西の地点に土坑や落ち込みが分布する。これらの中には遺物を多く含む土坑が存在する。出土遺物は須恵器、土師器、韓式系土器、製塩土器等、古墳時代中期の新堂遺跡に一般的に見られる遺物で構成されている。土坑の中には1004SKや1018SKのように鍋や甕、甕が捨て込まれた炊事を想起させるような遺構が存在する。その他では高坏が多数出土した1030SKや馬歯が出土した018SPも特徴的な遺構である。これらの土坑と河道との間の一帯、調査区北東部にはピットが多く存在しており小規模な構造物があった可能性もあるが、出土遺物が無く、古墳時代中期の遺構であるか中世の遺構であるか判別が付かないものが大多数である。

古墳時代後期から平安時代前半にかけての時期は、後世の遺構埋土および堆積層からごく少量の遺物が出土するのみであり、遺構は存在しない。この点は周辺の調査地点と同様である。

平安時代後期~鎌倉時代になると調査地での活動が再び活発となる。この時期の遺構としては耕作溝群、落ち込み、ピットがある。耕作溝群の形成時期は12世紀以降である。この時期以降、調査地のほぼ全域において耕作地として利用が継続していくこととなる。耕作溝からの出土遺物の時期は12世紀後半~13世紀前半が主で、一部に12世紀前半以前の遺物を含む。耕作溝以外の遺構では、調査区南東隅に位置する大型の落ち込み1012SXがある。1012SXは耕作溝より古い12世紀の遺構で、人為的に掘削・埋め立てられた広い落ち窪みである。周辺の調査で確認されている屋敷地との関係性が考えられる遺構である。

鎌倉時代以降、調査地一帯は近現代に至るまで耕作地としての利用が主であったようである。

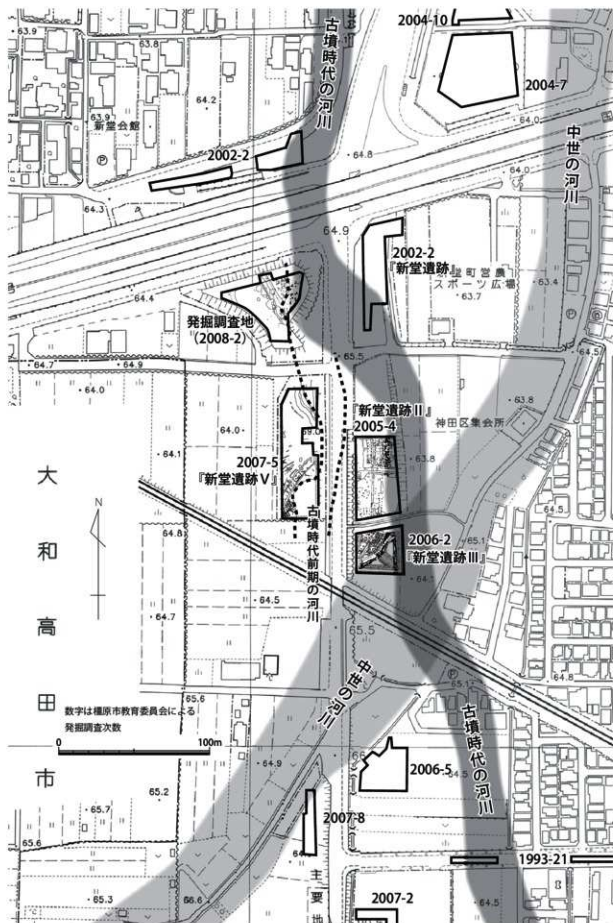


図 94 新堂遺跡・東坊城遺跡周辺の調査地と河道復元図 (S=1/3,000)

第2節 周辺の遺跡と環境

今回の調査で確認した遺構・遺物及び遺跡全体に関わる評価について、周辺の環境や他の調査成果と合わせて述べる。縄文時代、弥生時代後期～古墳時代初頭、古墳時代中期、平安時代後期～鎌倉時代はいずれも新堂遺跡の各地点および近隣の遺跡において遺構・遺物が確認される時期にあたり、これらを紡ぐことで地域像が浮かび上がる。

新堂遺跡の周辺では縄文時代後期以降、遺構・遺物の存在が増え始める。今回の調査では縄文時代中期末に遡る遺物ごく少量出土しており、この地域における遺跡形成の開始時期を検討する上で注目される。新堂遺跡の北半部や南に位置する東坊城遺跡では縄文時代後期～晩期の遺構が確認されており、今回の調査地点もその生活領域の一部であったと考えられる。

弥生時代については周辺の遺跡では各時期の集落や墓域等が確認されている一方、新堂遺跡では遺構・遺物が比較的疎な時期にあたる。その中であって今回の調査地および南隣の調査地（榎教委2007-5次『新堂遺跡V』）は、弥生時代後期に遡る可能性がある遺構や弥生時代前期～中期の遺物が確認されている地点である。古墳時代初頭にはこの地点において、河道や竪穴建物、河道に接続する大型の溝（導水路か）等の遺構が形成される。今回の調査地点では河道内に制水目的と考えられる大規模なしがらみ遺構を構築するといった活動も見られる。河道内からは弥生時代の遺物を含む多くの遺物が出土している。新堂遺跡では他の地点でも古墳時代初頭の遺構・遺物が確認されているが、今回の調査地点を含む遺跡南西部が最も多い。

古墳時代中期は、新堂遺跡で最も遺構・遺物が多くなる時期である。新堂遺跡の各地点において河道から多量の遺物が出土し、河岸に土坑や井戸、溝等の遺構が構築されるといった状況を確認している。今回の調査地点では、調査区北東隅に河道西岸が位置し、河岸から西に数十m離れた地点に複数の土坑が存在している。これらの土坑からは多くの土器が出土しており、一部には炊事活動との関係を想起させるものも含まれる。南東に約100mの調査地点（榎教委2005-4次『新堂遺跡II』）は同じく河道の西岸部にあたり、多量の須恵器・土師器・製塩土器とともに陶質土器や韓式系土器、鍛冶関連遺物といった特徴的な遺物が多数出土しており、一連の土地利用状況を示していると言える。この他にも新堂遺跡から曲川遺跡にかけての広範囲において河道とその沿岸部を中心とする地域を積極的に利用していることが確認できる。

今回の調査地を含む新堂遺跡の南部においては、平安時代後期から鎌倉時代にかけての時期に再び遺跡の形成が活発となる。先述の榎教委2005-4次調査地点では12世紀代に明確な区画溝を伴う屋敷地が築かれており、この一帯の中核的存在となっている。その周辺に耕作地が広がるのが発掘調査で明らかとなっており、今回の調査地もその一部である。ただし今回の調査区南東隅に位置する1012SXについては屋敷地と同時期の大規模な落ち込みであり、屋敷地の外に構築された関連施設である可能性がある。調査区北東部には耕作溝より古い詳細時期不明のピットが複数存在するが、これらも同様である。屋敷地は鎌倉時代前半のうちに廃絶し、以後、この一帯は広く耕作地としての利用が継続していくことになる。古代末から中世にかけての地域経営の在り方の一端を示す例と位置付けられる。

報 告 書 抄 録

ふりがな	しんどういせき6 一けいなわじどうしやうどう「ごせくかん」けんせつこともなうはくつちようさほうこくしょー							
書名	新堂遺跡Ⅵ - 京奈和自動車道「御所区間」建設に伴う発掘調査報告書一							
シリーズ名	橿原市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第18冊							
編者名	橿原市役所 魅力創造部 文化財保存活用課 石坂泰士							
編集機関	橿原市役所 魅力創造部 文化財保存活用課							
所在地	〒634-0826 奈良県橿原市川西町 858-1 TEL 0744-22-4001 FAX 0744-26-1114							
発行年月日	西暦 2022 年 (令和 4 年) 12 月 20 日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しんどう 新堂遺跡	ならけん 奈良県 かしはらし 橿原市 ひがしはらひやま 東坊城町	29205	14C545A	34° 29' 49"	135° 45' 38"	2008/7/2 ～ 2008/12/26	2,050 ㎡	京奈和 自動車 道建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
新堂遺跡	集落	弥生時代後期 ～古墳時代初頭		河道（しがらみ）・溝		縄文土器・弥生土器 土師器・石器 石製品・木製品		橿教委 2008-2 次調査
		古墳時代中期		河道・土坑・落ち込み ピット		土師器・韓式系土器 須恵器・製塩土器 石製品・馬歯		
		平安時代後期 ～鎌倉時代		落ち込み・ピット 耕作溝群		土師器・須恵器 瓦器		
要約	<p>弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代中期、平安時代後期～鎌倉時代の遺構が存在することを確認している。縄文時代中期～弥生時代中期に遡る遺物も出土している。</p> <p>弥生時代後期～古墳時代前期の遺構には河道と溝がある。河道からは古墳時代前期以前の遺物が多く出土している。古墳時代初頭には河道内に制水目的のしがらみ遺構が構築され、河道からの導水路と考えられる大型の溝も掘削される。庄内式期から布留式期にかけての期間に、しがらみ遺構の造り直しや導水路の掘り直しといった管理が継続している。河道は古墳時代前期前半のうちに大部分が埋没する。</p> <p>古墳時代中期には土坑群が形成される。これらは、近隣の調査で多量の遺物が出土している古墳時代中期河道の西岸から西に約数十mの地点に位置する。土坑からは土器を中心とする多くの遺物が出土しており、その多くは中期後半の遺物であるが、一部に中期前半の遺物を含む点は近隣の調査地点と同様である。</p> <p>平安時代後期～鎌倉時代初頭、12世紀代には調査地は耕作地となり、以後、近現代に至るまでその在り方が継続する。</p> <p>古墳時代中期および平安時代後期～鎌倉時代の遺構は、南東約100mの地点で実施した調査（橿教委2005-4次調査『新堂遺跡Ⅱ』）で同時期の遺構・遺物を多数確認しており、その縁辺部にあたと理解できる。</p>							



調査区全景 航空写真（南から）



調査地中景 航空写真（南から。奥は国道24号線新堂ランプ）

図版 2



調査地中景 航空写真（西から）



調査区全景 航空写真（俯瞰撮影。上が南）



調査地遠景 航空写真（北西から。中央や下が調査地）



調査地遠景 航空写真（西北西から。中央や上が畷傍山）

図版 4



調査地遠景 航空写真（南西から）



調査区全景 耕作溝群完掘状況、遺構検出状況（西北西から）



調査区全景 耕作溝群完掘状況、遺構検出状況（北東から）



調査区東部 耕作溝群完掘状況、遺構検出状況（南西から）

図版 6



調査区北東部 耕作溝群完掘状況、遺構検出状況（北西から）



調査区北東部 耕作溝群完掘状況、遺構検出状況（南東から）



調査区東部 耕作溝群完掘状況、遺構検出状況（東南東から）



1002SD 検出状況（北から）



1012SX 検出状況 (南東から)



1012SX 完掘状況 (南から)



調査区北東部 土坑・ピット群完掘状況、1013NR 検出状況（北から）



調査区北東部 土坑・ピット群完掘状況、1013NR 検出状況（北北西から）



1003～1007SK 検出状況（北東から）



1003SK 土層断面（北西から）



1004SK・1006SK 土層断面（東から）



1006SK（新）土層断面（西から）



1006SK（新）土器出土状況（北西から）



1007SK 遺物出土状況（北から）



1007SK・1006SK（新）土層断面（北から）



1004SK・1006SK・1007SK 完備状況（南から）



1010SK 土層断面（東から）



1011SK 遺物出土状況（北東から）



1018SK 遺物出土状況（北から）



1018SK 上半部土層断面（北から）



1018SK 下半部土層断面（北から）



1019SK 遺物出土状況（北から）



1020SK 土層断面（北から）



1020SK 遺物出土状況（北から）



1020SK 下半部遺物出土状況（北から）



1021SK 検出出土状況（北西から）



1021SK 遺物出土状況（北西から）



1023SK 土層断面（北から）

図版 14



1024SK 土層断面 (北から)



1028SK 遺物出土状況 (北から)



1030SK 土層断面 (南から)



1003SK・1005SX・1008SD 土層断面 (北西から)



1030SK 遺物出土状況 (南から)



1017SX 遺物出土状況（南から）



1017SX 完掘状況・1008SSD 検出状況（南から）



1033SX 完掘状況（北西から）



1033SX 南北畔土層断面（西北西から）



018SP 馬函出土状況（北から）



161SP 遺物出土状況（北から）



051SP 土層断面（北から）



土器溜まり遺物出土状況（北から）



1013NR 検出状況（南東から）



1013NR 完掘状況（北北東から）



1013NR 完掘状況（北から）



1013NR 大畦土層断面（北西から）



1013NR 南端部土層断面（北北西から）



1013NR 完掘状況（北東から）



1013NR・1001SD 完掘状況（南東から）



1013NR しがらみ出土状況（南から）



1013NR しがらみ出土状況（南西から）



1013NR しがらみ1 出土状況（南東から）



1013NR しがらみ 1 出土状況 (南から)



1013NR しがらみ 1 出土状況拡大 (南東から)



1013NR しがらみ 1 出土状況 (東から)



1013NR しがらみ 1 出土状況 (西から)



1013NR しがらみ 1 西端部背面 (北北西から)



1013NR しがらみ 1 出土状況 (南西から)



1013NR しがらみ 1 東端部土層断面（西から）



1013NR しがらみ 1 下層横木出土状況（南西から）



1013NR しがらみ 1 東端部出土状況（北から）



1013NR 掘出土状況（北東から）



1013NR しがらみ 1 西端部出土状況（西から）



1013NR しがらみ 1 中央部 横木出土状況（南から）



1013NR しがらみ 1 背面土器出土状況（北北東から）



1013NR 掘出土状況（西から）



1013NR しがらみ 3 出土状況 (南南東から)



1013NR しがらみ 2・3 出土状況 (東から)

図版 24



1001SD・1008SD 完掘状況（北西から）



1001SD 完掘状況（南東から）



1001SD 土層断面 (東南東から)



1001SD 北端部検出状況 (北西から。拡張区)



1001SD 中央部完掘状況 (北西から)



1001SD 北端部完掘状況 (北東から)



1001SD 木樋周辺土層断面 (北西から)



1001SD 木樋北端部土層断面 (南東から)



1001SD 北半部畔土層断面 (東南東から)



1001SD 木樋南側畔縦断面 (南西から)



1001SD 南半部 欠板杭列出土状況（南東から）



1001SD 木樋出土状況（東南東から）



1001SD 北半部 木礎・矢板杭列出土状況（南東から）



1001SD 木礎出土状況（南東から）

図版 28



1001SD 木樋出土状況（北東から）



1001SD 大塚土層断面（北西から）



1001SD 矢板杭列断層断面（東南東から）



1001SD 木樋底板出土状況（東南東から）



1001SD 木樋底板除去後（南東から）



1002SD 完掘状況（北北西から）



1002SD 土層断面（南南西から）



1008SD 土層断面（北西から）



1001SD・1008SD 完掘状況（南東から）



調査区全景完掘状況（南東から）



調査区全景完掘状況（北西から）



調査区東半部完掘状況（北西から）



調査区全景完掘状況（北東から）



調査区東半部完掘状況（南西から）

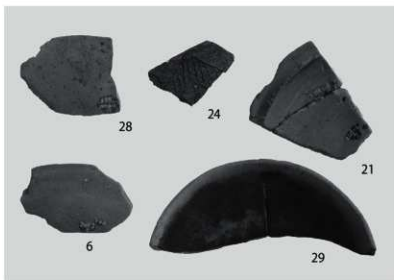


調査区全景 航空写真（俯瞰撮影。上が北）



図版 34

耕作溝、1012SX出土遺物

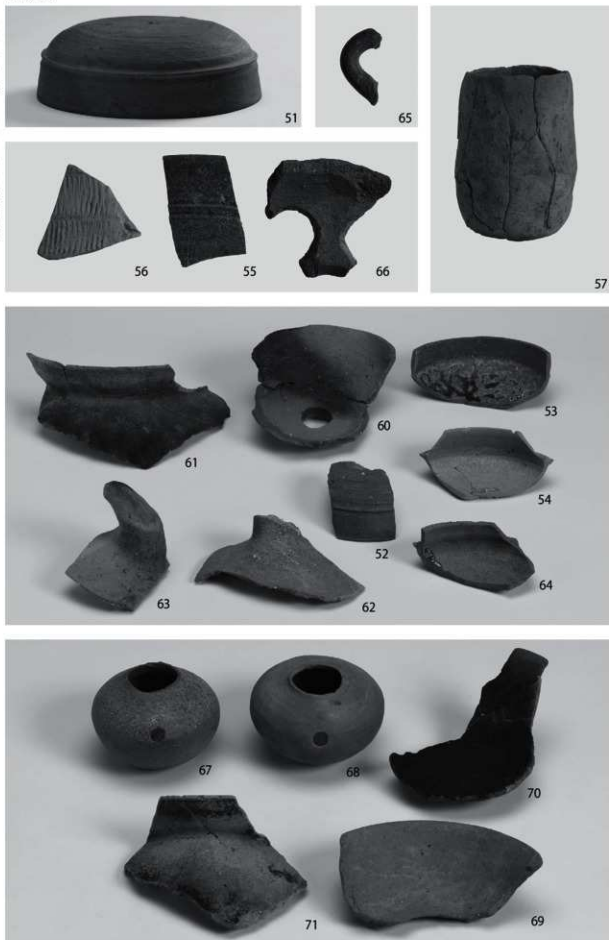


1012SX、1013NR、1003SK、018SP、1026SX 出土遺物



図版 36

1004SK、1006SK
出土遺物





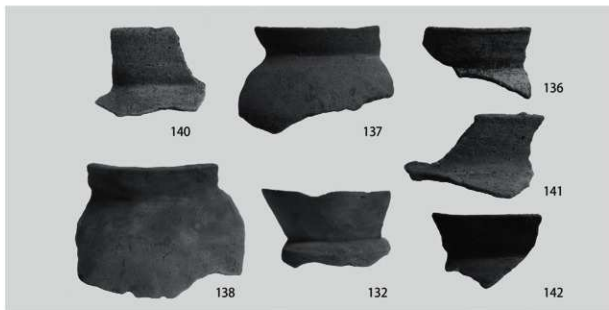
1007SK、1010SK、1016SX、1021SK 出土遺物



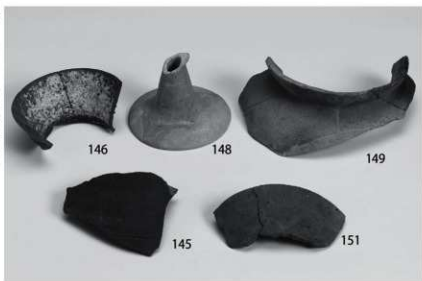
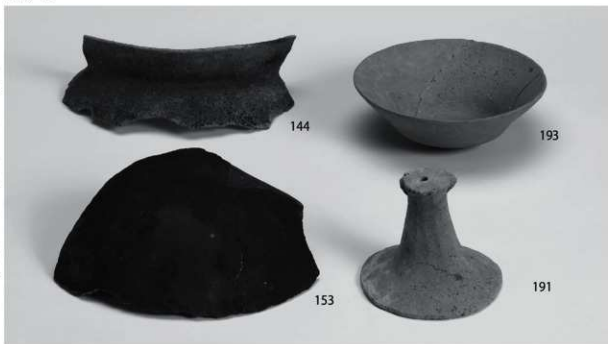


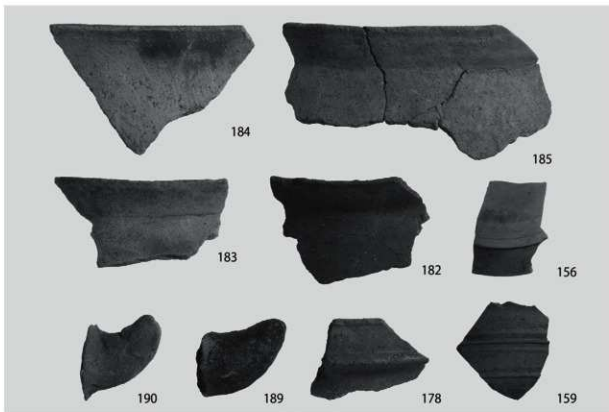




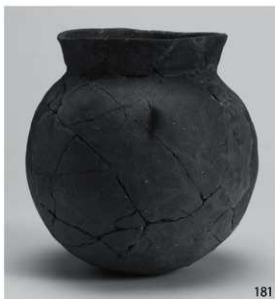


1021SK、1023SK、1028SK、1016SX、1017SX出土遺物









図版 46

1017SX、1033SX、018SP、161SP、SP一括出土遺物

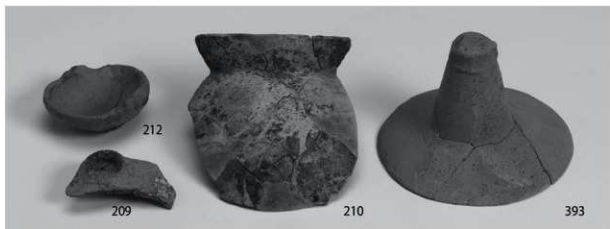




206



208



212

209

210

393



211



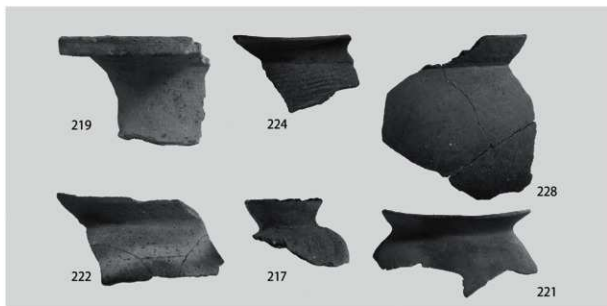
213



214



215





229



226



230



231



232



233



234



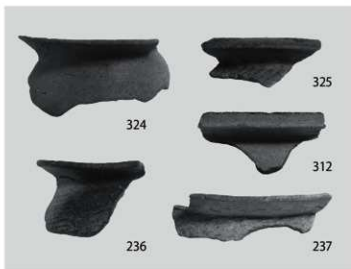
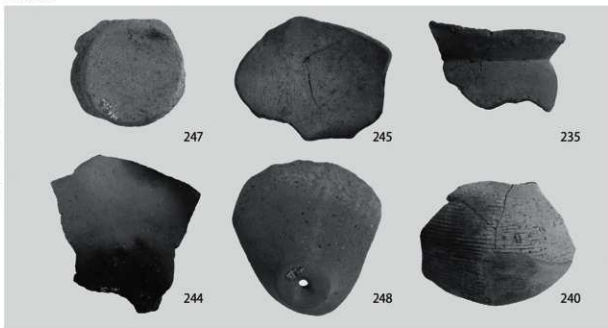
239



246

図版 50

1013NR下層・一括出土遺物





249



250



251



252



253



257



256



261



263



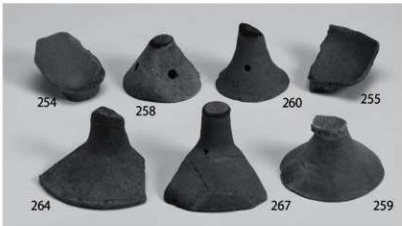
262



266



265



254

258

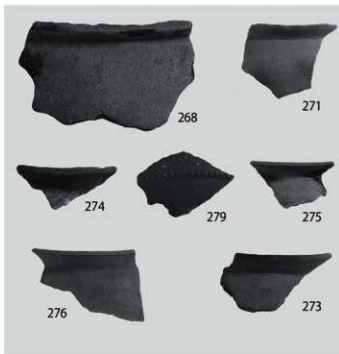
260

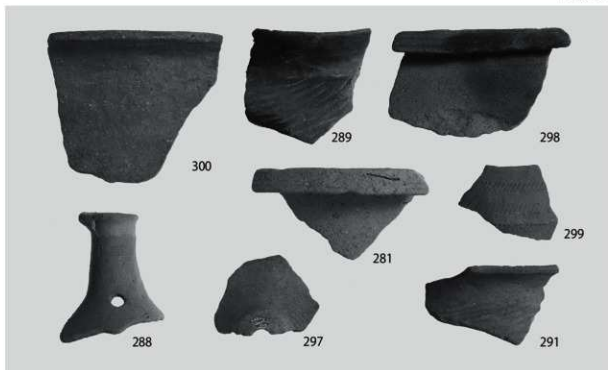
255

264

267

259





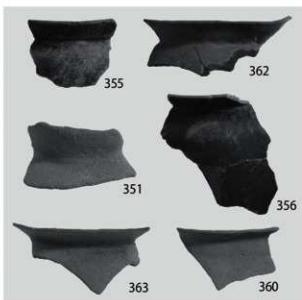
図版 54

1013NR一括・しがらみ2・3、1026SX、
遺構面清掃時出土遺物





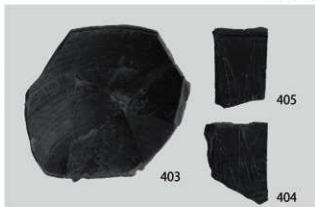




图版 58

遺構面清掃時出土遺物





圖版 60

重機掘削時、018SP 出土遺物





342



342



342



343



343



340

図版 62

1001SD出土木製品



橿原市埋蔵文化財調査報告 第18冊

新堂遺跡Ⅵ

—京奈和自動車道「御所区間」建設に伴う発掘調査報告書—

発行年月日 令和4（2022）年12月20日

編集・発行 奈良県橿原市役所

印刷 株式会社 サカタ企画印刷

奈良県磯城郡田原本町松本131-1